
貴く翔べ

風雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴く翔べ

【Nコード】

N5984Z

【作者名】

風雷

【あらすじ】

突然、異世界に放り込まれたらどうしますか？ その世界が耐えられないほどに理不尽だったらどうしますか？ あなたは、それに立ち向かいますか？

【更新状況】 2012/1/8 第三章（10）（11）追加

第一章「原初の声」(1)

湯山翔ゆまかけるという男がいる。よく間違えられるが、「ゆやま」ではない。

背は高く、瘦せうく軀である。目つきが少し悪いが、笑うと大きな笑窪えくぼができる。鼻筋がしっかりしていて、よくみると美顔であるようにもみえる。ただ、猫背なのと腹から声を出さないせいで、彼を遠くから見た人は、なにやら陰気な印象を受ける。

話してみるとわかることだが、非常におしゃべりで、自分の得意な話題になると何時間でも話し続ける。相手が聞いているかいなかはどうでもよいらしく、それもそのはずで、彼は話しながら自分の考えをまとめる性質たちなのだ。その典型として、他人の話——特に自分が興味を持ってない話題——を聴かない。会話イコール思考であるこの人種は、実に自由詩的な——つまるところ非機能的な——思考回路を持っているのだが、それ自体が言語を超越した自己完結に終始しているために、論理立てての熟考やディベートなどに関しては哀れなほどに無能だ。この手の人間は自分の知らないところで敵をつくるが、どこか憎みきれない一種の愛嬌あいきょうも持ち合わせている。

湯山は本が好きだ。

とはいえ、小難しいものは読まず、やや現実離れした歴史ものなどは彼の嗜好しこうによく合っている。

二十六という年齢は、冒険や幻想を現実を持ち込みたくなるくらいに憧あこがれるには、随分と遅い。故に彼は、精神が子供じみた憧憬しょうけいを脱ぎ捨てることなく年を重ねてしまった者の一例として、書物から故人の生き様を知り、それを楽しむ事で自分の人生の心細さを慰めている。暇な時間に歴史小説などを取り出して、それを読むくらいでしか、湯山は生きる虚しさを忘れる術を知らなかった。

「湯山の血は古いぞ」

と、足が悪いくせに未だに警備員の仕事を続ける父が、酒臭い息

と一緒に吐く言葉が、湯山にとってはやりきれないことがある。

どうやら、湯山家は何代か前には大陸に住んでいて、遡ればどこかの王家に繋がっているらしい。父が言うには、湯山はもとは唐山とうざんであり、これは大陸の洒落しゃれた呼び名である。

「アホくさ……」

湯山家の現状を知れば、彼の嘆きもわかるだろう。何百年も昔の王侯貴族の後裔こういらしいこの家は、どう考えても豊かではなく、当の父は安月給の警備員で朝も夜もなく働いており、派遣社員を勤める湯山自身も、ひとつどころに留まることもできずに、昨日知り合った相手に顎あごで使われる日々をすごしている。

その癖、父から実を伴わない家格ばかり言い含められたせいとか、妙に誇り高い。

分不相応というべきだろう。幼い頃、少しばかり勉強ができたことで、母が期待をかけ過ぎたせいもあるが、とにかく湯山は高校時代に挫折を味わい、大学に進学しても周囲に溶け込めずに、学費を稼ぐという名目でアルバイトに打ち込み、ついには退学してしまった。

それでいて人に使われたくないという戯言たわごとを抜かす男に、何かを報いるという機能を、世間は持っていない。

「もうちょつと高けりゃなあ……」

給与明細を破り捨てながら、つぶやく。湯山はこんな男だった。

世間が自分の能力を生かすように出来ていないのだ——と思うほどには、湯山は世間知らずではない。人の能力とは、その者が革命家か芸術家でもない限りは、人間社会にどう適応するかで優劣が決まる以上、右の言葉は自分の無能を棚に上げて、賢さかしらに叫んでいるに過ぎない。そんな恥ずかしい真似をしでかすほどには、この男は馬鹿ではない。

誇り高いと書いたが、周囲から見るとそうでもない。他人に馬鹿にされても、へらへらと笑っているだけで、およそ湯山の周囲の間はこの男が怒っているところを見たことがない。ただし湯山本人

は自分が短期であることを自覚しており、それが露わになるような状況を常に避けている。

湯山は自分が時々わからない。

——あなたはこうなのよ。

と、やさしく——あるいは厳しく、指し示してくれる恋人や友もない。彼らも多分、湯山のことがよくわからないのだろう。だろ
うどころか、面と向かって言われることすらある。

「——てめえは自分のことがわかるのかよ？」

そうやって言い返してみるが、はつきりいって湯山にはどうでもよかった。自分のよくわからない箇所、というのは何やら気宇の大きな人みたいで、どこか好いていた。こういう意味では湯山は自分が好きな人間である。

彼にとつての一大事は、よくわからない自分のことではなく、生きていることに退屈を感じ始めた自分がいることだった。

以前はインターネット上で特定の人物がバッシングされているのを見ても、祭気分で無意味に騒ぎ立てる連中に腹を立てたが、最近
は彼らに近い視点でものを見るようになった自分に気づいた。

——滅びろ。滅びろ……

自分が下衆な趣向を喜ぶようになったことよりも、人の不幸を楽しむ理由がただの退屈であったことが、はつきり言って湯山には苦痛だった。

「つまらない……」

自分の生き方が、何よりましてつまらない。

退屈は人類の敵である。

と、いいたいくなるのは、湯山が——その小心さからはちよつと考
えられないが——面白さ目当てに悪事に手を染めたことだ。

勿論、当の本人は金目当てのつもりだが、少し頭を働かせれば、
ほんのはした金を得るのにわざわざ危険と罪悪を同時に担ぎ込む必要はない。こういったものに首を突っ込む楽しさは、大抵の人間は

十代の頃に脱ぎ捨ててしまおうのだが、平穩かつ陰鬱な学生時代を過ごしてきた湯山にとって、これは眩まぶしいくらいに新しい体験だった。
(悪いことをすれば、いずれ捕まる……)

捕まるのは悪事を続けるからだ、湯山は思い込んだ。なに、右も左もわからない老人から小遣いを貰うだけだと、湯山はかすかに芽生えた罪悪感を握りつぶした。

(俺は器が小さい……)

と、湯山が頭を抱えなくなるくらいに悩んだのは、老人をだまくらかして小金を得たことではなく、結局のところ罪悪感に耐えかねた自分が、盗んだ金を丸々老人に返してしまったことだ。無論直接ではなく、郵便受けにしのばせるという、いかにも小心丸出しの方法で。

「退屈でなけりゃあ、良いのさ」

自分を慰めても虚しさは止むどころではなく、さらには冷や汗をかくほどに怖気おしけづいているのは、彼が同じく悪事に手を染めた仲間を裏切ったからだ。湯山の知り合いの中でもずいぶんと性質の悪い男で、今回の失敗をだしにこれから付きまとわれるようになるかもしれない。

(逃げたい!)

と思ったのは一瞬で、すぐに腹が据わった。熟考して覚悟を決めたのではなく、思考を停止することで結論を早めたのだ。湯山にはこういう想像力の欠陥からくる樂觀癖がある。

第一章「原初の声」(2)

いつものようにボロ車を出して会社へと向かう途中だった。

案の定、例の悪友につけまわされた。

悪友にも彼なりの事情がある。こういった悪い話を手軽に持ち込んでくる輩は、往々にして他にも繋がりをもっており、湯山が失態を犯したせいで責任を追及される立場に陥った。湯山の人の良さにつけこんで、とりあえずは利用してみたが、彼も流石に人選を誤ったことを後悔した。

(脅すか……)

窮まれば湯山から金を^{むし}耄り取ればいい。あんな小心な男、少し脅かしてやれば、自分可愛さに誰でも騙す様になるだろう。出来なければ湯山の親をゆする。それだけの単純な作業だ。

「まずは挨拶代わりだ」

そういつて、悪友は湯山の乗る車を追い回した。この行為自体に大した意味はないが、湯山の恐怖心を煽り、「この男からは絶対に逃げられない」という強迫観念を植え付けるために必要な、一種の儀式である。

湯山がバックミラーから覗き込んだのは、そんなことを事も無げにやってのけようとしている悪友の姿だった。鼻筋と目が細く、長い顔である。嗤うと目元に怪しいしわが出来る男だ。

「木田、てめえ。嗤ってやがる！」

心のどこかで悪友のことを軽蔑してきたせいか、恐怖よりも先に怒りが立った。

会社までついてこられては叶わないと、信号が切り替わるとともにアクセルペダルを勢いよく踏んだ。早朝であることもあって、少し混み気味だが、下手に空いているよりは撒きやすい。湯山は強引に割り込みを繰り返して追尾する木田を振り切ろうとした。だが、相手もこういった手合いはお手の物だろう。吸い付いたように離れ

なかった。

しきりに携帯電話が鳴っているが、見ずともわかる。次第に双方ともなりふりかまわなくなった。あたりの目を^{はばか}憚らずに猛追と逃走を始めた。

流石の湯山も退屈を捨て去った自分を感じる暇はなかった。大抵、退屈を嘆く人間というのは本質的に平穏を愛しており、しかし時間の使い方という、人間の価値そのものとも言うべき点において、哀れなほどに無能あるいは無頓着な場合が多い。湯山もその一人だった。

携帯電話が鳴っている。

「あれ？」

違和感。

これ以上にならないほどに非日常にいるのだから今の湯山は違和感で埋め尽くされているといつてよい。それにすら慣れ始めた頃、湯山は眼前に最も訝しい現象を見つけた。

(こんな音、俺じゃないぞ……)

携帯電話がけたたましく鳴っている。それが木田からのものであることは間違いない。だが、その音とエンジン音に混ざって、脳を貫くような裂音が聞こえる。

(いや、やっぱり携帯が鳴ってる)

耳障りなアラーム音に混ざって、それは確かに聞こえる。木田のせいで携帯電話が壊れたと思った湯山だったが、つい気になって、手にとってしまった。

「朝っぱらから一体何なんだよ。てめえはよ！」

車内に湯山の怒号が響いた。

だが、繋がった先は木田ではなかった。

——…こそ

風鈴の音のような細かい音が静かに響いた。どうしようもないほどの目まぐるしさの中にいるのに、どういうわけか、湯山はそれを聞き取ってしまった。

「こそ？」

顔が熱を帯びてきた。自分の発した言葉がどこかでこだましているような感覚がする。

——…こそ……よ……そ

（女の声……いや、子供か？）

それも一人とも思えない。受話器の向こう側に数人の気配のようなものを、湯山は感じ取った。

すう——と、あたりが静かになったと思ったのは、湯山の神経が片手にとった携帯電話に集中していたからだ。だが、次の瞬間、湯山を覆っていた静けさが一気にはじけた。

——……よう……そ……こそ……うこそ……ようこそようこそようこそようこそようこそ…

「うわぁ！」

叫ぶと同時に、目の前が真っ白になり、暗くなった。

——どこだ。ここは？

などという、古典的な台詞を吐くようには、湯山は出来ていなかった。

「おおお？」

奇声なのか悲鳴なのか、どちらつかずの声をあげた湯山はみだりに車外に飛び出すような真似はしない。

何せあたり一面荒野である。所々、茫々ぼうぼうと草が茂っていて、他はやや乾いた黄土が見える。もちろん、道路らしきものはない。上を向けば、雲ひとつない、死んだように蒼い空が広がり、太陽の光だけが異様にまぶしい。

ほんの数秒前まで、都心を車で走っていた自分が、何故こんなところにいるのか。

（神隠しか、死んだかだな——）

後者だとすれば、あの世も随分と殺風景なところだ——と、湯山は鼻で嗤った。別に湯山は抜けているわけではない。もし傍に道連

れになった誰かがいたとしたら、その者に抱きついて絶叫しただろう。

たった一人である——ということが、湯山がパニックを起こさない唯一の理由だった。とはいえ、周囲に自分と同じように、この怪異に巻き込まれた人がいないかは、静かな雰囲気とは裏腹に顔面を蒼白にして確認した。この男が他人からよくわからないと言われる所以のひとつは、自分の表情を自覚していないことだろう。周囲を一望して誰もいないことを確認すると、小さく嗤ったのだ。

勿論、こけおどしだ。こうやって自分で自分を励まさなければ、どうにかしてしまいそうだ。

——木田を撒けた。

という事実によって得た安心も少しはあった。最悪の状況を考えれば、見も知らぬ土地にいきなり迷い込んで、しかも木田と二人きりという可能性もあった。この期に及んであんな顔を見ずに済むなら、ひとりの方が良い。

ふと、携帯電話を手にとって見てみた。あまり期待していなかったが、電波は届いていない。最後の着信は木田になっており、あの妙な女か子供のような声は何だったのかは想像すら出来ない。

少し、車を走らせてみたが、凹凸のひどい地面のせいか、すぐにエンストを起こした。無闇に燃料を消費するわけにはいかず、冷房を切ったために、燃えるように暑い。それでも湯山が車外に出なかったのは、ひとつは草陰にたむろする狼の群れを遠望したからだ。

「はは、洒落しゃれになってねえや……」

ようやく、と言うべきか、湯山は事態の深刻さを飲み込んだ。

全く未知の世界に放り出されたわけだが、せめて（木田以外の）人の姿を見つけない。

しばらく走ると、日が暮れてきたので、湯山は車内で夜を過ごすことにした。勿論、周囲の景色は一面の荒野であることには変わらない。

それでも何か心細かったのか、地面から生えたような大岩の傍に

車を停めた。樹木の傍は虫に集^{たか}られそうに気がすすまなかった。

「隣、空いてますか？」

などと、大岩に向かって空元気に話しかける姿は、もはや哀れですらある。

昼食にとるはずだった安い菓子パンを口に放りこみながら、湯山は考える。この暑さではすぐに腐ってしまうから、明日の朝食に残すことは考えなかった。ただ、ペットボトルに半分ほど残った水は節約した。

（突然、地球の裏側に飛ばされたか、異世界ファンタジーか、あるいはタイムスリップといったところか。あ、あの世って線もまだあったな）

自分の置かれた境遇にあたりをつけようと始めた想像は、夜陰の中で碎かれた。

風音もしない夜の闇の中で、小さく煌^{きらめ}く光の群れを見たとき、湯山はなにやら怖^{おそ}気だちそうな自分を励ますように、いくつか浮かんだ言葉の中で、最も雅味のあるものを選んだ。

（蚩かな……）

湯山は、光の群れが移動しているらしい事になかなか気づかなかった。それらは徐々にこちらに近づいていた。それに気づいたとき、湯山が動転しかけたのは、余裕のある言動とは裏腹に、この男の精神がつつけば破裂するほどに緊張していた証拠である。

——誰かいる……誰かいるよ。

耳元でささやくような声が聞こえた。いや、果たして声であったか。自分の耳が何かを捉えたという感覚はない。直接頭に響いてくる言語を超えた何かは、湯山がこれまで一度も体験したことのない不愉快な現象だった。

後部座席のシートを倒してくつろいでいた姿から、一瞬で起き上がると、慌ててキーを回し、エンジンをかけた。

旋回するまで、隣席を失礼していた大岩に二度ほど尻をぶつけた。湯山は百八十度回転すると、真っ直ぐに走った。

しばらく走らないうちに、段差に乗り上げた。ライトをつけているが、こうもただっ広い場所では十メートル先が見えたところで何の意味もない。

——ふふっ……慌てる。

——慌てるよ。

頭に直接響いてくる声らしきものは、どうやらその光から放たれていることを湯山は感じ取った。脳を撫でるような意思の切れ端が、陽光が分解されて七色に見えるように、いくつかの色を伴っているようにも思えたからだ。

(さっきの声だ……)

携帯電話から聞こえた常軌を逸した多数の声。いや、あれは声であつたか。今と同じように直接頭に響いてきたのではないか——と、そこまで思念をめぐらせた湯山だったが、ついに車を捨てて奔り出した。夜光でも照らしきれないだっ広い荒野に單身飛び出したのだから、これは逃走というよりは狂走であつた。

——あ、逃げた。

——逃げたわね。

光は迷うことなく湯山を追尾してきた。

湯山は脇目もふらずに奔った。だが、ここは彼の歩きなれた、神経質なほどに平らに舗装された道路ではない。地が平坦であるというのは人界だけの話であり、荒野の地面はジャガイモのようにぼこぼこでとても人が歩けるようにはできていなかった。何故、広大な世界に人はわざわざ道という線を引くのだろうと、幼い頃疑問に思ったことがあつたが、文明に浸かりきった人類は自分が平らにした道しか歩けないという事実をここで痛感した。自分がいかに文明を享受した人間であつたか。

凹凸に足を突っ込んで転ぶよりも先に、湯山の足腰が悲鳴を上げた。一歩踏み進むごとに足首が碎ける錯覚をおぼえるほど、ここは文字通りの荒野であつた。

ついに、しゃがみ込んだ。いや、がむしゃらに走ったせいで、立

ち止まった瞬間に腰から崩れた。呼吸が乱れ、どれほど空気を吸い込んでも足りなかった。

――座った。疲れたんだよ。

――これで終わりかな、遅い人。

――選んで。ねえ、選んで。

光の群れが湯山を囲んだ。

羽虫のようにあたりを不規則に旋回し始めたそれらを見て、湯山は不機嫌に乾いた息を吐いた。

「うるせえ。うるせえよ……」

第一章「原初の声」(3)

湯山は過呼吸で意識が飛びそうになる中、辛うじて周囲を確認した。

黒い画板に白い絵の具を撒き散らしたように不自然な光が周囲を漂っている。それもひとつやふたつではない。

――妖精。

という言葉が、湯山の頭に浮かんた。あるいは幽霊や得体のしれない生き物であるかもしれないが、怪談話が苦手な性格もあってか、よくわからないのなら妖精でもいいだろうとも思った。

妖精なら――と、安心できたならば、湯山の精神はよほど大雑把に出来ているといえたが、たとえ呼称を知っていたとしても、現実にはいないはずのそれが突然目の前に現れた事実は、一個の人間を混乱と恐怖の淵^{ふち}に突き落とすには十分だった。

あるはずの物が無い――あるいは無いはずの物がある時、人は多くの場合、恐怖を覚える。事の大小はあれ、自分の信じる世界の物理法則が砕け散ったような錯覚がするからだ。

湯山が辛うじて意識を保っているのは、彼がこのショックに経験があるからだ。ほんの数時間前に自分が体験した奇怪な出来事に比べたら、妖精の存在など取るには足りなかった。

現状、湯山にとっての一大事は、この妖精^{ようせい}達が、自分を害するようなことがあるかどうかだ。

湯山が宙を漂う光のひとつを睨^ねめつけて観察していると、周囲から小さな声が上がった。

――選ばれた。選ばれたよ。

――目が合ったね。

――はやいね。はやいね。

全て子供のような無邪気な声であったが、闇の中でのそれはいかにも怪しかった。

湯山が見ていた光が、小さく揺らめいた。すると、蠟燭ろうそくの灯を吹くように、その周囲の光たちが一斉にかき消えた。

——ようこそ。

この台詞には聞き覚えがあった。とはいえ、最初に聞いたときは半分パニックに陥ったから良い印象は無い。

「妖精か何かか？」

周囲の光が掻き消えたことは、湯山が精神を安定させるにおいて十分に役に立った。

すう——と、光が近寄ってきたので、湯山は思わず振り払ってしまった。光に触れたという実感は無かったが、振り払った手が怖気だった。

——ユマ……

自分の姓を呼ばれた——と感じた時、湯山はこの超常の何かに抗うことへの意味を疑い始めた。

「何で俺の名字を知っている」

湯山の問いには、光は答えなかった。ただ、壊れた機械のように同じ事をつぶやき始めた。つぶやくといっても、湯山の頭の中に直に声に似た何かが響くだけだが。

ふと、湯山はこの光には自我がないのかと思った。あるのは何かの本能だけで、これはそれを行っているだけなのではないか。先に光同士で会話をしていたように感じたのは、湯山がそう思っていただけで、各々が別に湯山の頭に語りかけてきたのかもしれない。

これは、現象なのだ——と、湯山は思うようにした。日が昇れば野一面を朝日が照らすように、この世界では生物という存在以前の何かなのだと思った。

それと符合するわけではないが、湯山は蜻蛉とんぼを誘うようにして右手を差し出した。どういうわけか知らないが、そうすべきだと思った。

湯山に振り払われて迷うように宙を漂っていた光が、指の先に止まった。

——荊いばらを……

湯山が脳内でそう訳すしかない何かをつぶやくと、光は死んだ蜚のように消えた。

自分はこの世界における普遍的な何かを今、受け取ったのだと思つた。誰に聞かれても説明できる自信はないが。

明くる日の朝、湯山はあてどなく車を走らせた。

幸い、給油直後であるためにしばらくは走れる。だが、起伏の激しい悪路は車自体よりも湯山本人に対する負担が大きく、地形の突起の見づらい草原部を迂回し、禿はげた地面の続く荒野を走った。それでも一時間に一回は気分が悪くなり、停車しては車の外でうずくまって吐いた。三回目は吐き出すものは何もなくなっていた。

水が足りない。

小川は見つけた。だが、無用心に川の水を飲むわけにはいかない。（それはいざという時だ。俺みたいに頑丈でない人間だと一発でアウトだ）

時々、貧相な木に実がなっているのを見かけたが、それが食用に耐えられるかどうかは分からない。

（つくづく、食い物が向こうからやってくる暮らしをしてきたんだな……）

対価さえ払えばすぐさま食事にありつける世界が、実は途方もないものであったのではないかと、湯山は思うようになった。

「とにかく、人だ」

人間を見つけないければ話にならない。湯山はこの世界で生きる術を知らないのだから。まずは模範というべきこの地の住人を捜すことが、彼の第一の目標だった。それ以上に、自分という存在を保護してくれる何かを探していた。そもそもこの地に人がいるのかどうかという疑問は捨てた。必ずいる。そう思わなければ正気を保てそうにない。

半日も走らないうちに、車の方が先に音をあげた。燃料が尽きた

のではなく、車体が歪むような悪路を走り続けたことによる。

「お上品な道しか走ってこなかったもんな。中古ワゴンだとこんなものか……」

皮肉めいた台詞を吐いても、虚しいだけだった。自分を外界から守ってくれる強力な夜具も兼ねていたから、これから徒歩で行くことを考えると、途方に暮れた。

（人じゃなくて、食い物を捜すべきだった）

川辺で魚釣りでもして、急場をしのぐくらいの事すら考えつかなかった。第一、食用でないものを体が受け付けないだろうということは、湯山にとっての大前提であった。とはいえ、そこいらに見知った果実がなっていたり、調理された肉が落ちていたりするわけではない。

このような危機時であるのに、そういった甘えの中にあるということとは、湯山でなくとも自覚しづらい。

まずは野垂れ死にを回避する方法として、日が暮れるまでにやるべきことを決めた。

（火を焚^たこう）

どうにもやめられない煙草の習慣というものが疎ましくなったこともあったが、今ばかりは感謝した。ライターさえ持っていなければ、火打石以前の旧態で火を熾^{おこ}す羽目になっていたかもしれない。

既に茫々たる荒野は抜け、遠くに山霞が見える。近くに小川もあり、所々木々が茂っていた。

枯れた枝葉をたんまりと拾ってきて、湯山は小さな焚き火を熾すと、寒くもないのにそれに手を当てながらしばし考えた。

（人間は何故、山から下りたんだろう……）

短時間であれ平野をさまよった感想といえば、途方もなく広い場所には食料もなく、水もなく、それに比べれば山など貯蔵庫のごとく禽獣^{きんじゅう}がいて、木の実や水もあるだろう。それを捨ててまで、人は何を求めて平野へ下りたのだろうか。

（きっと増えすぎたんだ）

あるとき、山という空間では増えすぎた人種を賄えなくなつたのかもしれない。人は自ら進んで平野に下りたのではなく、追い出されたということになる。湯山のこの想像は無論、何かの書物に立脚したものではなく、彼の勝手な想像である。

煙草に火をつけた時、湯山は車に鍋でも積んでおけばよかったと思った。軽装でないと歩けないと思って、気が付いたものしか持つてこなかったから、食事の役に立つものといえは空のペットボトルだけだ。これでは湯を沸かすことも出来ない。

（いっそ、解体して鍋でも作りゃよかったんだ……）

本気でそう思った。今でも生の水を飲むことは怖い。

流石に空腹には勝てず、河で魚を獲ることにした。水を怖がったユマであるから普通に考えれば魚を敬遠しそうなものだが、ここは意を決したと言ふべきだろう。知識がない以上、木の実は危ない。

ちようどいい小川を見つけて、枝と石で堤を作った。子一時間ほど待つと、小魚が堤に入ってきたのでそれを焼いて食った。水藻の臭いがひどく、味も何もなかったが、腹だけは膨れた。

（便所も作らんな）

木の棒を拾ってきて地面を掘った。出来るだけ深く掘りたかったが、土が固く、途中で諦めた。

そうこうしているうちに日が暮れた。次第に寒気が下りてきて、湯山は車に積んであった毛布に包まったが、ここにきて車を捨ててきたことを後悔した。

（火を絶やさないとだ……）

野天の下で熟睡できるはずもないから、目が醒める度に焚き火に枯れ枝を足した。

（雨が降ったらどうする）

なども考えたが、それ以上に押しつぶされそうな疲労感に襲われて、ついには気絶するようにして寝入った。

第一章「原初の声」(4)

「おい」

疲れていたためか体がだるく、湯山は最初、その声に反応できなかった。

「おい、起きろ。風邪をひくぞ」

と、言われて起きたのは、額に何か冷たいものがあたったからであつた。

(雨だ……)

ずぶ濡れになって見る見る衰弱してゆく自分を想像した湯山は、跳ね起きた。

「わっ!」

何かに激突した。

額を押さえて目の前を見ると、自分と同じように額をさすっている男がいる。

(人だ……)

あれほど探し回った人間に出会ったというのに、湯山は安心しなかった。というよりも、警戒した。男の身なりが、多少は湯山も想像していたが、自分の衣服とかけ離れていたことと、どうやら一人ではないらしいことに気づいたからだ。

男は、湯山が中国の時代劇で見たような黒い衣をまとっていた。

縁が最も黒く、他はやや色が浅い。髪は後ろに長く纏めていて、スーツ姿に短髪である自分が周囲から完全に浮いていた。

既に火が消えた焚き火を囲んで数人がいた。皆、湯山と額を激突した男と同じ身なりだった。

湯山が目ざとく見つけたのは、彼らの主か何かが乗っているらしい馬車だった。湯山はこの光景だけで、この世界の人間が、主と従を厳しく区分する何かから抜け切れていない蒙くらさを持っているような気がした。この予想が彼を最も警戒させ、しかも後に当たること

になる。

「そこな、旅の人」

馬車の窓にたれたカーテンの中から女の声が聞こえた。その声とともに黒衣の男たちが一斉に跪いた。ひざまず

湯山は奇妙な体験をしている自分に気づいた。

先の男にしろ、車上の女にしろ、喋っている言葉は湯山にとって全く耳慣れないものであるのに、頭の中ではそれが理解できるのだ。――ようこそ。

妖精のような何かと触れ合っていた時のように、頭に直接意思を穿つ様な何か。それが全く知らない言語を、湯山が理解することを可能にしている。

(はじめ原初に言葉ありき……か)

何かで読んだ一説を思い出すと、湯山は妖精から受け取ったものが何であつたかにあたりをつけた。

男の一人が馬車の扉を開けると、中から一人の少女が現れた。

(あか紅い……)

髪がやや紅い。少し小柄で、少女のようだが、思わず口元が緩んでしまうような愛らしい顔をしている。目が大きく、可愛げを損なわない程度にそばかすがあり、鼻はこじんまりとしている。衣服は無骨な男たちが蠅はえに見えるくらいに整っていて、青をベースにした幾重かの衣を着重ねている。

「見慣れぬ衣服を着ておられるが、どちらのご出身でしょうか？」

湯山は一人では生きていけない自分を痛感している。寝ている間に雨に打たれていれば、三日もたたずに肺炎を起こし、それをこじらせて死んでいたかもしれない。

ひとまずは行儀のよさそうなこの女に身を寄せることを考えるしかない。どこかの集落に紛れ込んだとして、一から生計を立ててゆく自信など湯山にはない。それよりも、このお嬢様じみた娘に寄生することで急場をしのげれば十分とすべきだろう。

(そのためには、なめられない事だ)

最初から、湯山はそういう目で少女を見ていた。少女にすれば単なる好奇心でこの見慣れぬ男に尋ねたのだが、湯山の方は人知れず必死だった。

「俺にとつては貴方の衣服の方がよほど見慣れない。どちらのご出身か、訊^きいてもよろしいか？」

ぞんざいな口調で湯山が言うと、少女は驚いたようだ。彼女が小さく頷くを見て、湯山は自分に宿った神秘的な何かが、内から外に向けても作用するものであると確信した。

（言葉が通じた……）

一安心した湯山だったが、周囲の男たちの顔が一瞬だけ強張ったのを見たとき、わずかに後悔した。素直に状況を説明し、助けを請うべきであったのかと。

少女が、小さく笑った。

「これは失礼。わたくしはローファン伯の長女アカアです。この服は我がオロ王国の婦人であれば、誰でもたしなむ程度のもんです」暗に、この程度のことも知らない貴方は誰なのだ――と言われている気がした。だがそこに悪意が感じられないのは、この娘は本当にそれを疑問としているのかもしれないと、湯山は思った。

（正直に言うか。信じられるようには工夫するとして……）

相手にあまりにも毒気がないので、湯山のほうが馬鹿らしくなっってしまった。

伯爵の娘と聞いて多少は気圧された湯山だったが、顔には出さないように努めた。本来ならば表情に出してしまうところだったが、何分顔色が悪く、今の湯山は何を話しても不機嫌そうに映る。

「俺の名は湯山翔。どうやら見も知らぬ土地に放り出されたようだ。乗り物に乗っていたんだが、途中で壊れたので今こうして人里をさがして歩いている」

こういうことを話すとき、湯山はなぜか知らない他人のことを話すように淡泊になる。このせいで聞き手に事の逼迫^{ひっぱく}が伝わらずに損をしたことが何度かあるが、本人はその原因が自分にあることにす

ら気づいていない。

だが、今ばかりはこれが幸いした。少女アカアの関心をひいたのだ。

それに、湯山が思わずやってしまった動作が契機となった。

突然、耳をつく高音がユマの懷で鳴った。彼はおもむろにポケットから携帯電話を取り出すと、前日に目覚まし代わりに設定していたことを思い出しながら、音を消した。

「ああ、気にしないで。ただの目覚ましだから」

湯山翔という人物を強烈な印象とともに相手に焼き付ける効果が一本人ははからずとも——この行為にはあった。

他にも、ユマが煙草を吸う際に使うライターなどは、大いにアカアの好奇心を刺激した。

「ユマカケル殿は術士であられたか……」

そこからは飛ぶように事態が好転した。車上に誘われたのである。湯山が術士とかいうもの——大体想像は付くが——に間違われた上、その後の問答に決定打があった。

「湯山が氏で、翔が名だ」

氏名で呼ばれると、どこか冷たい感じがして嫌な気分になったために、湯山が意味もなくそういったのだが、どうやら氏を持つというのは特別な意味があるらしく、先の携帯の件も合わさって、ユマという男が妙な存在感を持つようになった。

湯山はアカアと臨席した。

お嬢様の気まぐれで道連れになるということが、何を意味するのか、湯山はこの時大した予想を立てなかった。

香を焚いてあるのか、馬車の中の香氣にむせ返りそうになった。

「ユマ先生、ユマ先生」

道中、アカアは湯山のことをこう呼ぶ。もうこれ以降は湯山という漢字は必要ないだろうから、彼のことを単にユマと呼ぶことにする。

車上の旅が快適とはいいがたいが、ユマのように歩きなれない人間にとっては天からの恵みに匹敵した。

「このあたりのことが知りたい」

そう言いながら、ユマはアカアにこの世界のことをさりげなく尋ねた。彼女と接してみても気づいたことだが、ユマはアカアが持つ本に書かれた文字を読むことが出来なかった。

「なるほど、言葉ありきだ」

妙なところで感心してしまったが、とにかく、彼女の言ったことで重要そうなものをメモ帳に書き留めた。アカアにはユマの持つものや仕草の全てが新鮮らしく、目を爛々^{らんらん}と輝かせていた。

アカアの馬車に乗るのは一日のうち、ほんの二、三時間ほどで、他はアカアの乗る馬車の後に続く荷馬車の一角をあてがわれた。換え用の馬に乗ればどうかとも言われたが、振り落とされるのが目に見えているので断った。時々、黒服の男たちにまぎれて歩いたりしたが、彼らはユマのことを快く思っていないらしく、ろくに会話もせずに荷馬車に戻った。

「どこへ行くんだ？」

ユマが聞くと、アカアは周囲の景色を確かめるように幌をめくってから言った。

「王都ですわ。実家に帰るんですの」

「君の父はローファンとかいう土地の主じゃあなかったのか？」

「確かにローファンに封じられましたが、王宮勤めであるために王都に居をかまえていらっしやいます」

ユマは、アカアの父が彼女に似ていることを心底願った。得体の知れない術士が、実はただの難民——というべきだろう——であることがあればどうなるか。

（とにかく、食いつなぐことだ……）

そう思いながら、夜天の星を数えた。知っている星座はひとつもなかったが、やや欠けた月だけが、故郷のそれを生き映したように浮かんでいた。

第一章「原初の声」(5)

アカアに同乗しての旅は続く。

「ユマ先生は、面白い謡い方をされますね」

と、アカアが大真面目な顔をしたので、ユマは首を傾げた。

(歌を謡ったおぼえはないけど……)

思わず口に出そうとしたところで、心当たりがあることに気づいた。

アカアの放つ言葉だ。

ユマの放つそれと比べて抑揚が大きく、アカアのお喋りは鳥の囀りのようにも聞こえる。彼女が謡っているように感じたことのあるユマは、この国の人間が持つ言語観が歌と称される程度のものであると考えた。

あの奇妙な妖精——とユマは断定している——のおかげで言葉が通じなくとも意は通じるのだ。故に言葉は個性であり、歌曲のように華やかさを伴う文化なのだろう。

——ユマ先生は珍しい言語で話されますね。

と、言われたに等しい。

「そうか、俺の故郷でも（他と比べると）珍しい歌だそうだ」

ユマがわざとらしくそう言うのと、アカアは決まったように手を叩く。もはやこのような問答は日課ですらある。

(可愛い娘だ……)

垢抜けない、筋金入りのお嬢様だ。清水を何度浄化すればこのような透明な液体が出来上がるのかと思うほどに、彼女の人格はまっすぐで、穢れがなかった。

(ちよっとお惚けさんらしい)

ユマの話に聞き入っているときは別として、時々、愚鈍とも思えるほどに鈍くなる。あえてそういう風に教育されたのかもしれないとも、ユマは思った。

そんな彼女に苛立ちを覚えなくなかったが、ユマは彼女に聞いておかなければならないことがある。

——夜中、光の群れがやってきて、俺に何かを授けて行った。あれは何だ？

という、直接的表現を用いることをしないのは、この男の奇妙さといえる。

「この辺りには蛍ほたるでもいるのか？」

ユマは妖精についてさりげなく訊いた。

「蛍……ああ、源精げんせいのことですね」

「源精？」

アカアが聞きなれないことを言ったので、ユマは脳内でそれを上手く訳すことができなかった。

（性能の悪い翻訳機みたいだな……）

源精と呼ばれるものから授かった神秘は、ユマがアカアの言葉を理解することを可能にした。だが、オロと呼ばれるこの王国にはユマの持つ語彙ごいを越えた概念や現象が存在しており、それらは生の音としてユマの脳に伝達される。「ゲンセイ」と、生の音で飛び込んできたそれは、ユマが本来の能力でもって翻訳したに過ぎない。ワープロが辞書にない言葉を打ち込まれて誤変換するのと似ていると、ユマは思った。

（あるいは言精か……）

ユマは目でアカアに説明を請うた。

「源精は雷精より発し、人の意思を司ります。常は風精と混ざっています。人気を好み、人を介して彼らは増殖と衰退を繰り返します。ちなみに、風精は火精より発します」

つまり、源精とやらが人の意思疎通を援けるのは自らが繁殖を行うためであって、厚意でやっているわけではないらしい。繁殖を行うということは源精は生物の一種ということになる。

アカアの話は続くが、それをユマなりに要約してみた。

風精とは風を起こす精であり、源精は普段それに紛れている。風に飛ばされて遠くに行く様は、あるいは蒲公英たんぽぽの種が風に乗る様を想像すると近いかもしれない。源精は意思を原料として動く。しかも、動物のような単調なものではなく、人間のように複雑怪奇なものを好む。

源精は群れで行動するが、一つの群体で繁殖を行えるのは一個体のみである。というより、アカアが言うには繁殖を行う際に、選ばれた個体は同群体内の他の個体を食い尽くすらしい。寿命は長く、取り付いた人間が意思活動を行う限り、彼らは生き続ける。一種の共生ともいえる。

（道理で団体さんでやってきたわけだ）

このような荒野では人も滅多に通るまい。妖精さんも子孫を作るのに必死だったらしい——と、ユマは小さなおかしみを感じた。自分の体内に何かが宿っているのは多少不愉快だが、害がなく、むしろ有益であれば我慢しよう。

まだ、問うべきことがある。

「この国では、俺のような変わり者が、突然現れたりすることがあるかな？」

哀れにも自分のように神隠しに遭ってしまう人間がどれだけいるのか。それは現在のユマにとって最大の関心事だ。もっとも、アカアがユマの服装を見慣れない時点で半分諦めているが。

予想通り、アカアはかぶりを振った。

「そうか……」

ユマが持っていたほのかな希望は、一瞬にしてかき消えた。知らないというのは、ユマのいた世界に戻る方法もわからないということだ。

（器用に生きなきゃいけない……）

ふと、思い出したのは、捨ててきた車のことだった。ユマのような奇人を受け入れるくらいだから、信仰や文化の差異によって人を廃絶するような陰しさはオロ王国にはないのだろう。

ユマはオロ王国について、数々の文化が花火のように炸裂する地に栄える国であると予想した。案の定、東西の大陸のほとんど中間に位置するらしく、東大陸の西端がオロ王国の領土であるらしかった。

また、貨幣経済もそれなりに発達しているらしく、車を珍品奇物として売りに出せば中々の値で売れるのではないかとも思った。他にもユマが持ってきた毛布はアカアが大絶賛したほどで、残念なことに彼女がものの値打ちには無頓着なせいで、どれくらいの価値があるかは分からないが、今のユマにとって捨ててきた車に数多くの財産があったと言える。それを捨ててきた事実を猛烈に後悔しないのは、現在のユマがアカアによって保護されている安心感による。ちなみに、今現在ユマの持つ財産は以下である。衣服は除く。

腕時計、銀色で無地のジップライター、煙草二箱、絆創膏と消毒薬、胃薬、毛布、発炎筒、キーケース、手帳、ボールペン一本、携帯電話、ペットボトル、工具数種、ショルダーバッグ、携帯ティッシュ三つ、ハンカチ、手提げ鞆^{かばん}、乾電池四つ。

発炎筒などは獣に襲われた時に焚こうと思いつてきたものだが、キーケースや乾電池に至っては何の役にも立たない。ユマの面白いところは荒野のど真ん中に車を捨て置くとき、きちんと鍵を抜いて来たことだ。習慣が抜けきらないのか、それとも狼や野鼠が車上荒らしのような真似をするとでも考えたのか、当の本人にもよくわからない。

四日目に人里が見えた。ここまで来ると、人に踏みならされた平坦な地面が顔を見せ始め、この地方の人は焼畑をするのか、時々禿げた山も見えた。

藁葺きの屋根が居並ぶ寂れた村で、険しい顔つきをした子供が牛を鞭打って畑を耕していた。

ユマはオロ王国の文明について期待が外れたと落胆したが、アカアの一言でどうにか持ち直した。

「ここは田舎です。王都まではあと十日ほどです……」

この日は村長らしき人の屋敷で泊まった。晚餐は粥かゆの様なものを出されたが、アカアを接待するためか、牛の肉も出てきた。

（まさか畑を耕していた牛じゃないだろうな……）

家産を傾けるほどの接待には見えないが、村長が地に額をつけてアカアを歓待する様を見て、ユマは不思議な気分になった。

「先生、お酒はいかがですか？」

村長の懐具合が心配になってきたので、ユマは一度断った。すると、村長の目に怨えんの色が見えた。

（はあ、もっと金を落としてゆけということか。それとも、貴族が浮かぬ顔で帰ったとなれば、後に響くのか……）

アカアが村長に支払う対価は、牛一頭より遥かに勝るのだろう。村長がローファン伯の娘をもてなす労苦は、対価を得て自らを潤す楽しみでもあるようだ。

「いや、いただく」

ユマがそう言うと、村長の表情が晴れた。

村長の娘らしき少女が酒を注いだ。甘ったるくて、不味い。とても酒とはいえない代物だった。それ以上に、村長の娘がひどい不細工だったことが、酒を楽しもうとする者にはこたえた。鼻が臍へそを曲げたように上を向いていて、両の目がやや離れている。他の部分は目だって崩れてはいないが、その二つの要素が強烈に彼女を形作っていた。

風呂もあった。ユマの期待は外れて蒸風呂だったが、旅の垢あかを落としたながら自分が生まれ変わったような気持ちになった。三日目あたりから頭が、昨日からは体の所々が痒かゆくなっていたから、ユマはそれも含めて入念に体を洗った。勿論、石鹸など無く、軽石でこするのだ。

突然、娘が入ってきた。さもありなん——と思ったユマだったが、黙って彼女の思うがままにさせた。石で垢こすを擦るのが上手で、思わ

ず寢息を立てそうになった。

（不細工だが、中々悪くない）

勿論、ねや閨を共にするのだけはお断りしたいが。

「お着替えをここにおいておきます」

村長の娘が言ったところで、ユマははっと我に返った。

「俺の服は、捨てたり、洗ったりしないでくれ」

少女たちが、川辺で石を打ちつけて洗濯を行っていた光景を思い出して、ユマはひやりとした。あんな手荒い真似をされてはスーツがずたずたになってしまう。

娘がいぶかったので、ユマは答えに窮し、適当なことを言った。

「正しいやり方で洗わないと、呪いまじなが解けてしまうんだ」

「まあ！」

驚いた娘はまるで天衣を授かったかのように仰々しい仕草で、スーツをたたみ、奥へと消えていった。ユマは代わりに黒服たちと同じ服を着せられた。

一室をあてがわれて寝ようすると、村長の娘がついて入ってきたが、

「眠い」

といって退けた。娘は静かに泣きながら村長の元へと帰った。

（それに病気をうつされそうだ）

何の根拠もなく失礼きわまりないことを考えたユマだったが、見知らぬ土地に放り出される前の暮らしが病的に清潔であったことを考えれば、彼が田舎娘に偏見を持ったとしても責められないだろう。

村長のため息が耳元で聞こえてきそうだったが、十分に稼がせてやったと思ったユマは、疲れが溜まっていたのか、泥のように眠った。

第一章「原初の声」(6)

明くる日の朝、集団の人数が増えていた。どうやらアカアが奴隷を二人買ったらしい。虚ろな目で大きな荷を背負う彼らを見たとき、ユマは薄ら寒い何かを感じた。

村を発つと、険しい山登りを強いられた。斜面を馬車で進むのはこんなにも無謀なのかと思うほどに重労働で、馬車を押していた奴隷が倒れて足を轢かれた。

「何ちゅう光景だ……」

奴隷は足の骨を折ったのか、呻き声を上げながら苦しんでいる。

ユマはアカアと同乗していたが、奴隷を見たアカアがこともなげに凄まじいことを言ったので戦慄した。

「歩けそう？」

と、アカアが黒服を統べる男に訊くと、男はかぶりを振った。

「そう、では置いてゆきましょう」

ユマは最初、彼女の台詞を理解できなかった。まさかとは思うが、反芻してみても信じられない。

「置いていくのか。山道のど真ん中で？」

ユマの口からこぼれる様に吐かれた台詞に、アカアは首を傾げた。

——それが何か？

と言いたげである。

(やっぱり螺子が一本抜けてんじやないのか。この女は……)

眼下では黒服の長が配下に指図をしていた。

「一日分の水と食料をここに置いてゆく。旅人に助けを請えば無事に山も下りられよう」

まるでそれが最大限の厚意であるような口調だった。奴隷の表情は見る見る青ざめ、共に買われた奴隷が仲間の助命を懇願するために、黒服の長の足にしがみついた。

「それはあんまりです。このままでは山を下りる前に山犬に襲われ

て死んでしまいます」

黒服の長が睨みつけると、奴隷はひるんだ様子だったが、同郷の者を守ろうとする意識が強いのだろう。震える声を振り絞った。

「せめて、共に下山させて下さい」

目を潤ませて懇願する奴隷だったが、強引に腕を振り払われて地に伏した。

「仕事もせぬ。役にも立たぬ。その上で主に命令するのか！」

鈍い音が聞こえた。一瞬、目を伏せたユマだったが、再び彼らを見ると、奴隷の一人が鼻から血を噴いてもがいていた。周囲には黒服の男たちの他にアカアが元から連れていた奴隷もあり、彼らはおびえたり、目をそむけたりしながら眼前の光景が早く過ぎ去ることを祈っているようにも見えた。

アカアはというと、もはや彼らのやり取りには興味がないらしく、「先生、しばしお待ちくださいませ」

といって、退屈そうに本を開いた。

「——っ！」

ユマはアカアを突き放すように車外へ飛び出すと、黒服の長の肩をつかんだ。

「やめろ」

黒服の長は驚いたようにユマの顔を見た。だが、すぐに口元が緩んだ。

（俺はこいつになめられているのか？）

ユマは直感した。

「これはこれは、先生。見苦しいところをお見せしました」

黒服の長は大仰に言った。慇懃^{いんぎん}な態度が腹立たしかったが、ユマは耐えた。

（この髭^{ひげ}っ面^{つら}の名前は何だったかな？）

と、アカアが黒服の長のことを何と呼んでいたかを思い出そうとした。

「ヌル？」

飛び出したユマを目で追ったアカアが、男の名を呼んだ。

(そう、ヌルだ。いかにも悪人っぽい名前しやがって……)

顎鬚あごひげのたくましい、長身の男だ。痩やせているように見えるが、無駄な脂肪をすべてそぎ落とした様な強さが体貌たいぼうから滲み出てくるようでもある。歳は三十の半ばあたりだろう。

目を見れば気圧されるのは分かっていたから、ユマはヌルの目を見ずに言った。

「こいつは金を出して雇ったんだろう？ 雇い主なら最後まで面倒を見る」

ユマの口調に棘とげがあったためか、ヌルは思わず反論した。

「雇ったのではない。買ったのだ！」

ヌルの言葉を聞き流したユマは、地に伏せた奴隷たちの前まで歩いてゆくと、屈んで顔を覗き込んだ。

(若い……)

どちらも十四、五の少年である。ユマは自分の腹の底で、何かが沸ふつ々と煮えてくるのを感じた。

「先生？」

アカアが幌をめくって車内から出てきた。

(あの世間知らずを説得したほうが早いか。いや、この髭に軽く見られると後が怖い)

ただでさえ素性の怪しい男がアカアの客として迎えられたのだ。

この先、ユマが何かの失態をおかしてアカアから疑われた場合、ヌルという男は真まっ先にユマを放逐ほうちくするだろう。ここは是が非でもアカアに先生と呼ばれる者らしく振舞わねばならない。

「その子を馬車に乗せろ。俺が歩く」

ユマが奴隷少年を起こそうとすると、少年は驚いたような顔でユマを見た。

「何も先生がそんなことをなさなくても……」

やはり、アカアには理解できていない——と、ユマが軽く失望を覚えたとき、今度はヌルがユマの肩に手をかけた。

——やめよ。

と、目で言っている。刺すような視線に敬意などは微塵も込められていなかったが、このことが逆にユマを挑戦的な気分にした。

このままでは少年は死ぬ。旅人が通るといつていたが、それも何日に一回の話だろう。もし、現れなければという想像をアカアはしないのか。それに旅人が彼らを助けるといふ保証もない。金目の物など持っていないから、追い剥はぎには遭わないだろうが。

ユマは誰を見るでもなく、声を張って言った。

「このままではこの子は死ぬ。それがわかっていながら、何故捨てて行くんだ？ さっきヌルは旅人に助けてもらえと言ったが、旅人が現れなければどうする」

ヌルに対して言ったようでもあるが、これはやはりアカアを非難する声だろう。それに気づいたのか、アカアは先生の不機嫌をなだめたいがために、ヌルの方を見た。彼はやれやれ、といった口調で言った。

「運がよければ、必ず助かる」

この言葉を聴いた瞬間、ユマの脳裏に、まぶた瞼に落ちてくるような蒼穹と、荒涼の大地が広がった。たった二晩だけであるが、ユマは闇の中ですすり泣く様な旅を行ったのだ。他の誰かが自分と似たような境遇に陥ることが、耐えられなかった。かわいそうなのではない。絶望的な状況から自分を救ってくれたアカアという少女が、実に酷薄な人であったことが、残念でならないのだ。九死に一生を得るといふ言葉があるが、ユマはアカアが現れたことで、十死じふしぬはずだった命を拾ったのだ。あの時の喜びに泥をかけられたような気分は、他の誰かと共有できるようなものではない。

（俺を助けたのに、この子は助けようとしな。いつか、俺も捨てられるかもしれない）

ユマが激昂した理由は義侠心によるものだったが、彼が行動したのは、実は己が身の危うさに気づいたからであるかもしれない。だから、ユマの憤りは嘆きにも似て、風が空吹いているような気分が

あった。

「運がよければ助かるというのは、ほとんど死ぬってことだ。つい昨日まで畑を耕して安穩に暮らしていた少年を、自分の都合で連れ出して、使えなくなったから捨てるっていうのはどういう見だ？」

ヌルの胸倉をつかみそうな勢いだった。ヌルの目は冷ややかだったが、これにはアカアが焦った。

――斬ってもよろしいか？

と、ヌルが目で問うてきたからだ。今、ユマに死なれると退屈な旅の話し相手がいなくなってしまう。

「先生。わかりました。馬車に乗せましょう」

アカアがそう言った事で、場はおさまった。ヌルはすれ違いざまに、

「連れ出したのではない。買ったのだ……」

と、呟いた。ユマの怒りはまだおさまっていないが、これ以上ヌルと話をしたいとは思わなかった。

「大丈夫か？」

そういつてユマは足を折った少年に手を差し伸べた。

「馬車に乗せる。手伝ってくれ。他に治療の出来る奴はいるか？」

とユマが言くと、二人が少年を抱えて馬車に運んだ。鼻血を出していた方の少年はどこからか棒切れを拾ってきて、車輪に轆かれた少年の足にそえ、軽い治療を行った。ユマはポケットから携帯ティッシュを取り出して少年の鼻を拭いてやり、足を折った方には消毒薬を持ってきて車輪に擦られた傷口を拭いた。二人は不思議そうな顔をし、辺りにいた者もそうであった。

「ありがとうございます」

一人は地に額を擦りつけ、もう一人は車上から会釈をしてユマに謝した。

「なに。困ったときはお互い様だ」

月並みな台詞を吐いたユマだが、悪い気はしなかった。

この後、集団におけるユマを見る目が変わった。
奴隷たちから見られるとき、敬意にも似た清々^{すがすが}しい何かを感じるようになった。逆に、黒服の男たちからは一層毛嫌いされたようだ。とはいえ、彼らの全てがヌルと同調している様子でもなく、ヌルより年配の男は食事時にユマの傍に寄ってきて、話しかけてきたりした。

「貴族のお嬢様をしっかりとつけるとは、あんたは本当に仙人なのか？」
水筒を片手に干し肉を齧^{かじ}りながら聞いてくる。どうやら、黒服たちの間ではユマはそうに見られているらしい。

「災難に遭って他人に助けを請う人は、他人が災難に遭ったときに助けをよこすとは限らない。どうしてだろうな？」

まるで自分に問いかけるような言葉だった。自らの正しさをほのかに主張してもいる。

鼻血を噴いた方の少年は、誰に命じられるわけでもなくユマの世話をするようになった。アカアはこれにも無頓着だったが、時々幌をめくっては、奴隷少年と共に歩くユマを見下ろした。

少年の名はリュウといった。ぼさぼさの髪に土色の衣を着ている。目が大きく、一種の愛らしさがある。もう一人はハウと言い、リュウより背が高く、目が細い。

「竜か。強そうな名だ……」

ユマがそう言った時、少年の目が輝いた。

「俺の故郷ではそういう意味を持つんだ」

おそらくユマがリュウという音に竜を想起したがために、源精が竜という言葉を少年に伝えたのだろう。後でアカアに訊いたところ、どうやら竜は存在するらしい。滅多に人前に現れず、巨大な力を持つという。ユマの脳内で描かれる竜の像とあまり変わらないように思えた。

「先生の故郷では、ハウはどのような意味でしょうか？」

リュウがついでに友人の名のことを問うた。

「鳳^{ほう}は王者の鳥だ。つがい^{おう}で、鳳^{ほう}という鳥とあわせて呼ぶことが多い

い」

足が痛むのか、ホウは苦しそうな顔をしていたが、一瞬だけ口元が緩んだ。

多少なりともつまらぬ知識を仕入れておくものだと、ユマは自分に対して感心したが、車上からそれを見ていたアカアがユマを招きよせ、

「わたくしは何という意味ですか？」

と聞いてきたために、先の争いのことなど頭からすっ飛んでしまった。

「さあ、どうだろう……」

ユマは山間から眩しくもれてくる夕光に気づくと、指でアカアの視線を誘うようにして言った。

「……赤いという意味じゃあ、駄目かな？」

そう言われたアカアは少しの間、感じいったように夕空を見ていたが、何を考えたのか、今度は近くを歩いていたヌルの方を指差して、

「彼は？」

と、小さな声で言った。

ユマは一瞬嫌な顔をしたが、アカアに当たるのも理不尽だろうと思ひ、表情を戻した。

「よくわからない」

「そうですか……」

アカアが少しだけ残念そうな顔をするので、ユマは付け足した。

「いや、『よくわからない』という意味だ」

少女の口から小さな笑みが漏れた。無骨で普段何を考えているかわからないヌルだから、アカアもおかしみを感じたのだろう。

ヌルは一部始終を見ていたらしく、軽く舌打つと、険しい顔つきで黙々と歩き続けた。

第一章「原初の声」(7)

道中、雨に遭ったために予定より少々遅れての下山となった。

下山してからは石畳で舗装された道路が目につき、車上の旅は快適になった。もっとも、ユマが乗るはずの荷馬車は負傷したホウが占領しているから、ユマは歩いての旅になる。

一行が歩を進めるのは早朝から日が暮れるまでの間に過ぎない。それでも歩きなれないユマには辛く、靴擦れと血豆が何度も潰れてほとんど歩けなくなった。アカアに呼ばれる場合も多いから、実際にユマが歩く時間は日に四時間程度だが、それでも三日目には苦痛と疲労で顔面が蒼白になり、共に歩くリュウを慌てさせた。

足が棒になるというが、悪路を歩いている間は棒になった足が磨り減るような、あるいは砕けるような感覚しかなく、いくつかの街や村を通り過ぎてもユマの目には何も映らなくなった。

「旅をされたことはないのですか？」

アカアはユマの軟弱さをあざ笑うわけでもなく、ただ、下々の者が出来ることを術士であるユマがこなせないのが不思議で仕方がないらしい。

「俺の故郷では、遠出をするのにわざわざ歩く奴なんていなかった」

ユマはつい、本音を漏らした。

「馬車にお乗りになるんですか？」

アカアは少し驚いた後に、何かを理解したような顔をした。なるほど言動は少々雑なところがあるものの、ユマの持つ知識は明らかに異質であり、更には姓を持っているということはどこかの地の豪族である可能性が高く、確証はないものの、これらの想像はアカアを楽しませるには十分だった。

「馬車がこんなにいるさい乗り物だとは思わなかった」

ただ蹄ひづめの音と馬が鳴く分だけうるさいと思っていたが、車輪や車体が衝撃を吸収するような構造を持っておらず、激しく揺れた。そ

れに、日中でもカーテンを閉めてしまえば車内は暗く、とても乗れたものではない。

「今まで酔わなかったのが不思議なくらいだ」

気分が悪くなればアカアに断って歩いた。光るような風が気持ちよかったのは最初だけで、次第に足が潰れるような激痛との格闘になる。

「初めて馬車にお乗りになりましたの？」

「ああ、車があればよかったのにな……」

ユマはアカアと会話をしているが、人の話を聞かない性格もあいまって、一人ごちるような口調になった。アカアの目が鋭くなったことに、気づくわけもない。

（こういう時、先生は面白い話をしてくださる）

数日の付き合いではあるが、アカアはユマの人格の面白さに気づいてきた。

「牛車ですか？ それとも犬とか。まさか……竜？」

「違う。違う。あんな（竜は知らないけど）鈍いのと一緒にするな。燃料で動く車だ」

アカアが理解できなそうな顔をしたので、ユマは自動車について簡単に説明した。

「先生は火術を扱われますの？」

アカアは驚きを込めて言った。

「そうじゃない。あれは機械だ」

話が弾んで、次第に電車や飛行機の話になった。アカアは半信半疑の上にほとんど理解できないようだったが、最後にユマが言った言葉を聞いて、瞠目した。

「乗り捨ててくるんじゃないか、なかったな……」

馬車が一瞬だけ浮いたような感覚がした。車輪が小石を踏んだらしい。

「あるのですか。その……自動車というのが？」

「あるよ。君と会ったところから少し離れた場所に置いてきた」

「野ざらしですか？」

「砂が少し気になるが、一月も放っておかなければ、まあ大丈夫だろう。完全に壊れたわけじゃあないだろうし」

アカアの目が爛々らんらんと輝いた。

――戻りましょう！

と、いいかねない顔つきだったが、どうやらすんで飲み込んだらしく、

「取りに行けるように、父上に相談してみます」と言った。

アカアと出会ってから八日目に広い盆地に出た。途中でユマが熱を出したため、立ち寄った街に二日ほど滞在した。

（便所とベッドがあるのがこんなには有難いと思ったのは初めてだ……）

道中、用を足す時も集団から離れすぎないように気をつけねばならず、たとえ離れたとしても、見晴らしのよい平野でしゃがみ込んでいる姿が丸見えなのは羞恥の極みだった。アカアはどうしているのか、そのような姿を一度も見かけなかったが、侍女が朝方に小型の甕かめを馬車から持ち出すのをみて納得した。

（なるほど、道理で香を焚くわけだ……）

ユマは甕に跨っているアカアを想像して――下卑た想像だが――小さく嗤うと同時に、妙なところで感心した。さらに単純な興味と切実さもあいまって、

（みんなどうやって拭いてるんだろう？）

という、子供じみた疑問をアカアの前で口に出しそうになったことがある。後でさりげなくリュウに聞くと、

「その辺に落ちてる石や葉っぱですが……」

と、当然のように答えられたので閉口した。ユマが体調を崩したのは、やはり野宿が原因だろう。

熱を出したユマはアカアの厚意がうれしかったが、ヌルにますま

す軽く見られるようになった自分に嫌悪を感じている。

（どこもさびれた街だ……）

千人程度が暮らしているに過ぎない、小さな集落に着いた。

聞くところによると、ここはそれなりに賑わっているらしい。その証拠にリュウは目を輝かせながら街を見てまわり、逆にホウは萎縮している感じだった。行商人が小さな天幕を張って地方から仕入れた品を開いている。さすがに街の中央を突っ切る路地は人で埋め尽くされて馬車も通れない感じだったが、それでもユマの目を圧倒するほどの厚みはない。

陳列された品々も、確かにユマの目には奇妙に映るものが多かったが、光沢や清潔感に欠けていて、どれも埃をかぶっているようにしか見えない。

（田舎者ではないらしい……）

露天に並ぶ品々には目もくれず、人ごみを無表情に見下ろすユマを、ヌルはじっと観察していた。アカアの護衛が彼の任務である以上、ユマという人間を見定めなければならない。

「退屈か？」

珍しく自分に話しかけてきたヌルを見て、ユマは少し驚いたようだったが、あえて感情を殺した声で答えた。

「そうでもない。王都はここより大きいのか？」

「無論」

「そうか。王都の人口はどれくらいだ？」

「詳しくは知らないが、二、三十万はいるはずだ……」

ヌルは言葉を濁した。ユマの質問はどこかの外的に外れているような気がする。

（まあまあだな）

百万都市に住んでいたユマの中では、数十万と言う人口を大都市と言い切ってしまうには少し寂しい。もっとも、王国の規模がどの程度なのかすら知らない以上、感覚としてそう捉えたに過ぎない。

「市にあまり興味がないようだが」

「無くもない。ほら、あれだ……」

ユマが指差したのは、家屋の屋根や天幕に飾られている紋章だ。波を意識したようなうねりの中で一人の女性が鎮座している。

——あれは何かな？

とまでは言わずに、ヌルの言葉を待った。

「精泉せいせんの紋のことか？」

「精霊の泉なのか？ 泉の精霊ではなく？」

「何を言っている。泉に精霊などいるわけなからう」

ユマにしてみればヌルの言ったことは理解できなかったが、この男と会話を続けることに抵抗を感じたのですぐに切り上げた。

「ええ、確かに精泉の紋ですが……ご存知ありません？」

と、街を出発した後にアカアに問うても同じような反応をされた。

「知らないな。俺、異国人だし。神なのか？」

最初こそアカアを警戒したユマだったが、この頃は忌憚きたんなく彼女に問うようになった。

「違います。王都の一角に精霊が湧くといわれる泉があります。今は水ばかりが湧いています。上古、泉を訪れた旅人に光の精霊が宿り、王者となったという伝説があります」

「それがオロ王か……」

「そうです。オロとは光と同義です。今でも王のことを光王こうわうと呼びます」

アカアの話によると、オロ王家の初代は女性だったようで、紋章は初代光王が光精に祝福される様を描いているらしい。ここまでは理解したユマだったが、ヌルとの会話を思い出し、重ねてアカアに問うた。

「光の精霊は泉の精霊とは違うのか？」

「泉の精霊……とはいかようなものでしょう？」

「そうだな。俺の故郷では（といっても故郷からもちょっと遠いが）泉を訪れた者を試し、答えを得たものを祝福するといったところか

な。ある日、正直な樵^{きしり}が誤って泉に斧を落とした……」

といって、ユマは自分の知る物語をアカアに話した。

「それは精霊ではなく、妖怪です。精霊が人を試すだなんて聞いたことがありますわ」

アカアが笑うのをみて、ユマは彼女のいう精霊というのが、意思を持たない現象であるような気がした。風が吹く、火が燃えるといった現象は精霊と呼べるが、悪人に雷を落したり、たたりをおこしたりするものを精霊とは呼ばないらしい。

（精霊だの術だのと言っているが、この世界も中々に醒^さめてる）

迷信に支配されていないという醒めがある。科学とは違った方向に人類が進化し、このような世界ができあがったのか。ユマにとってアカアを含めるオロ王国の住民は、奴隷制度をはじめとしてまるで未開であり、古風にも見えだが、その考えを改めるべきかもしれない。

「それに――」

アカアの話が続いていたことをすっかり忘れていたユマは、驚いたように彼女の顔を見た。

「水に宿る精霊はありません」

これについては何故かを問うても無駄だった。水に干渉する精霊はいないというのが、アカアの持つ常識のようだ。

第一章「原初の声」(8)

王都に至ったのは、ユマが突然荒野に放り出された日から数えて十八日目である。アカアの予定より二日遅れての到着となった。

広々とした平野の中で、蒼穹を貫くような高い宮殿が見えた。なるほど、オロ王国は小国ではないと思わせるような堅固な城門が見え、その外側に城下町が並ぶ。道中で立ち寄った町々はまず城壁があり、その中に人が住んでいたが、王都は夥しいほどに犇く人々を収容しきれないのか、宮殿の外に街があり、その外にまた村々があり、その外に田園地帯が広がっている。まるでいくつもの都市が歩いて王都の傍に腰を下ろしたかのようでもある。

この巨大な都市の名を――

「リヴォン」

という。

(ははあ、リボンか……)

ユマは丘の上から王都を見下ろした時、妙なおかしみを感じた。遠望すると王都の北は山脈が腰を下ろしており、西に流れる大河がうねり、王都の南方を守護している。ユマの歩いてきた東には広大な平野が広がっている。天嶮てんけんに包まれたこの都市は、北側に宮殿があり、それに結ばれるようにして東西に大きな城下町がある。上空から見下ろせば、結んだリボンのようにも見えらるだろう。

更に、遠くに見える河の色だ。深い紅色はちびをしている。

「紅河こうがです。上流に八本の支流があり、八尾はちびともよばれています」

気味悪そうに河を遠望するユマを見て、アカアが言った。

「渡来人にはちよつとばかり不吉だな……」

アカアが首を傾げたが、ユマは顔をしかめたままでこれ以上言葉を発しなかった。

さて、王都である。

東西に展開した城下町はいかにもといった風情で、ユマが足を踏み入れた東の城下町は活気に満ちていた。東西の町にはそれぞれ名があつて、西を「リ」、東を「ヴォン」をいうらしい。オロ王国には一時期を除いて遷都の歴史はないから、これら二つの集落が王国の出発点であつたのかもしれない。

繁華街らしき場所も遠望できるが、筋金入りのお嬢様であるアカアがそんな場所に足を踏み入れるはずもなく、ユマは丁寧に舗装された石畳の道路に感心しながら、過ぎ行く建物や人々を観察していた。煉瓦で固めた五階建ての集合住宅のようなものも見えるが、瓦葺の東洋風な建物もあつた。

「やっぱり奴隷がいるな……」

地域だけの古びた習慣であればと淡い期待を持っていたが、どうやらそのようなはずもなく、ユマは酷使される奴隷を見るたびに不愉快な気分になった。

「秘書奴隷というものもあります」

無然となったユマを見たアカアが、何も奴隷の仕事が肉体労働に限らないことを示唆したが、

「彼らには自由がないんだろう？ それじゃあ、奴隷に変わらない」と、一蹴された。

「明日、王都を案内してさしあげますわ……」

アカアにそう言われたこともあつて、ユマは熱心に観察することをやめた。旅疲れがそうさせるのだろうが、彼が窓の外を見ていた姿を驚いたように見上げていた奴隷がいたことに気づかなかつた。

いつの間にやらローファン伯の屋敷に着いたようだ。日も暮れ、ヴォン北部の高台にあるその場所は静かな空気の中で豪華な光を放っているようにも見えた。

（思ったほど大きくないな……）

と思つたのは屋敷の大きさに対してで、敷地自体は相当に広い。左右対称に作られた白壁の美しい建物で、中におびただしい数の燭しょく
くだい

台を想像してしまうように、窓から光が漏れている。

訪問客を威圧するかのような鉄製の門で、ユマは馬車を降ろされた。車上姿で敷地内に入ったのはアカアただ一人である。

馬車を追って歩いてゆくと、使用人らしき人々が屋敷の前で整列している。

「おや、メイドがいるじゃないか」

と、傍らで歩くりユウに話しかけたが、田舎から出てきたばかりの彼の耳には届いていないようだった。

黒地の衣服はヌルを髣髴^{ほうふつ}させるが、彼のように運動に優れたつくりではなく、下部はスカート状になっている。その上に白のシャツを着ていて、服が緩まないように引き絞っているようだ。頭にはカチューシャのようなものをつけていて、人によって白や黒と色が違う。ユマの目にとまったのは女性の格好だが、男に関しても下がズボン状のものを穿いているだけであまり変わらない。

彼らとは全く違う、黄色をベースにした緩やかな衣服に身を包んだ女性がいる。少々肉つきがよく、小太りと言ってよいが、温和な空気が体貌にあらわれている。髪は後ろに団子に纏めていて、やはり赤い。

「お母様！」

アカアは馬車から飛び降りるようにして、母に走り寄った。

「アカア、健やかで何よりです。ですが、馬車から飛び降りるのはおやめなさい」

声がやわらかい。母にたしなめられたアカアは小さく畏^{かしこ}まると、母の目を盗んでユマの方を見、舌を出した。

「そちらの方が？」

アカアから既に使いを出していたのか、ユマの存在は既に母の知るところだったようだ。

「術士のユマ先生です」

予想通りの紹介をされたユマは、ローファン伯爵夫人に軽く会釈をした。ユマが簡素な挨拶を行っただけなのを見て、彼女は少し驚

いたようだった。

（跪くべきだったかな？）

だが、ここで慌てて慇懃な態度をとっても侮られるだけだろう。

「先生はどちらのご出身ですか？」

「東京です。ちなみに私は術士ではなく、学者です」

術士などという虚妄は、すぐにはがれる。そう思ったユマは、ここで自分に対する誤った印象を拭い去ることにした。学者と自称したのは自分がこの世界の人間が気づかり知らぬ思想を持っているからという淡い自負からだった。ただ、ユマの持つ知識は小説や劇画から荒く学んだ半端なもので、それが異文化から見れば有益ではないことには気づいている。しかし彼の持つ財産は——例えばアカアがユマの毛布を絶賛したように、ある程度はオロ王国の文化と折り合いをつけることができるという予測がある。早い話が、とりたてて手に職もないユマが異文化の中で生きていくには舌先三寸を駆使する以外に道がないのだ。

「トオキョオ……聞きなれない名ですな」

「当然です。地の果てより遠い……」

これにはアカアが助け舟を出した。勿論、ユマを助けるつもりなどもなく、彼女はユマと話すうちに導き出した自論を披露したかっただけのようだ。

「古典にある、『十の太陽が昇る都』ではないでしょうか。いくつもの海を越えた東の果てにそのような地があると読んだことがあります。先生にお話したところ、先生の故郷では古くは十の太陽があったという伝説があるとのことですね」

アカアは得意満面だったが、十の太陽が同時に昇るという伝説はユマの故郷にはない（あるかもしれないが少なくともユマは知らない）。ただ古代の大陸人が太陽を十種に分け、それぞれに名をつけていたことをユマはどこかで読んだ記憶がある。

——そのような遠方から何のために？

伯爵夫人の目がそう問うている。

「西方のことを知るべく、旅をしておられるとのこと、しかし道中、自動車自動車が故障し、立ち往生されていたところを私が通りかかったのです」

この後、アカアが自動車について力説したために、妙に長い立ち話となった。伯爵夫人もこれには興味を示し、すぐに回収に当たらせることを約束した。

ようやく、ユマは屋敷に入ることが出来た。

（会話の手ごたえ次第では俺を追い出すつもりだったらしい……）

アカアの客人であれば食事時にでも問えば済む話だろう。それをわざわざ邸宅の前で行ったところに、伯爵夫人のユマに対する警戒感があったことは確かだ。伯爵夫人本人がユマとの会話を行ったことから、アカアが自分に対して好意的に解釈した情報を夫人に与えたことは間違いない。彼女を警戒させる何かは、これはユマの直感だがヌルが吹き込んだものかもしれない。

——あの者は他国の間者かもしれないませぬぞ。

くらいのことは言ったかもしれない。だが、同時にヌルはユマがあまりにも旅慣れていないことに疑問を持っただろう。それから導き出される答えは一つしかない。

「車か……」

乗り物と言えば馬車しか知らない人々を驚愕させるには十分だろう。

（車が見つかれば、とりあえずは安泰かな……）

ユマはそう樂觀した。

後で知らされたが、どうやらローファン伯は留守のようで、自分の安全を確保するにあたって最大の難関をひとまずは回避することが出来た。ローファン伯がどのような人間か、ユマは知らない。アカアの人物評はあてにならず、だが伯爵位についている以上、愚鈍でもあるまい。彼が異邦人に対して寛容であるかどうかは、使用人には聞けない。嗅ぎ回っているという事実がマイナスに働くことを恐れたのだから、ユマの臆病さはどこかの外について滑稽ですら

ある。

「車は重い。馬車の三倍は考えたほうが良いですよ」

食事に招かれたユマは、伯爵夫人に忠告した。ユマが車を乗り捨てた場所は他の領主の支配下であるようで、伯爵夫人がそれを警戒したからだ。

「それに、鍵がなければ動かない」

ユマはキーケースから出した鍵を見せびらかした。ちなみにユマは伯爵夫人が人をやったとしても車を回収できないと思っている。何より故障している上に燃料の問題で後数キロ走ればがらくたになることと、視覚的な印象を与えるだけでよいと思ったからだ。

「それが鍵なのですか？ 装飾だとはかり思っていました」

自分の知らないことがまだあったことに對して、アカアが恨めしそうに言った。

ユマは長方形に近い円卓の端の席についている。逆端に伯爵夫人が座り、横向かいにアカアがいる。それなりに声を張らなければ会話にならない。

ユマが閉口したのは、二人とも素手で食事を行っていることだった。

（そりゃあ、西洋では結構な時代まで素手で食っていたような話を聞くが……）

箸もなく、それを必要とする料理もない。あつもの羹ばかりはレンゲのよ
うな底の深いスプーンですくうことが出来るが、他が壊滅的に不慣
れだ。左横でメイドが手洗い用の水を汲んだボールを持っているが、
ユマは肉切れを一つ口に運ぶごとに、神経質に手を洗った。メイド
はよく教育されているようで、不満を顔に出すようなことはなかつ
た。

メイドの美しさはアカアには劣るが、目元にアカアには無い強さ
が見える。自我の強さである。誇り高いというわけでもなく、職務
を忠実に言うというまっすぐな気持ちがあらわれている。背は少し

高く、髪は黒い。体を引き締めるような衣服が、彼女の体が引き締まってしかも豊かであることを強調している。

（こいつを伽とけにつけられたら抱いてしまいそうだ……）

と、ユマはメイドの顔をしげしげと眺めながら思った。メイドはユマの視線に気づくと、ユマにしかわからないような微かなほかにかみを見せてから、目を伏せた。

例のごとく、蒸風呂に入ったとき、同じメイドがユマの垢を擦りに来た。

「リンと申します。至らぬところがございましたら、何なりとお言いつけ下さいませ」

垢を擦られて良い気分になりながら、ユマはふと、今の自分が奇跡的に生き残っているに過ぎないことを思い出した。

（あの時、アカアと出会っていなければ……）

この後、ユマはあらゆる場面で同じ台詞を心中で吐くことになる。それが自分にとって足かせになるとは知らずに。

——ローファン伯はどういう人かな？

喉まででかかった言葉を、ユマは飲み込んだ。使用人が主人を批評するわけがない。

「君も車を見たいのかな？」

あえて違う話題を切り出した。

「はい、馬もなしに自力で走る車というものには興味がございます」
「乗ってみたいか？」

「いいえ、わたくしなどは……」

「そうか……」

この言葉を最後にユマが黙ってしまったので、リンは彼が機嫌を損ねてしまったのかと不安になったが、少しすると寝息が聞こえてきたので、胸を撫で下ろした。

寝ぼけ眼のまま、寝室へとたどり着いたユマだったが、アカアと出会った幸運がこの日の内についていたことには気づかなかった。

一章「原初の声」了
二章「闘士衝冠」へ続く

第二章「闘士衝冠」(1) (前書き)

■一章までの主な登場人物

・ユマ

本編の主人公。本名は湯山翔^{ゆまかける}。ある日突然、異世界に飛ばされる。荒野を流浪するも、伯爵の娘アカアに保護される。

・アカア

ローファン伯の娘。王都に帰還する折に、偶然、遭難状態のユマと出会う。好奇心からユマを先生と呼び、旅の一行に加える。

・ヌル

アカアの護衛。奴隷の扱いを巡ってユマと反目する。

・リュウ

アカアが道中に立ち寄った村で、山越えのために買い取った少年奴隷。

負傷した奴隷を見捨てようとしたアカアを強諫したユマに感銘を受ける。

・ホウ

リュウの友人で、馬車に轢かれて負傷した際に置き去りにされそうになるも、ユマによって救われる。

・ローファン伯爵夫人

アカアの母。ユマが所有している自動車に興味を持つ。

・リン

ローファン伯爵夫人がユマにつけた使用人。

第二章「闘士衝冠」(1)

夢を見た。

気づけばユマは馬車に乗っていた。黄色い大地の上に打ち込まれた細い石畳の道を、馬車が音を立てて走っている。

速度はそれほど速くない。馬車の横を、数人の下僕が小走りですいてゆく。

「もう少し、速度を上げましょう」

御者台で鞭を振るう少年がそう言った。よく見るとリュウである。

「いや、ゆっくり行こう」

下僕の一人が肩で呼吸しているのを見て、ユマは言った。その丘で休息しよう——と、付け加えた。

丘に着くと、古びた小屋があった。いつの間に降り始めたのか、雨を避けるために、ユマは小屋を借りることにした。

小屋の前に、守衛らしき男が立っている。服装から見ると、ただの掃除夫のようでもある。

「雨宿りがしたいのだが……」

リュウがそう言うのと、男は小さく会釈をした。銅貨を与えるときに小さく足を引きずっていたので、ユマは「足が悪いのか?」と、声をかけた。

が、彼は言葉を発しなかった。

いぶかったユマは馬車を下りた際に男の顔を見た。
父だった。

(何故、こんなところに……)

そう思うのもつかの間、男はユマの前にひれ伏し、

「最近、息子を亡くしまして……貴族様のご厚情は大変痛み入ります。粗末な小屋ですが、ご自由にお使い下さいませ」

と言った。

ユマは言葉に詰まった。同時に、息子が行方不明になった両親は

今頃どうしているのかと思いを馳せたところで、彼は夢を見ている自分に気づいた。

「ああ……」

ため息をついたところで、夢から醒めてゆく物寂しさが全身を駆け巡った。

首を垂れたためか、頭に付けていた冠が落ちた。

主人が落とした冠を這うように拾った下僕がいた。

ユマは醒めつつある夢がまだ続いていることを不思議に感じたが、下僕の顔が自分と全く同じであることに気づくと、心中で小さく呻いた。

「うう……」

それが声となって外界に放たれると同時に、ユマは若い女の手を聞いた。

「先生？」

気づけばリンの顔が目の前にあった。ユマが安堵を覚えたということは、今しがた自分が見ていた夢は、悪夢だったのだろう。恐怖を伴う類のそれではなく、喪失感だけが残る夢だった。

「魔うまされていました」

よほど酷い顔をしていたのだろう。リンはユマの機嫌を伺うように言った。

「親父の夢を見た」

リンに言ってもどうしようもないことだが、ユマは罪悪にも似た感情に耐えられなかったのか、ついこぼしてしまった。

「まあ、御尊父ですか？」

「ああ、まだ足を引きずっていたよ」

ユマは切り捨てるような声で言った。だが口調とは裏腹に、口から出た言葉は他人の同情を誘っているようでもある。寝ぼけながらも、本人はそれに気づいたのか、リンが口を開こうとするのを目で制した。

思わず威圧感のあるユマに接して驚いたリンだったが、学者には偏屈な人間が多いと思っているためか、それとも先生は寝起きが悪い方なのだと解釈したためか、朝食の準備を済ませた頃には先の話題はおくびにも出さなかった。

「どうやらこの家での朝食は寝台の前でとるらしい。」

洗面器に汲まれた水で顔を洗ったユマは、

「今、何時かな？」

と、訊いた。ただの癖で、他意はない。

「もうすぐ八時です。王都見物は十時からのお予定です」

即答されたユマは彼女がどうやって時刻を知ったのか、興味がわいた。

「時計でもあるのか？」

「はい。ございます」

そう言って、リンは窓の外を指差した。

ユマが視線で追った先には、庭に打ち込まれた長い棒があった。

「日時計か。夜や曇りの日はどうするんだ？」

「一時間ごとに精霊台が鐘を鳴らしますし、水時計もございます。」

昨夜、お食事の席にも……」

「ああ、いいよ。どうやら寝ぼけていたらしい」

異文化であるが故に、奇抜な時計を期待したユマだったが、あてが外れた。後で腕時計と合わせて測ってみたが、ここでの一時間はどうやらユマの知る一時間と変わらないらしく、リンの言うところでは一日が二十四時間、一年が三百六十五と四分の一のことまで同じらしい。ちなみに、今のオロ王国の季節は初夏である。

（まるで地球と同じだ……）

と、ユマの中でそれ以上に発展しようの無い結論が出た。

朝食が済むと、着替えをさせられた。勿論、昨夜の内に旅装は解いてあり、既にリンの用意した衣服に袖を通しているが、今回はそれに冠が増えた。ちなみに「させられた」というのは、リンによっ

て着せられたという意味だ。ユマが戸惑ったのは言うまでもないが、例によって卑賤な者であると侮られるわけにはいかないユマは、リンのなすがまま、新しい衣服に着替えた。白をベースにした服はシャツに近い形をしていて、生地が少し硬い。動きにくいというわけではなく、外見ほどに厚くない。シャツの上から羽織るベストはアカと同じ青色で、これがこの家の好む色らしい。ただ、皮製の靴ばかりは底が薄く、ユマは屋内にも関わらず、地面の硬さを改めて思い知る羽目になった。

冠についてだが、環状になっていて、前が幅広で後ろが薄い。頭の上にちょこんと乗せる類のものらしい。左側に銀製の止め具があって、羽がついている。色はやや青い。子供用の帽子を頭にのせているような心地がして、落ち着かない。

ユマは嫌な顔をした。冠が彼の趣味に合わないこともあったが、それ以上に夢に出てきたものと全く同じであったことが彼を不気味がらせた。

「いかがなさいました」

「これをつけないとダメ？」

「五位冠ごいかんが御氣に召しませんか？」

リンがあまりにも意外そうに言うので、ユマはかえって断り辛くなった。五位冠というのは、上から数えて五位という意味だろう。冠にいくつ位があるかわからないが、王侯を一、二位と考えても、悪くない階位に思える。道中、アカアに聞いた高位の爵は、公、侯、伯、子、男の五つはあり、他にも騎士に似たような階位が十はあったようだから、ユマがこれ以上に良い冠を被りたいと言えば、さすがのリンも表情を変えるかもしれない。

だが、

——ゴイカンでいいから、他のは無いかな？

などとは、もう言わなかった。考える途中で煩わづらわしくなったのだ。ユマは五位冠で満足したが、遠まわしにアカアに訊いたところ、先の五爵は三位冠までをつけ、十士爵と呼ばれる騎士にも似た階級

が四位冠であり、五位冠は庶民で裕福な者——豪商などがつけるものらしい。それを知ったユマは伯爵夫人に自分が試されていたと思って慥然となった。だが、遠国から来た者がオロ王国の風習に慣れないのは当然であり、やはり庶民同然の者に冠を与えたところに伯爵夫人——もしくはアカアの好意があったと思い直した。

ユマが五位冠をつけることに關して逡巡したことを、リンがアカアに告げると、彼女は興奮した顔つきで、

「やはり、あの御方は貴族かもしれないわ……」

と、はしゃいだ。彼女は五位冠についてユマが自分に問うたという事実を、

——下賤なものと一緒にされたか。

という矜持きようじとして捉えた。それでも上位の冠を与えようとしなのは、ユマを侮あなづっているからではなく、実際に爵位を得なければ四位以上の冠をつける資格が無いからだ。

四人乗りの馬車に乗って、ユマは王都観光に出かけた。同乗するのは、アカアとリンだ。まずはヴォンの街をみてまわることになった。

（嫁入り前の娘に、よく俺をつけたな……）

と、ユマは心中で苦笑いをした。それだけの信用が自分にあるはずもなく、ユマとアカアとの間で過ちが起ころのは、それほどありえないことなのだろう。あの伯爵夫人も想像だにしないに違いない。馬車の横を走る人影がある。護衛のヌルとその配下だ。ユマはリユウにも王都を見せようと思ったが、ホウが屋敷でひとりきりになることはさぞ辛かろうと思いなおした。

「あれが精霊台。あれが大学。あれが……」

と、アカアが早口で説明するが、建物を遠望しながらでは理解しにくい。そのうちに彼女のうんちくうんちくに飽き、ユマは路上の人々を見下ろした。

頭に布きれを巻いた人々は、露天商によく見受けられる。ゆったりと

した白衣を着て、数人で歩いている若者は学生らしく、精霊台で術を習ったり、大学で学問に励んだりするようだ。他に、金縁の硬そうな衣服で、ぴしりと容姿を正して歩いているのは、貴族のようであり、それ以前に彼らは必ず近侍や馬車と共にあるからわかりやすい。ヴォンの中でも王宮に近い高台に彼らの姿は多く、郊外へと近づくにつれて少なくなっていく。

他の男どもは、基本的に屋敷の使用人の服を崩したような格好をしていて、明らかにそれとは異なる人々は異国人らしい。

女たちはというと、ほとんどは男と変わらず、腰元だけ引き締め、た着物のような衣服を着る者が多い。若い女のほとんどがリボンをつけているが、中には明らかに服装と合っていない者もあり、ユマを苦笑させた。しばらくの間、ユマはその色を見て楽しんでいたが、突然、弾ける様な白肌色が目に飛び込んできたので、思わず、ヒュウー——と口笛を鳴らした。

青黒い、深海からとってきたような色をした髪がそこにあった。やや肩にかかる程度の長さで、肌の色が明らかに違う異国人を除けば、長髪の多い王都では不思議な存在に見える。髪は後ろにまとめ、赤いリボンが可愛げに揺れている。

ユマが注目したのは、彼女が武装していることだった。こじんまりとした気持ち程度の肩当をしており、白い上着を圧迫するように、胸甲の止め具が背中にある。左腰には細工の施された細長い剣を下げている。下半身はいえ、生地こそ頑丈そうだが、ショート程度しか肌を保護していないため、ユマのような男でも、眩しいような色をした太腿に視線を奪われないはずがない。軍靴きんせつのような物々しい靴を履いているが、それが彼女の姿を一層華奢きゃしゃに見せている。

よく見ると、彼女を中心に人だかりが出来ている。まさかあの太腿を見るためだけに男どもが群がっているわけでもなく、中には女の子もいた。

ユマは気になったのか、アカアの観光名所案内が一区切りしたと

ところで問うた。

「あっ、それは闘士です」

と、アカアが言った。

「闘士……ここには闘技場でもあるのか？」

「では、ご案内いたします」

アカアがいたずらに成功した子供が浮かべるような笑みを見せたので、ユマは自分が的外れなことを言ったのかと思ったが、どうやら違ったらしい。

「いけません、お嬢様。お館様から闘技観戦を禁じられていたはずです」

リンが強い口調でそういうので、アカアは癪に障ったらしく、

「先生を案内してさし上げるの。他意はないわ！」

と、いつになく声を張って言った。それでもリンが引き下がらなかったのも、後で母に告げ口をされると叶わないと思ったアカアはユマにすがった。

「いや、禁じられているのなら、別にかまわない」

「先生、それは本当でしょうか。王都まで来て闘技を観ずにいることは、はっきり申し上げて、ありえないことです。西国から海を渡って観戦しに来る貴族もおります。大丈夫です。先生を退屈させたりはいたしませんわ。ですから……」

アカアが上目づかいで寄ってくるので、ユマはたじろいだ。それに、先の女戦士が剣をふるう姿を少しだけ観たいと思った。彼女の白い皮膚が真っ赤な血で染め上がる姿を想像したわけではなく、あのみずみずしい肢体が動く様を観てみたいと思った。

「そこまで言うのなら……」

ユマにしては珍しく、自分の熱さを持て余したような鈍い反応をした。

「ほら、ほら！」

アカアがユマにかこつけて闘技観戦に出かけようとしているのは見えすぎているが、たまにはこのお嬢様のご機嫌もとおかねば

なるまい——と、ユマは自分の決断をそう評価した。

（まるで子供のような……）

と、ユマは苦笑したが、アカアは今年で十五歳になる。だが、十八までにはどこかの家へと嫁いで行くだろうから、彼女が子供のように振舞えるのは今年で最後かもしれない。後から知ったが、アカアの傍で頭を抱えているリンは今年で十八歳になる。

第二章「闘士衝冠」(2)

闘技場はヴォンの南郊にあるらしく、アカアはいつになく興奮した様子で御者を急かした。その様を見たユマは、自分のせいでアカアが父からの言いつけに逆らったことで、ローファン伯に悪印象を与えやしないか――と、ほのかな焦りを覚えたが、アカアを見るに彼女は両親の愛情をたっぷりと受けて育ったようであり、苦笑と共に彼女を許すだろうと楽観した。ユマはここでローファン伯に対する事後の想像を終えたが、ローファン伯がやさしいのはアカアにだけであり、自分にもそうであるとは限らないという常識が抜け落ちてしまった。ユマにはアカアの気分を損ねてまで闘技場行きを中止する意思はなく、成り行きであるから仕方が無いという、歳不相応な無責任を行っている自覚は無い。ある意味、幼稚な手法ではあるがしたたかに責任を回避したアカアよりも、幼い。

馬車を急がせただけあって、ものの十分で南郊に入った。健脚のヌルが脱落するくらいだから、アカアの興奮は尋常ではない。従者を待たために噴水の前で馬車を止めた。

「光精の泉です」

と、ヌルたちのことなど気にも留めていない様子でアカアが言った。彼らが追いつくまでの間に先生を退屈させないようにしたいと思っっているらしかったが、ユマにしてみればそんなものは厚意でも何でもない。

「ここが……あの紋章の？」

国が興った神聖な場所を平然と紹介するアカアが不思議だったが、それもそのはずで、

「これはただの噴水です。光精の泉は、実はどこにあったのかわからないのです。同じ名で呼ばれるものは実は西のりの街にもあり、闘技場や精霊台にもあります。本物がどれであったのかは今や誰にもわかりませんが、王都の人はこれら全てがそうであると認めてい

ます。ただ、光精の泉がいくつもあるのは、さすがにおかしいので、新年を祝うと共にその年の泉が決定されます。今年はこの場所が光精の泉となるわけです」

今、ユマの目の前にある光精の泉は、アカアの言うとおりの、何の変哲も無いただの噴水にしか見えない。そう考えてみると、噴水の中央で甕かめから水を注いでいる女神像——恐らく初代オロ王だろうが——が儚く見えた。

アカアが話し終えてから少し後になって、ようやくヌルと数人の従者が追いついたが、ヌルの目に小さな怒気を感じたユマは思わず目を逸らした。

（また、やってくれたわ!）

リンに何やら耳打ちされたヌルは、一瞬、苦虫を噛み潰したような顔をした。彼は小さく舌打つと、

「お嬢様はここでしたしお待ちください。闘技場へは私が案内いたします」

と、アカアの前で跪いた。

「ええっ！ そんなぁ……」

アカアが泣き出しそうな顔をしたので、ユマは思わず彼女を弁護したくなったが、ヌルに睨まれると声が出なくなった。

（お嬢様をこれ以上振り回すな!）

ヌルは十歳の頃からローファン家に仕えている。五歳になったアカアの警護を担当したのは二十二歳の頃で、それからの十年間、彼は心身を賭してアカアを守り続けてきた。ひょっこりと現れた奇妙な旅人に、アカアが夢中になっているのをみて、不快でないはずが無い。

ヌルが本当に恐ろしいのは、アカアはただの興味本位でユマを傍に置いているようだが、それがいつ恋慕の情に変わるかわからないことだ。身分の違いすぎる二人が決して結ばれることはないが、人間の感情はそういった垣根を容易く越えてしまうことを、彼は知っている。ヌルは感情を脇においても、ユマとは根本的に合わぬ何か

を感じており、すぐにでもアカアの元から消えて欲しいというのが、彼の心情だった。根本的に合わぬ何か——というのは、アカアにとって不吉な何か——と同義だ。あえてアカアの意向を無視して彼女の闘技場入りを阻止したのも、ローファン伯の言いつけを守るためでもあるが、それ以上にヌル自身がユマという男に不吉を感じていたからだ。

表面だけを見ればアカアがユマを振り回して遊んでいるだけだが、ヌルが冷静に見てみるに、ユマはアカアの厚意に甘えているだけであり、しかも彼女からそれを巧みに引き出しているふしがある。

ヌルは雄々しく生えた顎鬚あごひげを撫でつつ、ユマの反応を観た。

——なら、そうしよう。父親の言いつけは守るように。

ユマがきつぱりとそう言えば、ヌルは彼を見直しただろうが、当のユマ本人は頭をかいたり、意味のわからぬ笑みを浮かべたりで、何かを喋りだす様子がない。

（こいつは馬鹿だ）

と、ヌルは心中で唾棄した。この程度のことすら自分で決められないのか——と、同じ男として怒りすら覚える。それともまたアカアから情けを引き出そうとしているのか。

「では、行って参ります」

ヌルは冷ややかな口調でそういうと、ユマの腕を強引につかんで馬車へと乗せた。御者は心得ていて、ヌルが何を言わずとも馬車を発した。

「あれ……あれ？」

ユマは戸惑った。自分が行ったことに過失があったのではないかと思いついたが、ヌルの機嫌を著しく損なうほどの何かをしたという自覚は無い。

アカアが見えなくなったところで、ヌルは馬車に飛び乗った。彼が突然相席に座ってきたので、ユマは驚いたが、ヌルは何を言うわけでもなく、無言の圧力をユマに与え続けた。ユマはユマで、彼の悪意を感じ取ったのか、むっつりと口をつぐんだまま一言も発しな

かった。

車輪が、からからと石畳を打つ音だけが、車内に響いた。

さて、闘技場である。

「ローマのコロッセオほどじゃあないが、見事なものだ」

ユマが感想を口にしたように、彼の視界に入ってきたのは石造の円形闘技場だ。高層ではないものの、客席は段々に盛り上がっていて、千人規模の観客を収容できる。

「アカア様がおられないから、中には入れないぞ」

と、ヌルが忠告したが、ユマにとっては外観を見るだけでもそれなりに楽しめた。それにこの人だからだ。

「この国の戦士は、どうして薄着なんだ？」

ユマがそこらを歩いている女戦士を見ながら言うと、ヌルは表情を変えずに答えた。

「あれは戦士ではなく、騎士だ。赤い四位冠をつけているだろう。」

それに、四位冠でもあれはとうししょうかん闘士賞冠だ」

ヌルが何を言っているのかさっぱりわからないユマだったが、よく見ると、女の頭にちょこんとした冠が乗っている。闘士賞冠というのは、闘士に賞される冠という意味だろうか。だとすれば、目の前の女は高名な闘士かもしれない。

「騎士は薄着なのか？」

「騎士が薄着になるのではなく、闘士がそうなのだ」

「（騎士なのか闘士なのか、どっちなんだ？）……ああ、見世物つてことね」

ユマのその言葉に、背が高く、肌黒い女騎士——あるいは闘士——が振り向いた。目に陰の色が見える。

ヌルは慌ててユマの口を塞いだ。

「滅多なことを言うな。殺されたいのか？」

ユマはしばらく口をもごもごさせていたが、何故伯爵に仕える者が、たかが闘士に気を使うのだろうと首を傾げた。

「さあ、もう戻るぞ」

そういつて馬車に戻ろうとしたところで、どこからか小さな歓声が上がった。

ユマが振り向いた先には一乗の馬車があった。それを覆うようにして人垣が出来ている。

——クウだ。

誰かが言った。同時に、馬車を降りるなまめかしい肌色が見えた。「おや、さっきの女戦士じゃないか……」

ユマは深海のような髪をした女戦士のことを思い出した。髪の蒼さに遠慮するようにして、赤いリボンが風に揺れた。

クウと呼ばれる女は、ユマが後姿から想像した以上に美しかった。目鼻立ちがしっかりと整っていて、唇が薄く、闘士であるというのに雪のように白い肌には傷一つない。アカアより少し高い程度の背は、闘士であるには不足のように思えるが、岩石のようにごつい女では人気が出ないのだろう。ユマは彼女のことを適当な相手と戦って勝つだけの、アイドルか何かだろうと思った。

（おやおや……ちいせえ、ちいせえ）

大きく盛り上がった胸甲の下を想像したユマだったが、腰のあたりの涼やかさからいって、見かけほどではないかもしれないと思い直した。これまでユマが出会った美女にはアカアとリンの二人がいるが、クウという女闘士からは、二人よりも粘性が少なく、遥かにさわやかで、儂げなものを感じる。奇妙なことだが、闘士であるはずの彼女が三人の中では最もおとなしそうだ。

「あれはクウ・フェペスだな。こんな時に見られるとは思わなかった」

そう言ったヌルの声が先ほどと違うので、ユマは、おや——と思った。だが少し考えてみると、何のことははない。彼がクウとやらのファンであるだけだろう。ユマは観客席でクウに黄色い歓声を上げているヌルを想像して噴き出しそうになった。

「貴族なのか？ 冠をかぶっていないけど……」

フェペスという姓を持っているのに、彼女は冠をかぶっていない。
「赤いのをつけているだろう？ あれは闘花冠とうかかんと呼ばれている」

ヌルの言葉に、ユマは首を傾げた。この国ではリボンも冠の一種らしい。だが、庶民の女もリボンをつけているところを見ると、もしかすると五位冠より低い、下級貴族の女がするものかもしれない。そのことをヌルに問うと、

「闘花冠は、正確には冠ではない。クウがいつもつけているから、その名で呼ばれるようになった。ただし、フェペス家は騎士爵だから、当主は四位冠をかぶる」

と、納得のゆく答えをくれた。正式な冠でないのなら、街娘たちがつけてもかまわないだろう。もしかすると、街中でリボンの女を良く見かけたのは、王都の流行のようなもので、それを流行らせたのはクウかもしれない。

「行ってみるか？ もっと近くで見みたい」

と、ユマが言ったのは、彼女に興味を覚えたからではなく、ヌルの反応を観たかったからだ。彼はやはりわきまえているらしく、「これ以上、お嬢様をお待たせしたくない。もどろろ」

と、答えた。ユマとしては面白くない。

やれやれ——と肩をすくめたユマを、ヌルは怪訝そうに見ていたが、馬車に乗ろうとしたところで、風が吹き、ユマのつけていた五位冠が飛んでしまった。小さな冠は数十歩の距離を飛んでゆき、人垣をかきわけて進んでいたクウの足元に落ちた。

「あらら、よく飛んだな」

ユマは的外れな感想を口にしたが、アカアからもらった冠を放っておくわけにもいかず、連れもヌルしかいないことから、乗りかけた馬車を下り、クウの方へと向かった。ヌルはユマが冠を飛ばされたことを知ると小さく舌打った。クウと直に話せるかもしれないという淡い期待はあったのかどうか、彼はユマの後を追った。

「うん？」

クウは足元に落ちた冠を拾い上げると、自分に近づいてくるユマに気づいた。彼女はそれが五位冠であり、自分から手渡す必要がないことを確認すると、近くに控えた奴隷を呼び寄せた。奴隷が冠を受け取り、ユマの姿を認めたところで、それは起こった。

(……あっ！)

ユマが凍りつくと同時に、向こうもこちらに気づいたようだった。その奴隷は突然、冠を落として棒立ちになった。

観衆がざわめいた。

「何をしている？」

クウの近くに侍っていた他の者が鞭を片手に叫んだが、奴隷の耳には何も聞こえず、打ち付けられたように一点を見ている。クウも、周囲の人々も、奴隷の見る先を追った。

ユマは、信じられないものを見ていた。一瞬の間に、今朝見た夢が走馬灯のようによみがえり、最後に自分が落とした冠を拾う奴隷の顔を思い出した。あれは果たして自分だったのか。自分自身のように見えたが、実は違ったのではないか。では、あれは果たして誰だったのかという――

「木田……」

ユマがそうつぶやく声が聞こえたわけが無いが、奴隷は足の力が抜けたように地に膝をつき、呆然となった。

第二章「闘士衝冠」(3)

(本当に木田なのか?)

いや、そうであるはずが無い——と、言い切れないことが、余計にユマの頭を混乱させた。こんな異世界じみた場所に、何故彼がいるのか。だが、それはユマ本人にも言えることで、自分が神隠しに遭ってオロ王国にいるということは、あの時近くにいた木田もそれに巻き込まれている可能性は十分にある。眼前で呆然としている男は、みすばらしい衣服を纏っているが、確かに木田だ。

混乱したのは木田も同様だ。彼は少しの間、我を忘れていたが、やがて自分を取り戻すと同時に、ものすごい勢いでユマに擦りより、「湯山、助けてくれ! 俺だ。木田だ!」
と、叫んだ。

「木田……木田なのか。本当に木田なんだな?」

ユマがそう言うと、木田の目元がじわじわと赤くなり、やがてそれは熱い液体でいっぱいになった。

(奴隷にされた……)

ユマが、アカアに助けられたときにほのかに感じた不安。それが現実となって目の前にある。木田の髪はぼさぼさで、目元が黒ずんでいるのは、満足に眠れないほどに酷使されている証拠だろう。

咳払いが聞こえた。あたりを見ると、クウを取り巻いていた観衆の視線が自分に集まっている。声のした方を振り向くと、渋面を作ったヌルの姿があった。

「その薄汚い奴隷は、先生の知り合いか?」
冷めた声だった。

——ほら見ろ。やはり得体の知れない奴だ。

という心中の声が聞こえてきそうだ。ユマは冷や汗をかいた。この場にアカアがいない不利に気づいたからだ。木田を奴隷の身分から解放するためには、あのクウとかいう女闘士を説得しなければな

らないが、ヌルが骨を折ると思えず、また彼にはその権限もあるまい。伯爵家の令嬢であるアカアなら、先生と慕うユマの友人を救えるかもしれない。ユマはやはりアカアと共に来るべきだったと後悔したが、同時に――アカアと連れ立ってここに来たとしても、今頃闘技場の中を見て回っている頃であり、ユマは木田には気づかなかっただろう――という直感にも似たものを感じた。容姿、表情のどちらも木田の変わりようは激しく、彼が自分に声をかけてくれなかったら、ユマは疑念を疑念のまま胸にしまいこんでいただろう。怠け癖のこびりついたユマには運命論者の一面があつて、アカアが共にいれば木田を見つけることは出来ず、木田を見つければアカアの助けを得ることは出来ない巡り合わせのようなものを、この時感じた。

（でも、まだ間に合うかもしれない）

ユマはヌルに、アカアを連れてきてくれないか――と、丁重に頼んだ。

――何故、俺が貴様のために……

声を聞かずともわかる。だが、何をやっても木田を救いたい。悪事に手を染め、そして裏切った自分を追い回した木田を、ユマはもう憎いとは思わない。あれは自業自得だとも思っている。木田に対する嫌悪や侮蔑の感情が空気の抜けた風船のようにしぼんでゆくのは、それほど今の彼の境遇が哀れであるからだ。ユマはアカアにく奴隷がどれほど酷使されているかを短期間ながらも見知っており、彼らの暗く沈んだ視線に耐えられない時がある。

「ここに連れてきてくれたら、俺の持っている物の中から、お前が望むものをひとつやろう」

ユマがそう言った時、ヌルの目が光った。

（廉直な男だと思ったんだが……）

ユマはヌルに、軽い失望を覚えた。この時、彼はヌルを欲深いとみたが、腕時計や毛布くらいしか財産を持たないユマが、たった一つの物品でもって木田を助けようというのは、いかにも吝嗇だ。こ

こは、財産の全てをはたいてでも木田を助けるべきであり、それを行えば、アカアは敬仰するユマ先生がそまでお認めになる方とはどんなお人か——と、木田の保護に興味を示すはずであり、また、ユマの情の厚さを知り、一層信頼を寄せるだろう。だが、今のユマにはそこまで考えるゆとりもなく、またそれだけの機転もきかない。「では、お前が腕につけているそれを貰おう」

と、ヌルが言ったので、ユマは左手首につけた腕時計を外して、彼に投げあたえた。

「急げ！」

ユマらしからぬ叱声を受けて馬車を出したヌルは、しかし腕時計を気に入ったのか、飛ぶように馬車を走らせた。

「お嬢様をお呼びしたところで、どうにもならんだろうが……」

ヌルは意味深な言葉を残していったが、それを気にしている場合ではなかった。

取り残された感じでユマとヌル、それに木田のやり取りを見ていたクウは、ヌルが馬車を発するのを見てようやくユマに声をかけた。

「我が家の者に何か？」

目を閉じて聴けば深窓の麗人を思い浮かべたくなるほどに、儚く澄んだ声である。

（なるほど、アイドルだ）

と、ユマは半ば安心した。ユマは威圧されると話し辛くなるほどには気弱ではなく、逆にすぐ頭に血が上ってしまう気性の荒さに自分で気づいており、なるべく穏やかに木田を引き取りたい。

「この男、私の友人でして、どういった経緯で貴方の下にいるのか。教えていただけないでしょうか？」

ユマはまず、下手に出た。こういう時の交渉は機先を制した方が利を得る場合が多いが、ユマは彼の半生における人付き合いの浅さを、ここで——人知れずだが——露呈していた。いつもの彼らしく、ぶっきらぼうに話せばよかったのだ。

「友人……この者は奴隷市で私が買ったのだが……それ以前に貴方が何者か、お教え願えないだろうか？」

クウはやや不機嫌そうにユマに問い返した。彼女に倣って、周囲から、

——軽々しくクウ様に話しかけるな！

といった野次も飛んできた。

ユマは少し迷った。ここでローファン伯の名を出すべきか迷ったのだ。だが、「私は異世界の東京から来た湯山翔です」などといえは狂人と思われるだけだろう。

「これは失礼いたしました。私はローファン伯爵家の令嬢アカアの客人で、ユマ・カケルと申します」

ユマはクウの反応を待った。彼女が伯爵の名を聞いてたじろぐのを期待したのだが、事はうまく運ぶものではないらしい。

「ローファン伯のご息女……それで、貴方はこの者をどうしたいと仰るのです？」

クウが抵抗無く話を進めるので、やや外された感のあるユマは、しかし本題に入った。

「ぶしつけながら、その男を譲っていただきたいのです」

と言ったとき、先に木田の正体をばらさなければ、安く彼を取り戻せたかもしれないと後悔した。ローファン伯の庇護にある——実はまだそうではないが——者の友人と知って、相手にふっかけられることを懸念したのだ。

（どうも俺は正直すぎる）

と、ユマは自分の人の良さを嗤ったが、彼は人がよいというよりはただ単に思慮が足りないだけだろう。二十代の半ばにある男にしてはいかに頼りない。

この時のクウの反応は、ユマの予想だにしないものだった。

クウの顔がみるみる蒼ざめ、刺すようにしてユマを睨めつけてきた。

「ヤムの犬らは、ティエリア・ザリの肉では食い足りないらしい！」

取り巻きの一人がそう言う、周囲が一斉に殺氣立った。

ユマはこの台詞の意味は理解できないが、どうやらローファン伯の名を出したのがまずかった。フェペスの一家から相当に嫌われているらしい。

「この者は既に我が家の家人だ。一家の者をヤムの家に売ったとなれば、先代に合わせる顔が無い」

横からしゃしゃり出て来たクウの付き人が激しい勢いで言った。

クウは彼を制したが、小さく頷いた。

いくら金を積まれても木田は渡さぬ——と、そう宣言されたユマは目の前が真っ暗に沈んでゆくを感じた。いや、ユマはまだ良い。この時最も絶望したのはユマの膝元でそれを聴いていた木田だろう。（確かにアカアが来てもどうにも出来そうに無い。いや、むしろ悪化する……）

ヌルが言ったことを思い出しながら、ユマは自分が腕時計を騙し取られたことに気づいたが、それ以上に、この場にアカアが現れて騒動にでもなったら、ユマを伯爵家から追放するよい口実になる。当然、ヌルはそこまで見越していただろう。

（ヤバイ、まずい。どうにかしないと……）

木田を助ける以前に、自分の身も危うくなりそうなことに気づいたユマは、徐々に顔色が蒼くなり、表情にもあせりの色が表れた。

そんな彼に鞭打つわけでもないが、クウは闘技場の方を指差し、「どうしてもと仰るのであれば、その者とともに闘技場に参られよ——」

と、冷ややかな口調で言った。闘技を行って勝ち取れということらしい。

（闘技場……）

冗談ではない。死んでしまう。

「少し、この男と話をさせていたきたい……」

ユマは力ない声で言った。木田が奴隷に落ちぶれたいきさつを知れば何か手があるかもしれないと思ったが、クウというより

彼女の周囲の者がそれを許さなかった。

奴隷の長と思しき者が、鞭を振り上げた。もうこれ以上、お前の話には付き合えぬ——という意味表示だ。それを知った木田が悲鳴を上げた。いや、彼の場合、この後どういう目にあわされるかわからない。

「湯山、助けてくれ。何でも、何でもするから……」

ユマはきつく口を縛ったまま動けなくなった。だが、木田に揺すぶられる度に、剣を持って闘士と戦う無謀さによるめきそうになった。

（木田は助けたい。でも、俺が死んでも無意味じゃないか……）

という、ユマの心情は本心ともいえないくないが、それでも偽善が残っている。ユマ自身気づいていないが、彼が声を大にして言いたいののは、

——無傷で木田を手に入れたい。

むしろそれが当然であるという無意識だ。

鞭が鳴った、ユマの眼前で空を裂いたそれは、直後に木田の背を打った。

「きゃあ——！」

木田は仰け反りながら、女のような悲鳴を上げた。

「待て。待て。闘技場に入れていうけど、俺は誰と戦えばいい？」
目の前の惨状に慌てたユマが言うと、クウは胸に手を当て、

「この、クウ・フェースと——」

と、答えた。ユマの目が光った。

（勝てるかもしれない……）

抱けば折れてしまいそうなクウの柔腰を見て、そう思った。この女が自信たっぷりに言った事実を、ユマは意識していなかった。それに——

（木田は剣道をやっていたな）

と、思い出した。高校の頃、全国大会で準優勝したほどの実力者だ。今はなまっているかもしれないが、ユマのような素人にはこれ

だけでも好材料といえる。ユマは先に、木田を取り戻したければその者と共に闘技場へ立て——と、クウが言ったのをしっかりと憶えている。

「いいだろう。受けよう……」

思わぬユマの声に、人垣が揺れるようにどよめいた。

クウは驚いたようにユマを見つめたが、やがて——

「では、七日後に竜機戦を行います」

と、宣言して身を翻した。方形の耳飾が凜と鳴った。

周囲のどよめきは歓声に変わった。その歓声の中で、木田はようやくユマの足から離された。

「ありがとう。ありがとう……」

泣きじゃくりながらそう言っていた。

「七日後だ。それまで、どうにか生き延びよう……」

竜機戦というのはもしかすると戦車戦か何かだろうか——と、クウが女の不利を脇に置いたような話し振りをしていたこととあわせて思い出したユマは、少し不安になったが、あえて打ち消した。いざとなれば、木田に頼ればどうにかなるという樂觀もあった。

クウが闘技場の中に消えた後、彼女を取り巻いていた野次馬が散々罵ってきたが、それに耐えかねた頃、機を見計らったようにしてヌルがアカアを連れてやってきた。

ユマはヌルに殴りかかろうとする自分を必死に抑えた。

第二章「闘士衝冠」(4)

「ええっ——！ 試合うのですか？ あの『闘花』と……」

ユマが事の顛末を告げると、アカアは闘技場を楽しみにしていた感情が全て吹き飛んだようだった。

「成り行きで、な……」

ユマが歯切れ悪くそう言うと、それを横目で見ていたヌルが、ふん——と、鼻を鳴らした。

「あのクウに挑戦なさるほどですから、先生はよほど闘技に自信が
おありなのでしょう……」

と、いらぬことを言ったときは、額の皮の下の血管がぶちきれる
かと思ったが、闘技場に立つ羽目になったのは事実だ。

「あの女はそんなに強いのか？」

「百戦百勝です」

アカアは上ずった口調で言った。興奮してきたらしい。

「百戦？」

「いえ、言い過ぎました。確か……」

「三十二戦全勝だ」

と、ヌルが言った。

闘技がどのようなものか、ユマは具体的には知らない。ただ、ク
ウはやはり見かけどおりの華奢な女ではないらしい。三十二回防衛
しているボクシングの国内チャンプが相手だと想像して、ユマは自
分が浅はかな幻想を抱いていた愚かさを知った。

「強いのか？」

「ただの女子が勝ち続けられるほど、闘技は甘くない」

ヌルはユマの甘い観測を見透かしたように言った。

「竜機戦と言っていたが、それはどんなものかな？」

ユマは髭の薄い顎を撫でた。何だ、そんなことも知らずに試合を
受けたのか——と、ヌルは侮蔑の表情をあらわし、アカアは呆れた。

「竜機というのは――」

と、お喋り好きなアカアが説明を始めた。

ユマは竜機戦について、騎馬戦や戦車戦を思い浮かべたが、結果としてはそれにやや近く、しかし想像を超えたものだった。

竜機とは、確かに乗り物ではあるが、車輪のついた戦車ではなく、術の施された特殊な装甲のことらしい。ものによっては馬車のように大きいと言われて、ユマはまさかロボットじゃないだろうな――と、苦笑いしたが、彼女の説明を聞く限りその通りに解すしかない。ユマにとって致命的だったのは、竜機が術士ではないと扱えないという事実だ。ユマは術士というものを想像でしか知らないが、その術士ではないユマに対して、何故、このような理不尽な条件を、クウがつけてきたのか。

「冠のせいです」

と、車中でユマに言ったのはリンだった。ユマのつけている五位冠は、術士がかぶる類のものらしく、クウはそれを見てユマを術士と勘違いしたのだろう――と、彼女は付け加えた。アカアは確かにユマを術士としてとらえていたが、彼女の厚意が裏目に出た。元はいえばユマが原因であることは言うまでもない。

リンの目に不安の色が浮かんでいる。アカアはお祭り気分であり、ヌルは対岸の火とでも言わんばかりであるから、現時点で心からユマの身を案じているように見えるのは、リンだけかもしれない。

（こりゃあ、まずった……）

どうにかして試合を取り消さなければならない。ユマが術士ではなく、竜機に乗れないとわかれば、

――では、剣にてお相手しよう。

と言い出されかねない。二対一ならまだ勝ち目があるかもしれないが、向こうがこちらと人数を合わせた場合、自分は一瞬で死ねる――と、ユマは悪寒が走るのを感じた。

伯爵邸に戻ると、一乗の豪華な馬車が庭先に止められていた。

「お父様がお帰りになられたのだわ」

アカアは久しぶりに父と対面できるのを喜んだ。そんな彼女の表情からは、ローファン伯が気難しい男だという想像はできない。彼女のような明るさを持つ父であることを、ユマは願った。

屋敷全体が哄笑^{しうしょう}で満たされたかのようだった。その豪快な笑声の主はローファン伯その人である。

「フェペスの女に喧嘩を売ったか。アカアの言う通り、面白い御客人よ！」

再び、哄笑。

髭の濃い顔だ。よく整えられた髭で、特に鼻下のそれに気品を感じる。アカアの目元は父に似たのか、大きな目をしていて、全体的に顔が四角い。よく張った顎が特徴の大柄な男だ。歳は、まだ五十を過ぎていまい。

ローファン伯が自分に好感を持っていると知って、ユマは安堵した。ひとつの危機を乗り越えたと思ったからだ。だが、ローファン伯の庇護を得ることは彼の初期の目的であり、現在の困難は何も解決していない。ローファン伯がクウと対立したユマを称賛するので、かえって試合の棄権を言い出しづらくなった。

「ヤムとは何のことでしょうか？」

まずは夕食の席を利用して、遠まわしに話を進めなければならぬ。ただし、ローファン伯が明日の晩餐にもユマを参加させると決まったわけでもなく、話を切り出すとすれば今夜しかない。

「ヤムは我が家の姓よ」

と、ローファン伯は大きな声で言った。なるほど、伯爵を名乗るにふさわしい豪快な人だ。アカアのお転婆な一面は十分に彼から受け継いだものだろう。

「なるほど……」

ユマはフェペス家との怨恨については触れなかった。ティエリア・ザリというのが何なのかも知りたかったが、ローファン伯の機嫌を

損ねてしまう可能性があるし、あとでリンにでも聞こうと思ったからだ。

ちなみに、ローファン伯の姓がヤムというのは、ローファンという氏は飽くまで封地名で、普通、封地を持つ貴族の者は名と姓と氏とを持っている。アカアの場合はローファンに封じられたヤムの家のアカアという意味で、アカア・ヤム・ローファンが彼女の正式な氏名だ。

ユマは、すると三つ目の名前を持たないクウはどうなるのか——と思った。クウ・フェペスのクウが名なのだろうが、フェペスが姓であるのか、地名であるのかわからない。前者であれば彼女は領地を持たない下級貴族であり、後者であれば姓を持たずに領地を持つ新参の貴族かもしれない——と、想像を働かせた。後で明らかになったことは、クウの場合は前者であるということだ。しかも彼女の家を没落させたのは他ならぬ先代のヤム家当主であるという。

話をもどす。

ユマはどうか試合を棄権する方向に話を持ってゆかなければならない。

（まだ、俺には車がある）

車をローファン伯に献上するという意味だ。解体してその機能を分析すれば、オロ王国で産業革命すら起こしかねない技術と文明の結晶である。ローファン伯がどのような男であれ、それを欲せぬはずが無く、ユマはこれをだしに試合の棄権と、木田の救出の両方を掛け合うつもりだ。

ちょうど、話が車の話題になった。ローファン伯はあらかじめ聞き知っていたらしく、

「ぜひともこの目で見てみたい」

と、大きな目をぎょろりと向けて言った。

——見るだけでなく、実際に乗せて差し上げましょう。

まずはこの台詞から切り出すつもりだったユマは、喉元まで声が

でかかったところで止まった。

止まったのは彼ではなく、その場の空気だった。近臣の者が小走りで入室すると、何やらローファン伯に耳打ちした。

（嫌な予感がする……）

こういうときの嫌な予感によく当たる——と、思った矢先にローファン伯から声がかかった。

「ユマ殿。フェパス家の者が汝に会いたいそうだ。なんじ私も同席するゆえ、食事後にご足労願えまいか？」

よく通る声だ。ユマは出鼻をくじかれたような気分になったが、（待てよ。木田かもしれない）

と、思い直し、「喜んで」と即答を与えた。

屋敷に太陽が飛び込んできた——と表現したくなるようなローファン伯の登場だったが、からからと笑みのこぼれる夕食の席で、ユマ一人だけが沈鬱な表情を隠さなかった。横で手洗い用の水を汲んで立っているリンだけが、人知れずユマの空気に同調していた。

第二章「闘士衝冠」(5)

ローファン伯は屋敷内の一室にユマを案内した。そこに一人の男の姿があつた。

伯爵邸を訪れたのは、木田ではなく、クウの傍に侍っていた側近だつた。

——ヤムの犬ら……

と、ユマを罵った人物だ。

伯爵が入室すると、男は立って一礼した。ローファン伯は、無言でその者の前を通り、正面の椅子に腰をかけた。ユマは伯爵の横に座することは出来ず、横向かいに席をつけた。

クウがよこした使者の名をホルオースというらしい。ふるわぬ貴族の僕しもべがいかにも似合いそうな、陰気な中年の男だつた。

「して、何用か？」

と、ローファン伯はやや高圧的な態度を表した。明らかに家格に差があるのだろう。フェース家の当主がつけるのは四位冠で、伯爵は豪華な金の飾りがついた二位冠をつけていることから、これは容易に想像できた。

ホルオースは、まずローファン伯に、ユマとクウが闘技場での試合を確約した経緯を語った。

「御友人が奴隷に……か」

何でもない。先ほど食卓でユマが話したことで大した違いは無い。だが、伯爵はあえて話を区切り、ユマにだけ理解できるように、

「そのキダという者も、あれを持っているのか？」

と問うた。あれ——とは無論、自動車のことだ。

「はい。ですが、今、彼の手元にあるかはわかりません」

ユマは正直に答えた。木田が車ごと神隠しに遭つたという保証は無い。例えそうだったとしても、彼が奴隷に落ちた時点で手放していないはずはないだろう。自分のように乗り捨ててもしない限りは。

ホルオースは二人の会話を理解できなかったが、早めに用件を済ませたいのか、ひとつ咳払いをした。

(よほど、この家が嫌いらしい……)

と、ユマが思ったのは、ホルオースの態度にある種のふてぶてしさがあったからだ。これが多少、ローファン伯の癩かんに障ったらしく、伯爵がいらいらしているのを、ユマはやや不安げに横から見ている。「伯爵殿に申し上げますのは、これが王覽試合になるということです。恐らく明日、王宮から正式な使者が送られることでしょう」

王覽という言葉にユマが耳を疑ったところで、ローファン伯は興奮をあらわにした。

「おお！ 光王御自ら御覧になるのか」

王が観覧する——と聞いて、ユマはもはや試合を中止するのは不可能だと思った。大体、クウとユマではなく、フェペス家の使者とローファン伯が話を進めているという時点で、これは私闘ではなく、決闘であり、門閥闘争であるともいえる。

(自分からすすんで鉄砲玉になったのか。俺は……)

我ながら、何という浅はかな決断をしたのだ——と、ユマは頭を抱えなくなった。あの時、試合の確約さえしなければ、他に木田を救出する方法がいくらでもあった。わざわざ自分で選択肢を潰しておいて、しかも最も困難なものを選んだ辺りがどうしようもなく馬鹿らしく、惨めに思えた。だが、悲観もしていられない。ユマが負ければ、王前でローファン伯の顔に泥を塗ることになる。たとえ試合で死に損なっても、伯爵は自分を放逐するだろう。最悪、車だけ奪われて殺されるかもしれない。

荒野に放り出されて飢えかけた拳句、幸運にも貴族の娘に拾われたと思えば、今は絶対に負けられぬ困難な闘いを強いられる。ユマはオロ王国に迷い込んで、栄達とは程遠い退屈な日常が吹き飛んだことを心のどこかで楽しんでいたが、今はそれが幻想でしかなかったことを思い知らされた。

ユマは後悔したが、その度に木田の言葉では表せない沈痛な表情

が思い浮かんだ。

「いつ以来だろうか。闘技場で賭けを楽しむのは……」

ローファン伯はしみじみと言った。ユマは賭博についてローファン伯が言及したことに疑問を持たなかった。王自らが臨席するほどの試合であれば、大金が動いて当然だろう。

ユマはふと、ローファン伯がアカアに闘技観戦を禁じたのは、ユマとクウとの間で起こったようなトラブルが結構あって、娘が軽薄にも無理な博打に手を出さないように戒めたためであるかもしれないと思った。それでいて彼がどこか楽しそうなのは、本心では闘技を愛して止まないのだろう。

ホルオースは、試合の日程、時間、闘技形式を改めて確認した。ユマが望んだように、こちらは二人で、相手はクウ一人だった。

「それなのですが……」

今更ながら、ユマは自分が竜機を扱った経験が無いことを白状した。ローファン伯の反応はアカアと全く同じで、あからさまな侮蔑の色すら見えて、ユマを失望させた。が、ホルオースの方は違った。「心得ております。キダが申しておりましたから」

と、言っユマを驚かせた。ここからは、木田もユマと同じように、キダと呼ぶことにする。

（あいつめ。バラしやがったな！）

ユマは、あえて敵に弱点を告げたキダの軽忽^{けいこ}さをなじりたくなかったが、やはりキダのやったことは正しい。現に竜機を扱えないことで、試合にすらならない可能性があるからだ。それはそれで、剣の試合に持ち込むという目算もユマにはある。勿論、相手がクウひとりならばという条件付きだが。完全にキダ頼みであることは、ユマは自分が彼を救ってやる立場にあり、死に物狂いになるのはキダの仕事として当然のことだと考えているからだ。

それにしても、扱えないから試合形式を変えて欲しい——と、頼むのではなく、より強気に、

——我ら異文化の者ゆえ竜機などは知らぬ。お前も戦士なら剣闘にて決着をつけよう。

とでも言えば多少は格好がついたのに、と、ユマはいらぬ意地を張りたがった。

「クウ様から、ユマ殿への伝言です——」

ホルオースはあえて感情を殺した目でユマを見た。そこに計り知れない悪意のようなものを感じたユマは、思わず目をそらしたくなつたが、

（喧嘩はもう始まっている）

と思つたのか、背筋を伸ばし、静かに睨み返した。

——聞く話によると、ユマ殿は遠い異国より参られ、術士でありながら竜機を扱われたことが無いという。私は王覧試合にて情けない闘士と闘うことは忍びなく、よってユマ殿に闘技場の竜機を貸し与えよう。期日までに乗りこなし、キダが竜、ユマ殿が機となり、私の竜機と技を競えることを心待ちにしている。闘技場は異国の魔術が禁じられているが、二対一とはいえユマ殿の不利も鑑み、今回はそれを不問とする。存分に魔術を披露なされよ。王もそれを心待ちにしておられることだろう。また、決闘を控えた闘士は試合の期日まで生命の不可侵権を光王より認められている。故にフェース家に挑戦する立場になったキダの身の上を、ユマ殿が案じる必要はない。

ユマはぽかんと口を開いたまま、絶句していた。それもそうだろう。どうやって逃れようかと苦慮していた難題を、迷惑なことに敵が解いてくれたのだ。ただ、

——術士でありながら……

の一言は、どうしても聞き捨てならなかったが、

（使えるかもしれない）

と、思い直した。なるべくこちらの引き出しが多いように見せておきたい。ユマが術士であるとクウに吹き込んだキダの狙いも同じ

ところにあるのだろうか。

クウの付けた条件で最大の難関は、やはり竜機を扱うという一点だろう。たった一週間で何が出来るといえば、心もとないが、それでも状況は随分好転したのではないか。

(いや、やっぱり悪化している)

試合を取り消すのが最上である以上、どうしてもクウと闘わねばならないのはユマにとって挫折以外の何ものでもない。ただ、この条件を引き出すために、キダがどれほど苦心したかは伝わってくる。何も知らないユマのためにホルオースは先の言葉に説明を付け加えた。

キダが竜、ユマが機というのは、竜機の操縦はユマが行い、竜――すなわち槍で闘うのがキダの役目という意味らしい。通常の闘士はその両方を一人で行う。戦車戦で例えれば、ユマが御者で、キダが車上の戦士といったところか。クウは手綱を片手に剣をふるうということになる。

まだ試合を中止するために粘るべきか――とも思ったが、もはやそんな機会はどうの昔に去っていたことに気づき、ユマはクウの厚意を受け取ることにした。心配だったのは、クウに悪意はないだろうが、結果的にユマを小馬鹿にしたような提案が、ローファン伯のプライドを刺激しないかどうかだが、それには及ばなかった。

――竜機を乗りこなせぬ場合は、試合を中止したい。

などといえ、ユマが飛び上がって喜んだだろうが、ローファン伯が言及したのは、クウが勝利した場合の報酬についてだった。ユマが勝てばキダを得られるが、クウが勝った場合はどうなるのか。

「ティエレンの地を、頂きたく……」

ホルオースが小さく頭を下げたところで、叱声が飛んだ。耳が震えるような大声で、声の主はローファン伯しかない。

「たわけが！ 己が身を傷つけずに故地を得ようとは片腹痛いわ。どうしてもその条件でというのなら、我らが勝った時は、フェペスの小娘を奴隷にしてやる！」

そこまで涼やかな態度を崩さなかったローファン伯が、豹変したように怒りをあらわにした。だが、ユマにとって恐ろしかったのは、確かに彼の大喝もそうだが、それ以上に、ローファン伯が「我ら」と、ユマのことを呼称したことであった。

どう考えても、クウーというよりフェース家は、ヤム家に復讐するための機会をうかがっていて、ユマは自分がそれに利用されたという感想しか出てこない。ヤム家もフェース家には良い感情はもっていないらしく、ローファン伯がクウのことを「己が身を傷つけずに……」といったのは言いすぎに思える。彼女自身、自分の命をかけて闘うのだ。それともこの言葉はフェース家の当主に向けたのだろうか。

（そうだ。命をかけてるんだ……）

ユマは閃いたことがあった。だが、あまりにも子供っぽいその思い付きを口にすべきか迷った。

幸い、ローファン伯が機嫌を損ねたため会話が止まっている。言い出すとすれば今しかない。

「ひとつ、お伺いしたいことがあります。ご返答によっては、私からも条件をつけさせていたいただきたい」

冷静に考えてみると、ユマは自分にもルールを決める権利くらいはあるだろうと思いついた。先のはクウの提案に過ぎない。これは喧嘩でも戦争でもないのだから、双方が合意しなければ試合自体が成り立たないはずだろう。

ホルオースは、ローファン伯が怒っているのを、助かったようにユマの顔を見た。ただし、声には出さなかった。

「勝敗の条件は何なのでしょう？」

「どちらかが、敗北を認めるか。さもなくば死ぬか……です」

ホルオースの淡白な答えようは、決まりきったことを聞いてどうする——とも言わんばかりだが、ユマはそこを突くしかないと思った。彼の心中に芽生えたのは、事態を好転させる秘策ではなく、いわば保険がけだ。

「それであれば、私からも条件を出したい」

ユマはローファン伯の興味をひくように、あえて彼の顔をみた。

（案の定、怒っているわけじゃなさそうだ）

この人はこの人で、フェペス家を潰す算段をしているらしい——と、ユマはフェペス家の当主に代わって、首に白刃を当てられたような気持ちになった。

「この勝負、対戦相手を死に至らしめた者を負けとしたい」

「は？」

ローファン伯とホルオースが同時に声を上げた。話にならぬと思ったのか、それともあまりにも意外すぎて声が出てしまったのか。

「この国でもそうだと思いますが、私の祖国では殺人が最も忌まれます。たとえ試合にしろ、相手を死に至らしめるなどといった行為は事故では済まぬのです（実際は済む場合もあるけど……）。私はオロの法を犯すつもりはありませんが、故郷を離れても祖国の法に触れることは許されないので」

ユマはわかりきったことを言っているつもりだったが、王都に至る道中でアカアが奴隷に見せた酷薄な一面を思い返すと、やや不安があった。それでも死ぬかもしれない勝負というものは出来る限り回避したいというのがユマの主張だった。

（俺はもう、一回死にかけたんだよ！）

無人の荒野をさまよっていた自分を思い出したユマは、あの頃の自分がかかなり無謀な博打を打っていたことに寒気すら感じる。それをまた繰り返す者がいるとしたら、ただの馬鹿にしか思えない。

二人が押し黙っているのです、ユマはやはり自分が的外れなことをいったのだろーと思った。だが、ホルオースは少し沈黙した後、

「主に諮ってみます。ただし、これは光王のご認可が必要になるかもしれません」

と答えた。ユマは、闘技場の経営者はもしや王室なのではないかと思った。国営の賭博場を思い浮かべたのだが、そういえば——と、ヌルが闘技場で嫌にユマの動向に敏感だったのを思い出した。

ホルオースが屋敷を出る際、ユマは、

「クウ殿に、ご厚情感謝する——と、伝えてください」

と言伝を頼んだ。ホルオースはまんざらでもない顔つきで、

「必ず……」

と言って去った。

第二章「闘士衝冠」(6)

次の日の朝、ユマは早速闘技場に向かうことになった。

寝こけていたところをヌルに蹴飛ばされて起きたのだから、最悪の寝覚めと言える。

「ふわあ……まずは、竜機とやらを見ないとな……」

ユマはリンをみて挨拶すると、ヌルのことは全く無視して着替えと朝食を終えた。

どうやらユマが寝ている間に王宮からの使者が伯爵邸を訪れ、試合の認可が正式におりたらしい。この一事をとっても、もはやこの試合がユマの手を離れていることは明白だった。

ユマの付き添いをローファン伯に命じられたヌルはいかにも不機嫌そうだったが、

「いいじゃないか。クウ様と話せるかもしれんぞ」

と、ユマになじられて顔を青くした。ヌルの自分に対する悪印象は拭いがたいと思ったのか、ユマは彼に遠慮が無くなった。

「行ってらっしゃいませ」

丁寧にお辞儀するリンに向かって、

「何、ちよいとオロの玩具おもちゃで遊んでくるだけさ」

と、愛想良く声をかけると、彼女は小さくはにかんで、妙に上機嫌な客人を見送った。

屋敷を出ると、路傍にて彼を待っていた人影があった。一人はホルオースで、もう一人はなんとキダだった。馬車があるが、乗るのはホルオースだけで、キダは徒歩でここまで来たらしい。

「貴方に教えていただけるのかな？」

あまりにも上機嫌なユマをみてホルオースは首を傾げたが、キダは終始押し黙っていた。ユマも、特に彼に話しかけることはしなかった。

ホルオースの言うところ、闘技は市民が仕事から解放される午後五時過ぎから開催されるのが決まりであるらしく、ユマは昼過ぎまで竜機の訓練を行ってよいとのことだった。

「郊外へ出て練習させられると思ったんだが、随分と用意がいいな」と、言ったのは、この破格の待遇にヌルでさえも啞然としていたからだ。

「それだけ、光王が貴方に期待なさっておられるのでしょうか」

ホルオースが言うのと、ヌルが鼻を鳴らした。

（嘘を言え。逃げ出さないように監視するためだろう……）

ローファン伯から頂いた書状を受付で見せると、闘技場の大きな門が開き、闘士たちの聖地に通された。円形の広い空間である。乾いた砂を押し固めたような黄色い地面が見え、がらがらの観客席は、その空虚の大きさにかえって圧倒されそうだ。

「あれが、竜機です」

と、ホルオースに言われずとも、ユマの目はそれに釘付けだった。アカアの説明を聞いたところ、ロボットのようなものを想像したユマだったが、目の前にある奇妙な金属の固まりは、どちらかと言うと首の無い竜の彫像に鞍をつけたような形をしていて、竜機というよりは竜騎というべき乗り物だ。バスケットのような丸く窪んだ操縦席があり、それに足を二つ生やしたようで、後部にはおそらく平衡を保つための尾らしきものがある。前面には小さな手が二つついており、その両方に鋭い槍を持っている。ただし、今は無人であるから、二つの足を折って座っている状態である。

ユマとキダは、立ち並んだまま無言でそれを見ていた。幼い頃、親にせがんだプラモデルがあったが、その頃の自分たちがこれを見れば嬉々として飛び乗っただろう。だが、今の二人にとってこの首なしの竜にも似たものは、自分たちを黄泉へと誘う死出の舟でもある。

これが歩く——と聞いたユマは驚くと共に、その際の激しい揺れに酔ったりしないか心配になった。

（何で出来ているんだろう？）

竜機の表面を軽く叩くと、金属にしてはやや軽い音が鳴った。肌触りは滑らかで、土で出来ているようにも見えない。

「これは二対二の闘技で使用するもので、普通の竜機より大きく、強力です。座席の前部が機、後部が竜となっており、機に乗る者は両足を操り、竜に乗る者は両手を操るという意味です。両者の呼吸が合わなければ、竜機は動きません」

ホルオースの説明を簡単に聞いた二人は、まずは竜機に乗ってみるから始めた。

「祈りを済ますように……」

乗り込もうとする二人を咎めるような声を出したのは、ヌルだった。

「オロの闘士は闘技場に立つとき、必ず神に祈る。お前たちは決闘をするわけではないが、闘技場で竜機を駆る以上、泉にて神に誓いを立てよ」

ヌルは観客席に割りいるようにして闘技場の端にある泉を指差した。そういえば——と、ユマはアカアが闘技場にも光精の泉があると言っていたことを思い出した。

信仰とは無縁のところにあるユマは、神に祈れと言われて苦笑した。

——神とは？

と、ヌルに聞いたならば、

——精霊王である。

と、彼は答えるだろう。そんなことは道中でアカアに聞いているユマは、食事前に彼女が胸の前で両手をへの字に合わせているのを真似て、誓いの言葉をしばし考えた後、思いついた言葉を呟いた。

「精霊王よ。この揺れの激しそうな不細工な乗り物で二人が酔いませんように、ご加護を——」

横でそれを聞いていたキダは噴き出しそうになったが、あえてユマに倣って神に祈った。

操縦席に乗り込んだ二人は困惑した。操縦桿そうじゅうかんやその類のものが全く見つからなかったからだ。それに内部は外と比べて粘土のような物質で固められており、何やら乗り心地が悪かった。

「内部は魔灰まはいと呼ばれる土が塗られております。魔灰は精霊の死骸ともいわれていて、念じて魔力を送れば、動きます」

というホルオースの説明は簡潔だけに、最悪にわかり辛く、二人はしばらくの間、何も出来ないでいた。

ユマとキダがやきもきしているのを傍目でみていたヌルは、おもむろにホルオースに近づいて声をかけた。

「あの二人、どう見る？」

まさかヌルに話しかけられると思っていなかったホルオースは、探るような目でヌルを見た後、感情の無い声で答えた。

「異国の術士とはいえ、クウ様に敵うわけではないでしょう」

「そうではない。俺が訊いたのは、あの二人が何者か——ということだ」

ホルオースの視線があがった。ヌルの言わんとしていることがうまくつかめないらしい。

「東方の出であるとのことですが……」

「それよ——」

ヌルが声を上げると、操縦席の二人が驚いたようにこちらを見た。ヌルは、何でもなし——と、言わんばかりに手を振った。

「東に空を飛んだり、馬車の数倍の速度で走る乗り物があるという話は聞いた事がない」

「何せ、地の果てですからな。何かあるかはわかりますまい」

ホルオースはユマの素性を疑っているわけではなさそうだ。それもそのはずで、キダは既にフェース家の奴隷であり、ユマは彼にとって他家の人間だ。そこまで疑ってかかる理由がない。だが、微かに興味を覚えたのか、ホルオースは目でヌルに問うた。だが、彼はそれ以上会話を続けるつもりはないらしく、

「いや、良いのだ」

と、話を切り上げた。

「なあ……」

操縦席の中で背をあわせるような感じで、二人はへたり込んでいたが、それまでほとんど無言だったキダが口を開いた。

「待て。俺たちが脱走の算段をしていると思われたらまずい。ホルオースはこっちを見てるか？」

キダは恐る恐る操縦席から顔を出した。どうやらホルオースはヌルと話していてこちらを見ていない。

「いや、大丈夫だ」

ユマは小さく目を閉じると、

「どうして逃げなかった？」

と、キダに問うた。朝、ホルオースと二人きりで自分を迎えたキダを見たユマは、まずそれを疑問に思ったのだ。

「俺が逃げると、お前が殺されるだろう？」

キダは、ユマの目を見ずに言った。ユマは信じられない言葉を聞いたように言葉を失っていたが、徐々にキダの言ったことが染みてきたらしく、深く頷いた。

「さて、どっちから話そうか？」

オロ王国に至ってからの、互いの身の上を知らねばならない。キダの話は長そうだと思ったユマは、まずは自分のことから話した。

「お前は運がいいな……」

キダが恨めしそうに言った。恨めしそう——では済まされない光が彼の目に灯ったのを見て、ユマはこれまでのキダの苦労が並々ならぬものであったのだろうと想像した。ただ、ユマが車を捨てたことに対して、キダは感情をあらわにして、

「なんてもったいないことをするんだ！」

と、声を荒げたため、ユマは驚いてキダの口を塞いだ。

「わかってる。自分でも馬鹿なことをしたと思ったよ。でも、ああ

しなけりや今頃飢え死んでるか、野生の猿にでもなっていたよ。それに、この試合さえ乗り切れば伯爵が車を取り返してくれる。それを売っぱらったら、かなりの金になると思うぜ」

いつまでも財産として保有するつもりのないところが、ユマはまだ賢いと言えた。燃料が有限である以上、持っけていても宝の持ち腐れでしかない。錆付く前に高値で売ったほうが遥かに良い。

ユマの言葉で興奮が止んだのか、キダは自分の身の上を語りだした。

「最悪だった」

キダによれば、彼はユマが消える瞬間を見たらしい。

「突然、周囲が真っ白になった。雷が落ちたのかと思った」

ユマが光に包まれるのを見たキダが思わず車を止めると、周囲が異様な光で満たされるのを感じた。それが止むと、今までユマの車があった場所は何もなくなっていて、ただ地面に黒ずんだ跡があった。ほんの十センチ程度の炭くずのような跡だった。驚いたキダが、車外に出てユマの姿を捜すうちにそれを発見したのだが、彼がその黒丸の傍によると、突然、恐ろしい力でその場所に引っ張られて、宙に浮いたような不快感と共に気を失った。

キダは身ひとつでオロ王国に迷い込んだ。

第二章「闘士衝冠」(7)

キダが現れた場所は、ユマと違って、王都から少し北へ抜けた先にある集落の近くだった。

着の身着のまま集落に入ったキダは、集落の長に保護されたが、その怪しい服装もあってか、冷遇された。

それでもユマとは違って早々に住居を手にした彼は幸運だったが、集落に術士がやってきた折に、邪教の信者であると告発された。ユマが思うに、王都は異教に対しても寛容であるから、キダの持つ知識がその術士の縄張り意識を刺激したのだろう。

既にキダは源精に憑つかれていたが、弁明の無駄を早々と悟った彼は、牢に放り込まれる前に集落を出ることを決意した。南に大きな都市があることを知ると、衣服を売って食を調達し、王都を目指して旅に出た。この点、キダの逞たくましい行動力はユマのそれを凌駕していたが、それだけ危険と遭遇する確率も高い。道中で夜盗に遭ったのだ。身包みを剥がされるだけでは済まず、彼は奴隷市場に売られた。

地獄に落とされたようなキダの、それからの生活は凄惨だった。犬畜生のように檻に入れられて陳列される日々である。食事をするのも用を足すのもその中で行ったため、悪臭で気が狂いそうになった。食事と言ってもジャガイモを一切れ口にすれば良い方で、無造作に檻に放り込まれるそれに奴隷どもが群がり、壮絶な争いとなった。瘦やせこけた少年から食を奪い取ったキダは、

「許せ……」

といって、泣きながらジャガイモを齧かじった。その内、糞くその臭いもしなくなった。

ある日、やはり食事を巡って壮絶な乱闘となった。あたりの奴隷を殴り飛ばしてジャガイモを手にしたキダは、

「畜生め。畜生だ、俺は。畜生に繋がれた畜生だ！」

といって、檻の外に立つ看守に向かってジャガイモを投げつけた。「剣をよこせ。お前ら全員、斬り殺してやる！」

看守はキダを引きずり出すと、数人でよってたかって殴りつけた。それでもキダは叫ぶことを止めない。だが、彼の震えるような怒りは一人の人間の興味を惹いた。

クウである。

奴隷を物色するために市場に来ていた彼女は、しばらくの間、物珍しげにキダを眺めていたが、何を思ったのか、彼の方へと足を運び、

「この者を……」

と言って、キダを買った。彼はその日からフェース家の所有となった。

クウがキダに興味を抱いたのは、彼に剣の心得があることを見抜いたからだ。彼女がそのことを問うと、

「はっ、よくわかったな……」

と、キダは唾を吐いた。すぐさま近くにいた従者によって叩き伏せられたのは、言うまでもない。

クウはキダの気性の荒さを買っているようだった。彼が剣をやると聞いて、

「ふふ、私に勝ったら、開放してあげる……」

と、冗談紛れに言った。闘士としての自信と誇りが、そう言わせるのだろう。

キダはこれを真に受けた。

彼はクウに気に入られていたせいか、彼女の護衛にまわされた。

最初に剣を持たせたとき、彼が奴隷の長を見事に叩き伏せたからだ。それから数日も経たない間に、キダはクウに牙をむいた。闘技場から出てくる彼女を襲ったのだ。喉元に剣を突きつけられ、それで勝ち——と、思っていたのだが、彼はしくじった。クウの力量を見誤ったというより、あまりにも無防備に背を向けるクウに対して、一瞬だけ躊躇してしまった。

キダが剣を突き出したのは、クウが振り返った後だった。彼の放った剣刃はいとも容易くかわされ、気づけば地に伏した自分の喉下に剣先が伸びてきた。

「無礼者！」

さすがのクウも、飼犬に手を噛まれたとあっては、キダを許すわけにはいかなかった。彼は奴隷の中でも最下級の身分に落とされた。それだけではなく、罰も与えられた。

「罰？」

と、ユマが話の腰を折った。

「これさ……」

キダは裾をまくって自分の踵かかとを見せた。朱色の刺青が施されている。

「あの女の魔術だよ。主人の意に反して走れば踵が碎ける。そういうものらしい。お前はホルオースが俺を監視していると思っているようだが、もともと無理な話なんだよ」

「まさか……」

最初はキダもそう思っていたが、意を決して夜中に脱走しようとしたところ、少し走ったところで踵が裂けるような痛みに襲われた。この時、キダはクウに無用の情けをかけた自分を激しく悔やんだ。クウの剣術は優れているが、この国の剣術自体がまだ体系化とは程遠く、どこか荒い。キダがクウに勝つ見込みは十分にあった。だが、もうクウに挑む機会は二度と来ない。

それから、キダの目から生気が消えた。クウは意気消沈した彼への興味を失ったらしく、やがて声をかけることもなくなったが、「そこにお前が現れた」

と言ったとき、キダの目が光った。ユマが王都を訪れたとき、クウに追従していたキダは、車上にユマと思しき人物を見つけたが、確信を持てず、そもそも奴隷の身分である以上、気安く他家の者に声をかけられない。だが、幸運にもユマは闘技場にあらわれた。キ

ダは、自らにとってこれが最後の幸運であるような気がした。

（こいつ、やっぱりしぶといなあ）

ユマはキダの粘り強さに感嘆しそうになった。自分ではとてもキダのように出来ない。

「まだ動かせんのか？」

沈黙したままの竜機に痺れをきらしたヌルの声が響くと同時に、二人の体験談は打ち切られた。

「動かすも何も、ハンドルすらないじゃんよ。これ、壊れているんじゃないか？」

ユマは雑談をごまかすように声を上げた。するとホルオースが寄ってきて、

「ハンドルが何かは解しかねますが……どう動かすかは術士ごとに違います」

と、奇妙なことを言った。

「要は想像です」

術士にも色々な流派があって、例えば火術士は火の力で竜機を動かそうとするため、火術を司る両手を操縦席に埋めるという。他にも土術士は足で操縦するという。なるほどこの操縦席を覆う柔らかい粘土のような物質だとそれも出来ようが、ユマは術士ではない。

「まずはやってみて下さい。クウ様が貴方を術士であると仰いましたことに偽りは無いはずですよ」

ホルオースが何やら自信ありげに言うので、ユマは閉口してしまった。

彼はその場に座り込むと、

「これが巨人だったらなあ……」

と呟いた。キダが小さく嗤った。

「懐かしいな。お前、猿みたいにやってたからな」

「そんな、猿に全戦全勝してたゴリラはどいつだよ？」

ユマが言う巨人とは無論、言葉どおりの意味ではなく、アカアか

ら教わったことでもない。彼らが神隠しに遭う前、元の世界で遊んでいたビデオゲームの略称である。「慈悲なき巨人」という題名で、巨大なロボットに搭乗したパイロットに扮するアクションゲームだ。球形の筐体きょうたいの中に専用の操縦席があり、前方と左右、それに上方の液晶スクリーンに操縦席からの視点が映し出される。ちなみに、ユマが悪事に手を染めるきっかけとなった話は、この筐体で賭けを行った際に、負けたユマがキダに持ちかけられたものだ。

懐かしい——と、キダは言ったが、二人が最後に巨人で遊んでから一月も経っていない。それほど互いに多くの体験を、この短期間に重ねてきたわけで、あの頃には戻れないという現状が、彼らの心に水を落としたのかもしれない。

「想像……ねえ」

ユマが思い出したのは、かつて賭けを行ったキダとの対戦だ。あれから自分の人生が狂い始めたような気がする。その時の対戦で勝利していれば、キダは老人から金を騙し取るような悪事に自分を誘うようなことはなかったかもしれない——というのは、ユマの都合の良い想像だろう。

（あの時は開幕でこけたんだ……）

ゲームが始まるや否や、いつもはしくじるはずのない巨人を発進させる操作を誤り、それが後まで尾をひいて、キダから主導権を奪い取ることが出来なかった。

——何か、賭けようか？

というキダの台詞が重圧となり、操縦桿を手取るユマの判断力を鈍らせたに過ぎない。

（もっと、こう……）

ユマは虚空を見ながら、その場面を再現した。既に自分がどのような状況に置かれているかは、忘れている。

操縦桿を手前に引いて、ゆっくりと巨人を立たせる。

（焦るな。重心が安定するまで動いちゃダメだ）

少し待ってからユマは操縦桿を前に倒した。キダとの対戦ではこ

ここで焦って転倒してしまった。その隙に背後に回られてキダに攻撃されたのだ。

次に左右の液晶に照らし出されたレーダーを確認し、索敵を行う。巨人は歩き始めている。ユマには、背後を取ろうと回り込んでいるキダの姿がありありと見えた。

と、その時、

「ユマ。おい、聞いてるのか？ ユマあ！」

キダに揺すられて初めてユマは我にかえった。視界が大きく揺れている。

ユマは、自分の乗る竜機が歩き出していることに気づいた。

「おお、ははは……こりゃあ、すげえや！」

よく見ると、自分の手は操縦桿を握ったままだ。粘土のような操縦席の内壁が盛り上がり、ユマの望む姿を形作っている。この粘土のような物質は人の意思を感じ取る力があり、ユマが操作しやすい形を念じれば、それに合わせて姿を変えるのではないか。術士によって乗り方が違うというのはそういうことで、また、術士と竜機の間で意思の伝達を行うのは、魔力などという抽象的な力ではなく、人の意思を司る源精なのではないか——と、ユマは揺れる操縦席で想像した。

「おや、動きましたな……」

と、ホルオースが言う前に、既にヌルは驚愕の表情を浮かべていた。竜機がうなるような音を上げて立ったかと思えば、すぐに歩き出し、果てには軽快に走り出したのだ。ユマとキダは操縦席で子供のように歓声を上げている。その姿からも、彼らが竜機を動かすのが初めてであることは疑いようがない。

「東方の術士は、なるほど得体が知れませんな」

ホルオースはヌルに言った。彼がユマと決闘するクウの配下であることを考えると、敵であるユマを応援するのは奇妙だろう。ただ乗りこなすだけでは、クウには及ばない——という自信があるのだ

ろうか。

「これで、試合になります」

といったところで、ヌルは彼の思惑を理解できた。クウが負けることは万に一つもありえない。要は試合にこぎつけさえすれば、フェース家は容易く故地を奪回できる。

昨夜、ホルオースが不遜にもローファン伯に突きつけた条件であるティエレンの地は、王都から北東へ百公里ほど離れた寂れた街で、伯爵にすればこれを失ったところで痛くも痒くもない。

だが、闘技に光王から賜った土地を賭けるというのは異様と呼べるもので、光王が試合の許可を出したとなると、ローファン伯は死ぬ気でティエレンを守らなければならなくなる。ローファン伯がそれを理解していれば、今頃は息のかかった者が宮廷で光王に試合の中止を言上している頃だろうが、ヌルの見るところ、彼は今回の試合を機にフェース家の息の根を止めようとしているようにも見える。
(あのような小家にはかまいまするな！)

身分の違いもあって、ヌルは政治向きのことをローファン伯に告げることが出来ない。どう考えてもこちら側のリスクが高すぎるように思える。フェース家は勝てば故地を得、負ければクウが奴隷の身分に落とされる。だが、ヌルの仕えるヤム家は負ければ土地を失うが、勝っても得るものはほとんどない。この度の試合は、道を歩く者が小石に喧嘩を売られたに等しく、ヌルとしては中止するに越したことはない。この点、皮肉にも彼とユマの目的は一致していた。勿論、両者ともそれに気づいてはいない。

ユマはしばらく竜機で闘技場を歩き回ったが、キダと交代すると、竜機はぴくりとも動かなくなった。

「嫌われたな」

と、ユマが笑いながら言うと、キダは不愉快そうに鼻を鳴らした。

——ほほ……

誰かの笑声が聞こえた気がしたユマは、背後を振り返った。小さな泉が、よどんだ水を漂わせている。

「お嬢様が屋敷を抜け出てきたかな？」

あのアカアならやりかねない——と、ユマは小さく笑った。お嬢様——と、聞いてキダの表情が曇った。彼にとってお嬢様と呼ぶべき存在は、クウなのだ。

第二章「闘士衝冠」(8)

二日目には、キダもユマと同じように竜機を立たせることが出来るようになった。ここで、本来の配置である、ユマが脚部、キダが腕部の操作に専念することになった。

どちらも動きがちぐはぐながら、どうにか呼吸が合ってきたところで、彼らに声をかけた者がいた。

アカアだ。

闘技場への入場を禁じられている彼女が、どうしてここにいるのだろう。

「ローファン伯からの使いで参りました」

と、アカアは丁寧にお辞儀をした。彼女の横に、紅い鎧を纏った女闘士がいた。どこか華奢な感じがするクゥと違って、背が高く髪の毛の長い女だ。

「何だ。素人じゃないか……」

少し低めのかすれた声である。

(何だ。このごつい女は?)

と、その女にあまり良い印象を持たなかったユマだが、どこかで会った気がしなくもない。待てよ——と、記憶をたどった。

(あの日に、闘技場にいた女か……)

——どうして、この国の戦士は薄着なんだ?

と、ヌルと会話をした際に近くにいた闘士だ。ヌルが赤い四位冠をつけているから、あれは戦士ではなく騎士だ——と、返したのを憶えている。

「王宮名誉闘士のシャナアークス・オルベル様です。先生にはこの方のご指導を受けていただきます」

アカアの言葉を聞いたユマは、ヌルが、闘技場でユマがうかつな発言をしないように気を配っていたことを思い出した。なるほど、頭に王宮のつくような人物だ。さすがの伯爵も敬遠しよう。

シャナアークスはさすがかとユマの方に歩み寄ると、
「見世物の闘技でよければ、お前たちに教えてやろう」
と、大きな声で言った。

（うへえ……憶えてんのかよ）

ユマは冷や汗をかいたが、

「よろしく……」

と、握手を求めた。すると、シャナアークスは腰にかけていた鞭を振り上げてユマの腕を打った。

「痛え！ 何するんだ！」

ユマが睨むと、女は低い声で威圧するように言った。

「分をわきまえろよ。王命でなければ、貴様のような屑の相手をするか！」

（屑だと……）

ユマは全身がかつと熱くなるのを感じたが、ここはこらえた。彼は容儀を正すと、

「よろしくお願いします」

と、頭を下げた。シャナアークスはそれでも不満なのか小さく鼻を鳴らした。

（糞が。とんでもない女を連れて来やがって……）

ユマが恨めしげにアカアの方を見ると、彼女は「こういうお方ですの」とでも言わんばかりに、苦笑した。ユマは心のどこかが暗くなった。

隣のキダが言葉を発しないので訝ったユマが彼の方を見ると、何やら遠くを見るような感じで突っ立っていた。シャナアークスがキダに視線を移したので、

（おい……キダ）

と、ユマは肘でキダを小突いたが、それも終わらぬうちに彼女の張り手がキダの胸元を打った。小枝を勢いよく折ったような音が響いた。

「――ってえ！」

キダが蹲るようにして咳き込むと、シャナアークスは間髪いれずに彼の鳩尾みぞおちを蹴った。シャナアークスは倒れこんだキダの頭を踏みつけると、

「よろしく」

と、威圧するように言った。キダは呻くようにそれに答えた。

「よし、早速はじめるぞ」

まさか挨拶もそこそこに特訓が開始すると思わなかった二人が顔を見合わせていると、

「私とて、暇ではないのだ。さっさと動け！」

と、シャナアークスは腰につけてあった鞭をとって鳴らした。ユマとキダが悲鳴を上げるようにして竜機に乗り込んだ。操縦席に着いた際にキダが、なあ——と声をかけてきたのでユマは振り向いた。「当たり前……」

口の片端を微かに曲げて、キダは笑った。ユマには彼が何のことを言っていたのか全くわからなかったが、先ほど彼がシャナアークスの豊かな胸元に視線を移したまま惚けていたことを思い出すと、すぐさま諒解した。

「おい、本気か……お前、足蹴にされたんだぜ？」

「男を足蹴にする女なんて、そうそういない」

「いい趣味をしてやがる」

ユマはからからと笑った。

「お前ほどじゃあない」

キダにそういわれた時、何やら期待を込めたまなざしを自分に投げかけるアカアの顔が映った。だが、ユマがキダの誤解を解く暇もなく、シャナアークスの特訓は始まった。

「何て女だ……」

台詞と一緒に青い息が出そうだった。一度の休憩もなく、鬼教官としか言いようのないシャナアークスの猛特訓にさらされたユマは、今こうして地に足をつけて歩いている自分が不思議なくらいだった。

彼は既にローファン伯爵邸に戻っている。帰ってきてからは食事
も喉を通らない程度に疲労していたが、

「シャナアークス様から、きちんと食事をとるまで睡眠をとらせる
なと仰せつかりました」

と、リンに言われ、ユマは胃袋に詰め込むように、ろくに咀嚼そしゃくも
せずに食物を飲み込んだ。

訓練が始まったとき、ユマとキダを竜機に乗せ、また自身も別の
竜機に乗ったシャナアークスは、

「はつきり言って、今日初めて竜機に乗ったような輩が、闘花と闘
って勝つ見込みは全くない。試合まで五日。私が付いてお前たちを
教えたとしてもだ。だから、基本操作を学んだら、次は実戦で己の
知恵を磨け」

と言い、午前中は主にキダに竜機を用いた槍の扱いを教えた後、
午後から模擬戦を行った。

「遅い。弱い。考えていない！」

シャナアークスは手加減して戦っているようだったが、当の本人
たちは巨大な槍が自分の頭の横を掠める度、死にかけたと思った。
ユマの操作は拙つたなく、キダの打ち込みは弱く、そして互いの連携がち
ぐはぐな上、各々の判断が鈍い。

「地道にやっていくしかない」

愚痴にも似た言葉をユマが呟くと、

「馬鹿野郎！あと五日だぞ」

と、キダが激しい口調で言った。ユマと違って剣道で己を鍛えた
経験のあるキダは、彼の甘さを許さなかった。互いに連携がとれず、
不満といらいらをつのらせたことも一因ではある。

最後には互いに口もきかなくなった。いや、これには疲労による
ものが大きいだろう。

（昨日より今日、今日より明日だ……）

相変わらずの楽天的思考によって今日という一日を締めくくった
ユマだったが、キダは彼と違って、フェペス家に戻った後も、どう

すればシャナアークスに勝てるのかをずっと考えていた。キダはクウの試合を見たことはないが、彼女が竜機で訓練しているところを見たことはある。その時のクウの動きを思い出してみても、シャナアークスより遥かに強いという印象はない。シャナアークスに勝つ実力があれば、クウにも勝てるはずだ。ただし、人を見くびる癖のあるユマにはこのことを言わなかった。

（ユマには勝負というものがわかっていない。そもそも、自分を鍛えるということがあいつにはない）

人は目的を達するために努力をする。それは確かに地道な作業だが、ユマの考えるように人間が日を重ねるごとに成長するのならそれで良い。だが、前があって後ろがないということがないように、人は後退もする。細かな進退を繰り返しながら人間は進化してゆく。そのくらしいことはユマにもわかっているだろうが、彼には人間が進退する生き物であるという思想はあっても、進退の内容にまでは考えを及ぼしていない。

キダにとって、成長とは閃きである。人は実は常に成長しているのではなく、突然、変わる。今まで蓄積されたものが、閃きという現象で放出される。短距離走の選手は、徐々にレコードを縮めてゆくわけではなく、彼らは練習を積み重ねる内に、ある日突然、速くなる。それは、できるだけ大きく、強く成長したい——という人間の願望から来るものではないか。地道にという言葉を好んで使う人間ほど、怠け者はいないと、キダは思っている。貪欲なほどに自らを高めたいと、その他の全てをかなぐり捨ててでも、強くなりたいと思う険しさがなければ、人は真に成長することはない。人は、時を経れば人格が変わるが、それは成長とは呼べまい。

（だから一年も浪人をしたにも関わらず、三流大学しか受からないんだよ）

高校を卒業して、すぐに就職したキダは、ユマの甘さに嫌悪を覚えるときがある。今がそうだった。

ユマという人間の不思議さは、次の日になれば、まるでキダの心中の声を察したかのように険しい表情で模擬戦に望んだことだ。彼がキダの思想を理解しているとは思えないからこそ、余計に不思議なのだ。

（こいつはこいつで考えているらしい）

相変わらず楽天的に——と、キダは付け加えた。

ユマとキダは互いに尊敬しあうような仲ではない。むしろ互いのことを心中で軽蔑しているふしがある。一言で表すと悪友だが、キダはユマと付き合っていると、時々、

（おや？）

と、思うことがある。それはユマの独特な思想を垣間見た瞬間であり、それが思考となって一つのかたちとなった時、キダが先に述べたような閃きとなって顕れたりする。こいつはもしかすると天才なのではないか——と思ったりもするが、平素の言動があまりにも俗人過ぎて、キダに限らず、ユマに接する人間の多くがこの一事で彼のことが理解不能になる。

——他人のことがわかる奴なんて、いないさ。多分な。

ユマが、多分——と、語尾に付け加えるとき、彼が考えていることは逆のことを言っているのではないかと疑ったことのあるキダは、ひょっとするとユマの閃きは、この矛盾の産物ではないかとも思ったりする。矛盾した理論は存在を許されないが、矛盾という概念は創造の源となる力を持っている。矛盾が何かを創造したとき、それは矛盾ではなくなる。

「足が要らないかな……多分だけど」

竜機の「機」を担当するユマがそう言った時、キダは思わずユマの顔を見た。より速く走りたい——というユマの心中の声の一つの閃きとなって外界に放たれた証ではないか。

「どうということだよ？」

キダにそういわれて初めて、ユマは自分の言ったことの意味を理解したようだった。

（他人を壁か鏡くらいにしか思っていない）

ユマという人間にとって、他人ですら自分が自分を見るための鏡であるのかもしれない。だが、そういった態度は鏡にされる側にしてみれば、不快でしかない。ユマは別に著しく礼儀に欠ける人間ではないが、時々見せるこういった素振りがユマ本人を不幸にしている。要するに少し嫌味なのかもしれない。それでも随分と愛嬌のある方だから助かっているともいえる。

「揺れだ。揺れが悪い」

ユマの言うとおりでろう。二本足をつかった竜機の歩行は上下運動が激しく、その揺れが二人の操作の妨げになっている。

「キャタピラでもつけるか？」

キダが冗談半分で言うと、ユマは大きく頷いた。

「出来るかもしれない……」

と、思いもよらないことをいったので、キダはユマの顔を覗き込んだ。

第二章「闘士衝冠」(9)

「シャナアークスを見ろ」

シャナアークスが駆る竜機は、ユマたちのそれに比べてやや小さい。だが問題はそこではなく、彼女の操縦方法にあるという。

「確か、あいつは火術士とか言ってたな」

キダが思い出したように言った。火術士といっても、何も無いところから火を熾したりするのを見たわけではない。キダに限らずユマも魔法のようなものを実際に見たことはなく、彼らが駆る竜機がそれに近いが、原動力が不明なだけでこれですらも立派な機械だ。要するに二人にとって、シャナアークスは火術闘士というより、竜機操縦士である。

ホルオースがかつて言ったように、シャナアークスは操縦席に両腕を突っ込んで直に魔力——ユマが思うに源精を介した何らかの信号——を送り込んでいる。それを受けて竜機が動くのだが、彼女の竜機はこちらとは造りが違うのか、エンジン音にも似た轟音を伴う上に、竜機の踵の部分から淡く火を吐いている。駆け出すときに爆発するような音が聞こえるのは、決して飾りではなく、その力を利用して竜機の機動性を増しているのだろう。

ユマが注目したのは、竜機自体も操縦席と同じく乗る者の意思によって形を変えるのではないかということだった。

「やってみる価値はある」

と、ユマが言った。キダも彼の想像に興味を覚えたらしく、

「よし！」

と頷いた。

(要は、想像力だ)

ユマはホルオースが言ったことを思い出していた。彼の言葉は何も竜機の操作方法に関してだけではあるまい。

(キャタピラは無理だ)

具体的な想像が出来ない。何の根拠もなく、それを思い描き、実際に形作ったとしても、多分動かないだろう。他に揺れを解消する方法があるのか。竜機を浮かせるという手もあったが、これには多大なエネルギーが消費されるに違いなく、結局はシャナアークスと同じように加速に転化したほうが効率が良い。

（これしかない）

と、ユマが思い定めたとき、竜機の形が変わった。

（本当に素人か？）

シャナアークスは、二人を相手にしながら、内心舌を巻いていた。彼女を驚かせたのは、二人の適応の早さだ。竜機に乗って三日目の者が、これほどに巧みな操作を行うものだろうか。だが、実戦経験に乏しいのは目に見えて明らかであり、そこでシャナアークスが得た結論は、

（竜機に似た何かに乗った経験がありそうだ。しかも一度や二度ではない）

というものだった。二人は乗り物に乗るということに慣れている。ということは決して身分は卑しくなく、アカアが言っていたように、本当に東方の豪族かもしれない。学問のためにオロ王国を訪ねたというが、豪族の男が単身でそれを行うはずもなく、何か悪事を働いて追放されたのかもしれない。どちらにせよ、卑しい素性ではあるまい、とシャナアークスは考えた。

他に、驚いたのは、二人が高速で動く乗り物にすぐさま順応したことだ。それに、操縦席の異様な光景が彼女の好奇心を大いに刺激した。

「舵をとっているのか……奴らは馬鹿か？」

シャナアークスが想像だにしないことだった。魔力を直に伝えれば竜機はそれだけで動く。なのに二人——特にユマは複雑な機器類を作り出し、それを使って竜機を動かしている。しかも、手馴れている。シャナアークスは風の噂でユマが馬車よりも速い乗り物を持

っていることを聞いたが、ここにきてようやく噂を信じる気になった。ちなみに竜機は乗用にはほとんど用いられない。馬車のほうが遥かに利便性に長けるからだ。火術士や風術士の扱う竜機は確かに速いが、魔力の消費が激しく、長距離を駆けることは出来ない。ただし、王宮直属の精鋭部隊には竜機のみで構成されたものがわずかに存在する。彼らが大陸最高の術士たちであることは言うまでもない。

さて、シャナアークスの眼前に広がる光景に戻ろう。

ユマたちの乗る竜機の足が、徐々に姿を変え、やがて両足の先に四つの車輪が形づくられた時、シャナアークスは妙な高揚感を覚えた。

——実戦で己の知恵を磨け。

と、訓示したことを実践した二人に驚いたのだ。どれほど物分りの良い者でも、何かを閃くにはまだ早すぎる。

ユマの竜機が動いた時、シャナアークスの驚きは戦慄に変わった。凄まじい速さで飛び出してきたそれは、瞬く間に眼前に現れ、シャナアークスの槍と激突した。辛うじてそれをさばくと、ユマの竜機は大きく反れてあさつての方向に突進し、壁に激突して止まった。ユマは竜機の外に放り出され、光精の泉に落ちた。

（地面を滑ってきた……）

右足を踏み込むと同時に加速し、左足で踏み込めば更に増す。それを繰り返して動くのだが、操縦席がほとんど揺れていなかったためか、キダの放った槍が恐ろしく正確だった。

一瞬、腹の底が熱くなった。竜機を乗って数日の初心者に肝を冷やされたのが不快だった。

だが、同時に自分でも気づかぬ間に、彼らの成長を認めていた。
（形になるかもしれない）

これで、自分より腕が劣るくせに闘花などと呼ばれていきがっているクウが、奴隷に落ちぶれる様を見られるかもしれない。シャナアークスは性格に粘性を持つ方ではないが、闘技場でクウとすれ違

うたびに彼女が自分に投げかける視線に侮りがあることに怒りを覚えてきた。

（弱小貴族の娘に過ぎない身で……）

シャナアークスの方は代々王族に使える身分で、彼女自身が騎士爵を持っている。対してクウの家は当主が騎士爵であり、クウ自身が冠をつけるにふさわしい身分にあるわけではない。

クウは確かに人気があり、戦績も良いが、彼女の人気は容姿によるところが大きく、闘技場の経営権を持つ王宮も彼女に肩入れしているふしがあり、最近では格下の相手と戦ってばかりいる。一度、彼女に試合を申し込んだが、それは成立しなかった。クウという存在はシャナアークスの闘士としての誇りを傷つけたのだ。

（クウは喧嘩を売る相手を誤ったかもな）

シャナアークスは小さく嗤った。嗤った後で、泉に落ちたユマが中々浮かんでこないことに気づいたが、自分にわずかな恐怖を感じさせた男を、すぐには助けようとしなかった。

——ほう、中々やるな。だが、お前は土に嫌われているぞ。

誰かの声がした。女の声だったが、誰のものだかはつきりとわからない。だが、どこかで聞き覚えがある。アカアか、リンか、クウか——

（リンか、クウならいいな）

と、ユマは透き通るようなクウの肌を思い出した。やがてクウの姿は色黒で長身の女に変わった。シャナアークスだ。

「あっ！」

声を上げた口に、勢いよく水が流れ込んできた。ユマはこの時、自分が泉に叩き落されたことを思い出した。あがきながら、上方に手を突き出すと、その手をつかまれた。

泉から引き出されたユマは、飲み込んだ水を吐いた。

「今日はここまでにしよう」

まだ昼過ぎだが、シャナアークスの目にはユマの体力が限界に近

づいているように見えた。

「まだ、やらせてくれ……今の感覚をおぼえておきたい」

（甲斐性がなさそうな面をしているが、中々殊勝なことを言う）

ユマの言葉は、シャナアークスを喜ばせた。百戦錬磨のシャナアークスが教えても、当事者にしかわからぬ感覚がある。教え子の感性を尊重するのがよき教育者というものだろう。たえユマたちを下賤なものと見てびっぴってはいても、彼女は彼女なりに自分の務めを果たすつもりなのだ。

だが、ユマの言った「今の感覚」というのは、氷上を滑るような竜機の操作ではなく、壁面に激突した時の衝撃のことだった。

（あれくらいで振り落とされるようだと、本番で何も出来ない）

そういった彼の脳裏には勝負とは激戦であるという前提が置かれている。勝負事にこういった観念を持つ人は、かえって押し切るべきときに押し切れず、勝負弱い。あえていえば、圧倒的な力でクウを圧殺するという想像がユマには出来ない。それは優しさというベキだが、闘技場では弱さの一言で片付けられてしまう。キダが感じるユマの甘さとはこれだった。振り落とされることに慣れるよりもより速く竜機を走らせることのほうがよほど重要だというのに、ユマの心の目はそちらに向かない。

「よし、良いだろう」

模擬戦は再開されたが、その後、ユマの乗る竜機には先に見せたような冴えはなかった。シャナアークスはユマが激突に怯えていると思い、

「先の威勢はどうした！」

と、声を張り上げたが、それでも変わらなかった。

（所詮は田舎あがりよ……）

シャナアークスの目に侮蔑の光が映った。それを見たユマは、かつてアカアに人並みの人格を期待した自分がいたことを思い出した。竜機を降りたとき、ユマはホルオースの元に戻ろうとするキダに駆け寄り、

「明日、試したいことがある。剣道を思い出しておいてくれ……」
と、言った。ホルオースには明かせないことだと思ったキダは、
あえて疑問を口にすることなく、

「わかった」

と、返した。

（あと、四日か……）

風が吹くと、舞い上がった闘技場の砂が口に入った。

——家に帰ったらさっさと休め。夜遊びが過ぎてティエリア・ザリ
になるなよ。

闘技場を去る間際、シャナアークスが言い捨てた言葉がユマの頭
にこびりついている。

「ティエリア・ザリというのは何だ？」

いつものように蒸風呂で一日の疲れをとっていたユマは、髪の手
入れを任せるついでにリンに問いを投げた。

ほんの軽口だったのだが、ユマは周囲の空気がすっと下がるのを
感じた。リンは明らかに動揺していた。

「どこでその名前を？」

「（へえ……人名だったのか）闘技場の前でフェス家の従者だか
に言われたよ。ヤムの奴らはティエリア・ザリの肉を食っただけで
はなんとやってね」

ユマは危うい話題に触れてしまったことに気づき、気まずい空気が
流れ始めたのを後悔し始めた。どうにもローファン伯爵家でこの
名は禁句らしい。

リンは若い学者——自称だが——の表情から見て取ったのか、ユ
マの手をとって安心させるように、優しく忠告した。

「先生、二度とその名をこの家で口にしてはなりません。特に御館
様の前では……」

「アカアは？」

「絶対になりません」

「あ、ああ……わかったよ」

リンの声色が重く凄みを帯びてきたので、ユマは思わずたじろいでしまった。

当然ながら、次の日も訓練は続く。

ユマとキダが操る竜機は、前日よりさらに精彩を欠いていた。一度見せた四輪の竜機も、速度が一定でなく、よく転んだ。最後の方になってようやく持ち直し、シャナアークスの槍をなんとかさばくことが出来るようになった。それでも不安定で、時折恐ろしく正確な動きをするかと思えば、槍さばきが全くなっておらず、またその逆もあった。

いわゆるスランプに二人が陥っているのではないかと思ったシャナアークスは一考した。

（一度、クウの試合を見せておいた方が良いかもしれない。そういえば、明日試合があったな）

大事なローファン伯との賭け試合の直前に試合を入れるとは、クウも二人を侮ったものだ——と、シャナアークスは小さな憤りを覚えた。このことは、彼女がユマとキダを気に入り始めた証拠だろう。（異国人にしては、まだ骨のある方だ）

ふと、二人の方を見ると、何やら妙な事をしている。

キダが走っている。ユマが地面に線を描いて、その上を走っているようだ。キダは呪いのせいで全力疾走できないから、小走り程度だが、それでも踵が痛むらしく、

「これ以上は無理だ……」

と、音をあげた。

「いや、十分だ」

ユマがそう返したが、二人の会話は端から見れば大いに怪しむべきで、

（逃げる算段をしているのか？）

と、特にユマを疑っているヌルはそう思った。

シャナアークスも似たようなことを考えないでもなかったが、二人の表情には他人を欺いて逃亡を企んでいる暗さがない。

（逃げたらその場で斬ってやるが……）

と、人知れず妖しい笑みを浮かべた。キダはともかく、ユマは時折反抗的で、それが癪に障る時がある。ユマはあずかり知らぬことだが、シャナアークスはローファン伯とフェース家当主から二人が訓練中に逃亡した場合の処分について一任されている。

「明日、クウの試合がある。入場許可をとっておくから、明日の訓練の後、ユマは闘技場に残るように……」

シャナアークスが言うのと、朝からほとんど言葉を発しなかったユマが顔を上げた。

「クウは今の貴方と同じように、俺たちに負けるはずがないと思っているのだろうか？」

淀みのない声だが、刺すような鋭さがある。

「わからない。だが、あの女は勝負の相手を侮るほどに軽薄ではない」

嘘だな——と、ユマは思った。シャナアークスが一瞬、目を逸らしたからだ。

ユマの言わんとしていることがわかったシャナアークスは癪に障ったのか、

「クウを甘く見ると痛い目にあうぞ！」

と怒声を発して、振り上げた鞭でユマを打った。

——お前こそ、油断しているじゃないか。

そういわれたと思ったシャナアークスは、明日の訓練ではユマに血反吐を吐かせてやろう——と、心中で毒づいた。

（俺たちは、お前の奴隷じゃない！）

ユマは肌が裂けるような痛みに耐え続けたが、最後まで詫^わびの言葉は吐かなかった。

クウとの竜機戦まで、残り三日である。

第二章「闘士衝冠」(10)

「あれは何だ？」

市場の一角が妙に賑わっているのを見たユマは、鞭を受けた肩をさすりながら、同乗するリンに声をかけた。ユマを闘技場に迎えに来た路上であり、ヌルは御者の横に腰を落ち着けている。

大きな幕が掲げられ、人々がそれに群がって騒いでいる。

貨幣が舞うように飛び交っているのを見たユマは、

(賭場だな。でも大っぴら過ぎる)

と、思ったが、ふと気づいたことがあり、馬車を止めさせた。

「リン、読んでくれないか？」

垂れ幕に書かれた文字を指差されたリンは、一瞬戸惑った表情を見せたが、

「クウ、一・二。ユマ、二十四。引き分け、八・九……」

と、ユマの顔を見ずに言った。

「何だ。俺は大穴か。はは……」

それがユマとクウの闘技に対するオッズであることに気づいたユマは、あまりの落差に空笑いするしかなかった。ただ、自嘲しているわけではない。それだけの技量の差はあって当然だとも思っている。主催者が全体の二割五分を懐に収めるとすれば、ユマの勝ちに賭けられたのは、簡単に計算しても全体の三パーセント前後だろう。「これでも随分下がった。最初は五十倍はあった」

と、ヌルが感情を消した声で言った。

オッズが変動するということは、クウが調子を落としたか、ユマに関する情報が流れているということだろう。あまりに差が大きすぎれば掛け金が集まりにくいので、主催者側が適当な情報を流しているのか、あるいは闘技場に入入りしてユマの特訓をのぞいた者がいたのかもしれない。

(これは使える……)

そう思ったユマは、ヌルの方を見て、

「当事者は参加できるのかな？」

と、訊いたが、

「無理だ」

と、即答された。

「だが、代人を立てて自分に賭けるのはよくあることだ」

ユマは馬車に飛び乗ると、そのままの勢いで伯爵邸に帰った。

出迎えたアカアをすり抜けるように屋敷に入ったユマは、自室から貴重な財産である毛布を取ってくると、あたりをきよろきよると見回した。やがて、リュウの姿を見つけると、

「ちよつと出かけてくる」

と、彼を連れて再び街へと繰り出していった。アカアは何のことかわからずにきよとんとしていたが、リンの顔を見ても、首を横に振るだけで答えを得ることが出来なかった。

「所詮は田舎者ということですよ」

と、ヌルが忌々しげに吐き捨てた。

毛織物を扱う店で、毛布を売ったところ、金貨四枚を得た。買い叩かれるのを未然に防ぐために、

「俺は、ローファン伯に宿を借りている。実はローファン伯がこの毛布を買い取りたいと言ってきたんだが、どうも買い叩かれているようで、気が乗らない。伯爵以上の金を出すのならここで売っても良い」

と言った。伯爵がいくら出そうとしたのかは最後まで言わなかった。

「毛色が整いすぎて、気味が悪いくらいです」

商人が言ったが、機械が作ったのだから当たり前だ——と、ユマは心中でほくそえんだ。

「大金です。家が一つ買えます」

流石にリュウの言うことは大げさだと思ったが、商人は毛布の他

にも、値をつけたように感じる。

——俺はローファン伯に競り勝ったぞ。

とでも言えば——王都では言えないだろうが——ちよつとした箔^{はく}がつくのかもしれない。ユマはこの商人が後で他の貴族に、毛布を金貨十枚で売ったことを知らない。

さて、賭けである。

ユマはリュウに金貨をつかませて全部自分に賭けるように言い渡したが、リュウは不首尾で帰ってきた。

「餓鬼の来るところじゃない——と、怒鳴られました」

金貨を見せるまでもなく帰ってきたリュウを、ユマは叱る気になれなかった。その場で金貨を見せれば、目の色を変えた主催者によって参加を許可されたかもしれないが、大人の遊びにリュウを無理にねじいれようとする愚かしさに、ユマは今更ながら気づいた。

「いいよ。帰ろう」

一度興味を失えば、未練を残す方ではないユマは、すぐさま帰路についた。万一、試合に負けた時の逃亡資金にすればいい——と、いつものように早い決断をしたユマの前に、蹲^{うずくま}っている少年の姿が目に入った。

麻色のマントに身を包んだ、長い銀髪の少年だった。膝を抱くように路傍に腰を下ろし、空を仰いだまま微動だにしない。風が吹くと、白金のような髪がさわわと揺れる。少年といっても、彼が男物の服を着ているからユマにも判別できたのであって、顔立ちは少女のようだ。

思わず撫でたくなるような形の良い小さな鼻と、くりつとした目が印象的な美童だった。

「伝説の魔導師……」

眼前を通り過ぎる際に少年の口から出た言葉が、自分に向けられていることを知ったユマは、思わず足を止めた。

——関わらんほうが良いぞ……

足を止めた瞬間に、誰かの声が聞こえた気がした。

（ここ数日、耳がおかしいぞ？）

幻聴なのか、源精によるものなのかよくわからないユマは、しかし忠告ともとれるその声に耳を傾けなかった。雑踏の中にいるのだから幻聴も何もあるまい——と思い直した。

銀髪の少年はユマが立ち止まったことに気づくと、空に向けた顔をそのままに、視線だけをユマに移した。少年と目が合ったユマは、一瞬、何かに貫かれるような感覚をおぼえた。それは悪寒にも似ていて、ユマの第六感もこの者と関わることを拒否しているように感じた。

得体のしれない幻聴や、自らの勘とは全く逆に行動するユマは、別に天邪鬼あまのじやくなわけではない。天邪鬼な人間は大抵自分の感性のままに行動している。それが他人を意識した強烈な理性によって捻じ曲げられるだけのことであり、自分自身を意識して意志を変えることは天邪鬼とは呼ばない。だが、この時のユマは、まるで夜中の灯火に羽虫が集まるようにして、銀髪の少年に引き寄せられた。少年の容姿が他を圧倒して優れていたこともある。よく見ると、マントの下に着た服は小奇麗で、彼がただの奴隷や乞食こじきでないことを物語っている。

「今のは俺に言ったのかな？」

ユマが少年から目を離さずに言うと、少年は小さく頷いた。

「伝説の魔導師とか聞こえたんだが……」

少年は再び頷き、賭場に掲げられた垂れ幕を指差し、読み上げた。

「東方出身の伝説の魔導師ユマ。闘花クウに挑む」

ユマは噴出しそうになった。賭場の主催者はあまりにオッズの開きが激しいので、素性の知れないユマを大きく見せるために苦心したのだろう。それにしても伝説の魔導師とは恐れ入る。

「お前、俺が誰だか知ってるのか？」

少年は更に頷いたが、

「お前じゃない。エイミーだ……です」

と、感情の色を消した声で言った。

「エイミー？」

女のような名前だな——とユマが思うと、エイミーはすっと立って言った。

「エイミーは、男の子……です」

目に顔を擦り付けんばかりにエイミーはユマを凝視したが、背が小さく、全く届かない。必死に爪先立っている姿が、横で見ているリュウの笑いを誘った。

目が紅い。ルビーのように見る人を吸い寄せる紅さだ。それを奇妙と感じさせないところに、エイミーの魅力のようなものをユマは感じた。

「エイミーが男の子だと、何が勿体無いの……でしょう？」

と、言われたとき、ユマは自分の耳を疑った。まるで自分の心を読まれているようだ。

——気味が悪い。

そう思うのが普通なのだが、エイミーの美顔が怪しさを妖しさに変えていた。ユマは彼に興味を持った。

「何故、こんなところで天を仰いでるんだ。雲でも数えてるのか？」

ユマはエイミーに対して最初に持った疑問を口にしてみた。

「主に買い物を頼まれた……ました」

エイミーは無理やり言葉使いを改めたような奇妙な喋り方をする。

「でも、お金が足りない」

と、エイミーは巾着のような形をした財布を逆さにしてみせた。

金貨七枚が音を立てて落ちた。

「あっ……あっ……」

まるで予想していなかった事態が起こったように、エイミーは慌てて金貨を拾った。金貨の一つが円を描くように転がってからユマの靴に当たった。エイミーは逃げるバツタでも捕まえるような手振りで他の金貨を抑えている。

（おいおい、大丈夫かよ？）

ユマは苦笑しながら、足元の金貨を拾った。よく見てみると、ユマが持つ金貨より傷が少なく、質が良い。

「ふぁ……」

コン——と、金貨を追いかけていたエイミーの顔がユマの膝に当たった。ちょうど鼻を当ててしまったらしく、目を潤ませたエイミーが上目使いで仰ぎ見たとき、

（ヤバイ、変な趣味に目覚めそうだ……）

と、ユマは腋わきの下が寒くなるのを感じた。

「金が足りないのか。金貨七枚もあって何を買うっていうんだ？」
「ほうき箒……」

エイミーは手にした金貨を数え終わると、無造作に財布にしまった。

「ほうき？ あの手を掃く箒のことか？」

エイミーが頷くのを見たユマは、こいつの主は何と言う贅沢な奴だ——と、呆れた。金貨四枚で家一軒とリュウに言われたユマは、家二件以上の価値がある箒とは魔女箒あるじか何かか——と、想像した。

「主は箒遊びが好き。でもペイル産の最高級のものじゃないと叩き甲斐が無いって……」

ペイル——という地名にユマは混乱しない。西に海を越えたオロと同等の規模を持つ海洋国家であるという話をアカアから既に聞いているからだ。

「箒遊び？ それに叩くって……何を？」

「エイミーを、叩くの……です」

（うわ、我ながら鬼畜な想像をしてしまった）

ユマは自分の下衆な一面に嫌気がさしそうだったが、遊びという一語を思い出して、もしかするとエイミーの主は子供なのではないかと思いついた。

——で、いくら足りないんだ？

と、言い出そうか迷った。善意で恵んでやるというのは、どうに

も自分のがらではなく、貸すにしても同じことだ。確かにエイミーを見ているとそうしたくなるが、下手な情けは相手を傷つけるばかりか、憎悪の対象にすらなることがある。

少し考えたユマは、やはりエイミーが哀れになったのか、口を開いた。

「金貨四枚までなら貸そう。ただし、一つ条件がある」

エイミーの目が上がった。そこに歓喜の色が見えなかったことにユマは多少、失望したが、感情表現がいかにも苦手そうなエイミーであるから、それも仕方が無いだろう。あるいはこの美童はあまりに意外な事を言われて驚いているのか——と、想像した。

「俺に返す前に金貨四枚を全額、魔導師ユマの勝利に賭ける。勝ち分を含めて俺に返してくれるのなら貸してやってもいい。勿論、魔導師様が負けた場合は、返す必要は無い。どうだ？」

言い終わった後、貴族の使い走りに過ぎないだろうエイミーに、そんなことを決定する権利があるはずも無いと思い直し、自分の酔狂癖がまた出た事実にながら呆れた。

エイミーが突然、猫が物音に驚くようにして首を上げた。目を大きく広げ、一瞬だけ周囲を見渡した。彼の視線が動くたびに、空気が巻かれて風が吹くようである。心なしか、紅い目がほのかに光ったように見えた。

「おい、どうした？」

ユマは思わずエイミーの視線を追って振り返ったが、そこにあるのは雑踏ばかりで、賭場の垂れ幕が風に引き剥がされる様にして落ちた。

再びエイミーに目をやったとき、ユマは確かに不気味な何かをこの少年に感じた。

エイミーは、うん、うん——と何度も頷くと、少女のように細い手を差し出して、

「金貨……頂戴」

と呟いた。ユマが金貨を渡そうとすると、リュウが慌ててユマの

裾を引っ張った。

（相手の素性も知らずに、どうして大金を貸し与えるのですか）

リュウのささやきが聞こえていたのかどうか、エイミーは金貨を渡そうか躊躇いを見せたユマに向かって言った。

「ガオリ侯爵……」

「それがエイミーの主か？」

エイミーはしばし考えるような素振りを見せた後、小さく頷いた。「そうか。俺はローファン伯に宿を借りている。さっきみたいに金貨を落とさないように、気をつけろよ。じゃあな……」

エイミーが別れ際に、

「ユマ、さよなら……」

といったので、無愛想な少年だが挨拶くらいは出来るようだ——と、ある意味ユマを安心させた。

（ここは普通、『ありがとう』だろうに……）

やはりどこか不思議な少年だ——と思ったユマだったが、互いの望みを果たすための取引をしたのであって、ユマが一方的にエイミーを助けたわけではない。もとよりそのつもりで話を持ちかけたはずなのに、相手に謝意を要求するのはあつかましいと言うべきだろう。ユマという人間が持つ美点の一つが、こういった自分の過ちを素直に認め、相手が正しいと言い切ってしまうことで、今がそうだ。気が弱いわけではない。むしろ自我が強く観察眼に欠けるからこそ、こういったわざとらしい思考回路が必要なのだ。ユマの場合、そこに自らの容儀を改めるといふ発想が抜けている以上、これは確かに美点であるには違いないが、偽善であるともいえる。

気分を改めたユマが振り返って小さく手を振ると、エイミーは言い直すようにして、再び別れを告げた。

「伝説の魔導師、さよなら……」

ユマは本当に金貨が返ってくるか、少し不安になった。

第二章「闘士衝冠」(11)

伯爵邸に帰ったユマは、早速リンを呼んでガオリ侯爵について訊いた。リンは晚餐を整える手伝いをしていたが、彼女はユマの世話を何よりも優先するように言いつけられているので、配下に細々とした指示を与えてからユマの元に来た。リュウはヌルの下で働いているらしく、彼女と入れ替わるように奥へと消えていった。

「忙しいところに悪いが、訊きたい事がある」

「先生のご要望に応えることが私の仕事です。ご懸念には及びません」

リンは小さく頭を下げて言った。ユマも彼女の慇懃さに慣れて来たのか、最近はそれが当然であるような気がしてきた。

「ガオリ侯爵ですか。先代まで子爵であつたと聞きますが、詳しくは……今の当主はお若い方ですが、あまり良い噂は聞きません」

「噂？」

階上からリンを呼ぶ声が聞こえた。伯爵夫人である。ユマが頷くと、リンは小さくお辞儀をしてその場を去った。

「仕方が無い。アカアに訊いてみるか……」

リンは退いたが、挙措にどこかよそよそしさがあつた。軽く違和感を覚えたユマだったが、特に気にすることもなく、アカアの部屋に向かった。

さすがに部屋に立ち入ることは出来ないため、部屋の前に立つ使用人に告げてアカアを呼び出そうとした。

「どうぞ、お入りくださいませ」

アカアの部屋は、彼女の赤い髪に染められたような淡い桃色を帯びていた。カーテンからベッドの生地まで同じ色だ。さすがに壁と床は外装と同じく白で統一されている。

大きな本棚を横に置いた木机に座っていたアカアは、読みかけの

本をぱたりと閉じると、笑顔でユマを迎えた。時々恐ろしく冷めた感情をのぞかせるアカアだが、平素は可愛げがあり、あたたかみのある貴風を感じさせる。

「ガオリ侯爵について訊きたい」

ユマが言うと、アカアは得たり顔でいつものごとく喋り始めた。

ガオリとは、領地名ではなく、家門名らしい。元は南端の小国の主だったが、異族に追いやられる度に北へと移動を繰り返した。先代の頃にオロ王国に帰服し、子爵を賜った。今は王国の南部に領地を持っている。王国東部に根を張るヤム家とは交誼が薄かったが、当代になってからは良好な関係を築いている。

——ガオリと手を組んでいて、損は無い。

というのは現ローファン伯がヤム家を継ぐ前に口に出していたことらしく、それを実践した彼の予見力が並でない証拠に、今ではガオリ家はローファン伯より上位の侯爵位についている。先代の頃に子爵だった家が、当代になって侯爵位を得たのは、現光王の即位の際に大いに尽力したことらしい。他にもガオリ侯は南方の蛮族を手なづけオロ王家に帰服させた功績もある。

「あまり良くない噂があるらしいな……」

ガオリ家の者に金を貸し与えたユマとしては、ガオリ侯が信義の厚い人物かどうか知りたくなくてもおかしくない。

「噂ですか……それはどのようなものでしょう？」

アカアは首をひねったが、ユマは悪い噂とはどのようなものなのか、リンに聞いていない。アカアはユマがリンから情報を得ようとしていたことを知ると、小さく笑った。

「リンに、何がわかりましょう。民草は噂を信じ過ぎます。政道が何であるか、理解の届かない彼らは、あやふやな情報に己の想像を転化して、意味も無く壮大な話を作り上げるものです。噂話とは、自慰に似ています。リンの言う悪い噂とは、光王を即位させる際の党争や、南国に賄賂を贈ったなどというものでしょう。あるいは今のガオリ侯はシェンビィ公爵家に目の敵にされていますから、それ

もあるのかもしれませんが。ただし、正確な情報を得ずにリンがガオリ侯を非難したとすれば、それに耳を傾けることはありません。想像の中で人をこき下ろして自らの虚しさを埋める者を下賤げせんというのです。先生がこのようなことに惑わされるはずがないかと存じます
が……」

アカアはユマの器量を確かめるように目を合わせてきた。
(ふーん。まあ、この娘の言うとおりだな……)

ユマは自分が試されるような口調に多少腹を立てたものの、彼女の仕草に一種の愛嬌も感じているせいか、無感動を装った。

話が切れたところで、ユマはすつくと立った。アカアのことは嫌いではないが、この娘とはどこか噛み合わない。同じようなことをローファン伯にも感じる。いずれ居心地の悪い家になるかもしれないという仄かな不安も覚えた。

「ガオリ侯爵は、箒で少年を叩くのがお好きらしい……」

と、ユマが言うと、アカアは小さな笑声をあげた。

部屋を出るとき、ユマの裾がドアに引っかかった。

「しばしお待ちを……」

と、老いた使用人がユマの足元にしゃがんだが、うまく外せないらしく、やきもきしてきたユマは、

(こののろま、蹴り飛ばしてやろうか)

と、思わぬ自分の心中の声に気づき、

「何様だ。俺は……」

と、慚然ふぜんとなった。思えば最近、リンやリュウに対してもまるで自分が主人であるかのように振舞っている。ホウが馬車に轢かれた時、ユマは怒った。何に怒ったのか。今の自分のような人間に対して怒ったのだろう。酷薄なアカアを痛烈に批判しておいて、その事実を忘れている。これほど愚かな人間がいようか。

使用人はユマの表情が険しくなったことを恐れ、顔色を青くしたが、ユマはそれにはかまわずに、無理やり裾を引きちぎると、何も言わずにアカアの部屋を後にした。

部屋に戻ろうと廊下を歩いていたら、どこからか怒号が聞こえた。思わず足を止めたユマは、目の前の部屋の扉がわずかに開いていることに気づいた。

ほんの小さな好奇心から、ユマは中をのぞいた。リュウカ、ホウが何かへまをして上司に叱られていたとすれば、助け舟を出してやろうと思ったが、それは後付けだろう。

机の上に大きな腕を組んで、ふんぞり返る様に座っているのはローファン伯だった。今日は珍しく早い帰宅のようだが、ユマは彼の前に立つ男に気づいて、あっと声を上げそうになった。

（ホルオース……）

それに、もう一人いる。ホルオースの隣でうなだれているのは確かにヌルだ。他家の使者の前で不遜を働いて、ローファン伯に雷を落とされたのか。

（ざまあみろ）

と、ユマはほくそえんだが、待てよ——と、引っ掛かりを覚えた。確かにローファン伯はあの場にいるが、口をきつく結んでおり、逆にホルオースの息が荒く、何やら昂ぶっているようにも見える。となると、先の怒声はホルオースのもので、ヌルは彼に叱声を浴びせられて意気消沈しているのか。

（何か、臭いぞ……）

ユマが嫌な予感を覚えたとき、ホルオースが口を開いた。

「他に術士がいるとは聞いていなかった」

あまりにも憎らしげに言うホルオースに、ユマは小さな驚きを覚えたが、口吻こうぶんを向けられているヌルは不服であったようで、反論した。

「しくじった——では済まされんぞ。ただでさえ一人で行動することなど滅多に無いというのに。貴様が尻込みさえしなければ、全ては上手くいっていたのだ」

「調子に乗るなよ。お前は私を陥れるために、わざと虚偽の報告を

行ったのではないだろうか？」

ヌルの顔がずっと赤くなった。今でも剣を抜きそうな形相の彼を、ローファン伯が手ぶりで制した。

「何、まだ二日ある。既に根回しはしておいた故、問題は無い。今度こそは必ず斬れ」

ローファン伯が低い声で喋ると、何やら凄みがある。

「そちらも抜かりなきよう……」

ホルオースが刺すような視線を投げかけると、ヌルは鼻を鳴らしてそれに応えた。

三人がひとまず話を終えたところで、扉がわずかに揺れた。

「誰だ！」

ヌルが勢いよく部屋の外に飛び出すと、そこには誰もおらず、廊下の向こうの階段を上ってきたリンが、晚餐の支度が出来たことを告げた。

第二章「闘士衝冠」(12)

部屋にこもったユマは、ひとり身を震わせていた。最初こそ、

(クウを消すつもりだな……)

と、三人の会話にあたりをつけて、平然を装っていたが、陰謀の一端をつかんだという実感が体の奥まで浸透するに従って、自分にとってつもないことに首を突っ込んだという事実が体が震えだした。

(いや、待てよ……)

ユマはホルオースを通じてクウが言ったことを思い出した。闘士は試合期日まで他ならぬ光王より生命の不可侵権を認められている。クウを殺すということは光王に反逆するに等しく、ローファン伯がそのような愚行に走るはずがない。だが、悪い方に思念をめぐらせれば、クウの死は事故にでも見せかければよく、伯爵ともなれば数段格下の騎士の家の女を消すくらい造作もないだろう。人の命が、法や誓約で守りきれるものではないことは、歴史が証明している。

クウが死ねば良い。

そうすれば、命を賭けてまで竜機に乗る必要はなくなる。だが、それでは自分の安全を確保することが出来ても、キダを奴隷の身分から開放することは出来ない。自分の身の回りの物を売り、金貨数枚を手にしたとしても、ユマがローファン伯に身を寄せる限り、フェス家の人間は金でキダを譲ることをしないだろう。

それに、ホルオースだ。

ローファン伯爵邸に単身で乗り込み、クウが勝てば故地を返してもらうという条件を、恐れもなくローファン伯に突きつけた彼に対して、ユマはある種の敬意を持っていた。下手をすれば怒ったローファン伯によって首を刎ねられていただろうことは、ユマにもわかる。それだけに、フェス家の意地を見せたホルオースが見事だった。

——男ってのは、ああでなくちゃあな。

と、ユマは小さな感動を覚えただけに、彼がクウを裏切っているかもしれないということに、失望した。

先の三人の会話は、どう解釈しても誰かを闇討ちするという類のものだった。あの場にホルオースがいたことから、フェペス家が絡んでいることは明らかで、ローファン伯が二日と言っていたことから、ユマとクウとの試合の前に決行するつもりだろう。

ユマは悩んだ。

考え直せば、自分にとって悪い話ではない。キダを見捨てるのは忍びないが、全く望みが無いわけでもなく、要は仲介を立てれば良い。車さえ手元に戻れば、ガオリ侯であれ、それと反目するシェンビィ公であれ、取り入ることが出来るだろう。何もローファン伯の元に身を寄せ続ける必要はない。はっきりいってこの家はユマにとって居心地の良い場所ではなく、アカアやヌルといった近しい連中との折り合いの悪さを感じている。

(いざとなれば、この家を出ればいい……)

心残りがあるとすれば、ユマはまだアカアに何の恩も返していない。あのまま荒野で野たれ死んでいたかもしれない自分を救ってくれたのが、彼女であることには変わりないのだ。

蒸風呂でリンに背中をこすってもらいながら、ユマは女の白い太腿に目がうつったとき、

(あの娘、死ぬのか……)

と、クウの鮮やかな鎧姿を思い出した。アカア、リン、クウ。思えばオロ王国に来てから美人ばかりに巡り合った。その中で最も美しいのはクウだろう。アカアは確かに良く出来た娘だが、感情に厚みを感じさせず、リンもユマに対して礼儀を欠くことはないが、彼女の中にはユマではどうにも出来ない暗さがある。身分の低い者が持つ、一種の諦観だろうか。

だが、クウは二人とはどこか違う。どこが違うのかはユマにもわからない。ただ、彼女だけがまっすぐにユマを見た。アカアのよう

に半笑いでもなく、リンのように伏目がちでもない。シャナアークスのように見下げるのでもなく、クウだけが正面からユマを見た。

（思えばあの時、俺は冠をつけていなかった）

街中で誰かと出会う度に、相手はまずユマの頭上に乗る五位冠に目をやる。クウと出会ったときは冠を飛ばされていたから、彼女の視線はまっすぐにユマに向かった。だが、果たして偶然が彼女をそう見せたのだろうか。

（違うだろう……）

クウは、奴隷商人に半殺しにされていたキダを買った。これはユマを拾ったアカアに似ていなくもないが、クウのとる行動の底には、優しさがあるような気がする。キダの自由を賭けた決闘を持ちかけたことも、ユマにシャナアークスをつけたことも、アカアであれば絶対にしないことだ。だが同時に、フェペス家の持つ、ヤム家に対する怨恨の凄まじさが、クウの優しさを損なっているとも思う。

ユマはクウに、ある種の親しみを感じた。異世界に放り出されたユマは、自分に近い常識や倫理観を持った人間に、飢えているともいえる。

「どうなさいました？」

リンがユマの顔を覗き込んだ。自分の弱さを見透かされたと思ったユマは、思わず心中とは全く逆の言葉を吐いた。

「リンはいつ、伽とぎをしてくれるのかな？」

ユマの悪い癖だ。だが、リンが黙ったことで、今度はユマが焦った。

「冗談だ。気にするな」

ユマが笑うと、リンが一瞬だけ恨めしそうな目で睨んだ。

部屋に戻り、床に就いたとき、何者かが扉を叩いた。ユマが、どうぞ——と、促すと、薄着になったリンが入ってきた。

「失礼します」

ユマが咂然あぜんとしている間に、リンはすばやく灯火を消すと、ベッ

ドに腰掛けた。少しの間、布ずれの音があたりに響いた。

「待て、リン……っ！」

言葉を発しようとした口を、リンのそれが塞いだ。口の中を熱の塊が侵した。ふと、舌に鋭い痛みを感じた。戯れなのかどうか、ユマの舌を噛んだリンの目元に笑いはなかった。

ユマは全身に重さを感じた。リンという女が渾身でユマにぶつかってきているようだった。抱きとめたリンの肩が小さく震えていることに気づいたとき、ユマは罪悪にも似た何かを感じた。

（これは、据え膳だろうか……）

ユマがとぼけたことを考えている間に、全身が熱くなり、世界が速くなった。ユマという人間がこの部屋全体に広がった後、頭の中に閃光が走った。そこには煩^{うるさ}さと、気だるいほどの沈黙があったが、傍にもう一人がいることに気づいたとき、底知れぬ虚しさを感じた。この虚しさは、人を殺すほどにだだっ広い空に似ていた。

（クウを救うべきだ）

決心ではない。ユマという人間から、あらゆる虚飾を剥ぎ取って残った最後の声がこれだった。ユマは心からリンに感謝したが、彼女は朝日を見るまでもなく、無言で部屋を去った。

翌朝、白布に染み付いた赤い印を見たとき、ユマの中の何かが烈^{はげ}しく鳴った。

クウとの決闘まで、残すところ二日となった。この日、ヌルは闘技場までユマと同行したが、中には入らなかった。ホルオースも、午後にクウの試合があるという名目で早々に抜けた。

逃げるのならば、監視の目が消えた今しかないが、キダが走れないという不利がそれを不可能にした。もとより、今のユマは試合から逃げようとは思っていない。

（早めに抜けて、クウに会うしかない）

昨夜のことをクウの側近やシャナアークスに話しても無駄だろう。それに、訓練を早めに終わらせる方法はひとつしかない。

「朗報だ。ユマの出した提案は、却下された」

入場して鎧に身を包んだ二人を見たシャナアークスが、声高々に叫んだ。ユマの提案とは、先日、ホルオースに打診したことを指している。

——相手を死に至らしめた者を敗者とする。

ユマが当初、自分の保身のために考え付いたことだ。だが、その願いが聞き入れられなかったことに、ユマは驚く素振りを見せなかった。

「そうか……」

ユマはさほどの興味を示さずに言った。シャナアークスにはそれが意外だったらしく、

「残念がると思っただが……」

と、本心を漏らした。昨日ユマが生意気な口を叩いたので、その仕返しにと思ったのだが、当てが外れた。シャナアークスは体格こそ優れているが、歳はまだ十九であり、極たまにはあるが、何かの拍子に幼稚な一面を見せる。

（餓鬼が……）

ユマは、鼻で笑った。シャナアークスは確かに優秀な闘士だが、時折自分たちを見下したような態度をとるのが、ユマには気に入らない。それが、彼女にとって親密な者にしか見せない態度であるとするなら、よほど子供っぽい。とはいえ、この程度のことでむかつ腹を立てるユマも同様だろう。ユマはシャナアークスを嗤うと同時に、自分の忍耐力の無さを嗤ったのだ。

だが、ユマに侮られたと思ったシャナアークスは顔を蒼くした。自分が少し言い過ぎたと心中で反省していたせいか、それを踏みにじられたような気分になった。

「怒ったのか？ 闘士の癖に、この程度のことには腹を立てるな。だから、クウに相手にされないんだ」

ユマがいつになく攻撃的なので、キダは焦った。ここでシャナアークスが帰るといいだせば、自分たちがクウに勝つ見込みは全く無

くなる。

（おい、ユマ。どうしたんだ？）

キダはユマの袖を引っ張ったが、もう遅かった。

どうやら、ユマがクウの名を出したことがシャナアークスの逆鱗に触れたらしい。だが、ユマにはそんなことはどうでもよかった。何故だかわからないが、今は腹が立って仕方がない。

何故、自分はリンを抱いたのか。リンは出会って数日しか経たない男に体を預けた。その意味を自分は理解していたのか。昨夜の出来事は、陰謀に巻き込まれたという恐怖と怒りを、たまたま傍にいたリンにぶつけたただけだ。ユマという男はリンという女を深く愛しているわけではない。そして何よりも悲しいのが、女の全身から発散されたのが、愛情ではなく、途方もない虚無感であったことだ。

だが、その時のユマは自分のことにしか興味がなく、魂の通わない肉体を優しく抱きとめる度量すらなかった。リンが味わった屈辱と失望とが、今のユマを苦しめている。

ユマは怒っている。何に怒っているのか——それは問うまでもない。

（死ね！ 俺よ、死ね！）

ユマは体の真ん中に空いた何かに向かって呪いの言葉を吐いた。同時に一つの誓いを立てた。

——相手を死に至らしめた者を敗者とする。

却下された提案ではあるが、自分の口から出た言葉だ。思えばユマがオロ王国に来てから、口に出したことはでまかせか保身の類だった。唯一といってよいほどにまともなのが、

——殺すな。

という叫びにも似た何かだった。それは、死にたくない——という思いから発露したものだが、この言葉が声となって外に出たとき、死に追いやられる寸前のホウを救った。

今、また死を眼前に据えた者がいる。それはユマ自身に他ならぬが、もうひとり、いや二人いた。

腹が座る——というのは、今のユマのことを言うのだろう。覚悟というものは、ときに怒りの果てにある。怒り狂った人は、全てが過ぎ去った後に虚しさを感じるが、怒るという行為自体に虚無を見た者は、自分という人間のなりそこないを大きく跳躍する。

この点、自分に対する怒りを捨てきれないユマは、まだ小さいと言える。だが、それでも昨日までのユマとは違った。眼光に陰しさがある。

「シャナアークス。貴方の指導は、今日で終わりだ」

キダは、ユマの思いがけない台詞に目をむいた。それはシャナアークスとて同じだ。

「何故なら貴方は今日、敗者となるからだ。誓おう。クウの前に、まず貴方を叩き伏せる！」

傍で聞いていたキダは「おおっ！」と、歓声を上げた。昨日までのユマは劣勢のときにへらへらと笑ったり、いつも緊張感に欠けていた。だが、今はそれが無い。曲がりなりにも武道に励んだ経験のあるキダは、今のユマが大いにやる気を出していることを素直に喜んだ。

「竜機に乗れ！」

挑発に乗ったシャナアークスが叫び、竜機に飛び乗った。

ユマはキダとともに竜機に飛び乗ると、

「やるぞ。俺の言うとおりにしろ……」

と、小さく吼えた。急に高圧的になったユマに不快を感じなくもなかったが、彼の勢いを殺すことの方を恐れたキダは、黙って頷いた。

互いに竜機に乗った。

ユマの予言通り、これがシャナアークスとの最後の訓練であり、試合となる。

第二章「闘士衝冠」(13)

さほど広いとは言えない闘技場を、砂煙を上げて二機の竜機が駆けける。

シャナアークスの駆る竜機は踵から火を噴いている。彼女の気性も相合わさって、猛犬が唸るようでもある。対してユマたちの竜機は自ら車輪を生成し、地面を滑るように移動する。初速ではシャナアークスの方が勝るが、車輪が生み出す曲線の動きは、一度速度を上げれば風術士の駆る竜機に匹敵する機動力を持つに至る。

広い平原で戦うのなら両者は互角と言えるが、闘技場の広さは限られている。速度を上げるまでの間、シャナアークスの攻撃をしがねばならず、また減速も許されない。ましてや転倒するなどもつてのほかだ。

「いけるか？」

と、キダがユマの肩を叩いた。ユマの緊張をほぐそうと思ったのだが、意外にもユマは落ち着いていた。キダは安心するよりもかえってユマの静けさを不気味に思った。

頭に血が上っているように見えたシャナアークスは、ユマの立ち上がりを攻めることはしなかった。

「馬鹿にしてやがる……」

キダが唇を噛んだ。シャナアークスの容姿に魅せられたとはいえ、彼女の不遜な態度が気に入らないのはユマと同じらしい。

「いや、さすがだな。怒ってはいても、我を忘れたりはいしない」

シャナアークスの緩慢さは、こちらを侮っているというより、ユマには彼女が自分の怒りを静めているように見える。なにせ王宮から認められるほどの闘士だ。三下に挑発されたくらいで頭に血が上る程度の者であるはずがない。

だが――と、ユマは思う。

ここ数日、彼女と手合わせしてわかったが、シャナアークスの戦い

は先手必勝の一言に尽きる。火術闘士という類が、この型なのだろう。溜めた力を一気に放出して竜機を動かす彼女に勝つには、彼女の意思を一箇所^{さな}に留めないようにし、力を発揮する前に倒すしかない。技量でも力でもこちらが劣るのである。まっすぐに突っ込んでくる彼女を、どうやっていなすか。

ユマは壁際を大きく回りながら、シャナアークスに近づく素振りを見せない。百戦錬磨の彼女に下手に攻撃を仕掛けても、返り討ちに遭うだけだろう。繰り返して考えてみても、彼女の攻撃をかわして、その隙を突く以外にユマたちが勝利する方法はない。

だから、ユマの全神経は回避に集中している。シャナアークスもそれくらいはわかるのだろう。彼女もユマと対角に位置しつつ、徐々に距離を詰めながらも攻撃を仕掛けてこない。

（どっちも長く待てる性質じゃない……）

キダも、同じような考えを持った。だが、相手の攻撃をかわすという行為がどれだけ難しいか、ユマに理解できているのだろうか。剣術に限らず、相手の攻撃を受ける手段が豊富なのは、それだけ避けることが難しいからに他ならない。鮮やかな回避は確かに理論上は可能だろうが、一度振り下ろされた剣は、自分が回避して誰もいなくなった空間に落ちるのではなく、避けた人間を追ってくると思ったほうが良い。理想的な結果のために他の全てが存在するともいえる理論は、ジャンケンの後出しのようなものであり、実際は同時に起こる現象から時間という概念が抜け落ちたような危うさがある。（避けるよりも、受ける。一撃だけ受ければ……）

キダは喉元まで出かかった言葉を飲み込んだ。うかつに口をさはさめば、ユマに迷いを与える。例えキダの考える手段が正解であっても、闘争の最中^{さなか}での迷いは、死と同義だ。キダの思う「受け」の選択肢も理論であり、今の様に互いの動きを探っているような状況では、次の瞬間に何が起こっても対応できる心構えがあればよい。守ることにこだわっていれば、万が一にシャナアークスが転倒した

としても、自分の意思を攻めに切り替えるまでわずかな時間を要する。そのわずかな浪費の間に彼女は立ち上がり、この戦いでは二度と隙を見せないだろう。何よりも優先すべきは、勝利に貪欲になることだ。今のユマからは、その気迫を感じる。だから、キダは何も言わなかった。

シナアークスの竜機がわずかに速度を増した。ユマもそれに合
わせる。

轍と足跡が渦を巻きながら、中心へと向かってゆく。
互いの距離が近くなった。

キダは突然、脳が揺さぶられるような衝撃を覚えた。気づけば彼の右手はユマの肩をつかみ、左手は操縦席の外枠をつかんでいた。スケート選手の切り替えしのような姿勢で、ユマの竜機は突然軌道を変えた。

シナアークスの駆る竜機の側面を取った。

(あっけなさ過ぎる……)

キダは不安を覚えた。この程度の駆け引きで出し抜けるほどに、シナアークスは甘い女か。これは罠だと強く感じた。だが、今はそれでも攻撃を行うしかない。相手を誘うという行為には必ず危険が付きまとう。シナアークスがわざとこの状況を作ったとしても、押し切ればこちらの勝ちなのだ。策謀に嵌まることを恐れて、勝機を逸するのが最も愚かだ。

「うおお！」

キダは自らを奮い立たせると同時に、操縦席の両脇にある操縦桿を取った。ユマが竜機に魔力を送り込んで作ったものだ。

渾身の力を込めて槍を突き出すために操縦桿を倒そうとしたキダだったが、突然、手に重みを感じた。驚いて見ると、ユマがキダの手を押さえている。

「何を——！」

声を上げる暇もなく、轟——という音が鳴った。同時に宙に浮い

たような感覚がした。

シャナアークスの乗る眼前の竜機が凄まじい速さで旋回し、鋭い槍が鞭のようにしなってこちらに襲い掛かった。その槍が大きく上にそれるように見えたのは、ユマが竜機の膝を折って機体を沈めたからだ。間一髪、回避は間に合った。だが、一呼吸に取れる動作はシャナアークスの方が多い。彼女の体当たりは、さすがにかわすことができなかった。

金属のぶつかり合う激しい音の後に、キダは転倒するかと思っていた竜機がまだ平衡を保っていることに驚いた。

（なるほど、そのための車輪か）

シャナアークスの体当たりは確かに強烈だったが、ユマの竜機は地面を支えとして、ただつつ立っているわけではない。体当たりの衝撃を両足の車輪で吸収し、ユマの竜機は大きく後退した。重心を深く沈めていたことも良いほうに働いたのだろう。

キダが驚いたのは、体当たりの後に凄まじい速度で飛び出したシャナアークスを、ユマが後方に押しやられる力を曲げて見事に避けたことだ。

「小賢しいぞ！ お前たちは蠅はえか？」

シャナアークスの罵声は、賛辞ともとれた。ここで彼女の追撃が緩んだのは、こちらの動きが彼女の予想を上回ったことに他ならない。シャナアークスが更に追撃をかければ、体勢をくずさずに後退したユマたちが一呼吸有利になる。彼女にはそれも見えていたのだろう。キダは心中でシャナアークスの恐るべき判断力に感嘆したが、それ以上にユマの戦い方に驚嘆した。

（これが、ユマか？）

競争や、試合と全く無縁であるように思えたこの男が、実は意外にも応変の才があることに、キダはまるで今、初めてユマを知ったような感覚をおぼえた。

ユマが、これほどまでに器用な男だったか。

否。

今起こった現象に、当の本人が最も驚いていた。

——まっすぐに来る。

また、あの声だ——と、ユマは思った。今まで時々、自分の脳内で響いた誰かの声。それが今、しきりにユマの思考を揺さぶっている。

（源精か？）

最初に荒野で、おびただしい数の源精に囲まれたことを思い出した。あの時の脳に直接響いてくる声に似ている。だが、源精と違って、この声ははっきりとした意思を持っているようだ。

——しゃがめ。土を信賴するな。あれは頼りにならんぞ。

この声はよほど大地を嫌っているらしい——と、ユマは心中で苦笑した。声の言うとおりにシャナアークスの突きを避け、体当たりをいなしした。

ユマとて、無策であったわけではない。シャナアークスの側面を取るまでは、完全に彼の策中にあったことだ。だが、無防備に横腹を見せたシャナアークスを見たユマは、

（このまま勝っても、クウには勝てない）

と、無用なことを考えた。確かにこれはシャナアークスの誘いであり、それに乗らなかつたユマは一場面に限って言えば、駆け引きで彼女に勝ったことになる。

ユマには、秘策がある。秘策がシャナアークスに通じるかどうかを知ることが、彼が勝負を持ちかけた目的であり、無論、彼女に勝てなければ、クウにも勝てないと思っている。だから、ユマはこの勝負において偶然による勝利を放棄した。策に溺れたといえどその通りだが、それでもユマは形のある勝利にこだわった。その場しのぎの戦い方では、次の戦いに生かせない。賢しらぶった人はこだわりを捨てよというが、最初からこだわりの持たない人に成長はない。こだわるといふことは、自分を信じることでもある。こだわりは練

磨の果てに削り落とされて初めて価値を見せるものであり、人が言葉ではなく経験から学ぶべき良い例でもある。その人が持ったこだわりの痕跡を、本当の意味での知識というのだろう。いくらユマでも、経験から学んだことの、重みの違いくらいはわかる。

だが、ユマの決意をぶち壊しにしたのが、この声だった。

——決まった勝ち方など、あるはずがなからう。

と、声は言う。心なしか、アカアを思い出した。だが、声色は全く別人である。

決まった勝ち方などない。そんなことは誰にでもわかる。だが、世に兵法があるのは、戦いにも理があるからだろう。決まった勝ち方はなくとも、勝ちやすくする何かは必ずある。それを否定されれば、人は勘と腕力だけで戦うようになる。そんな馬鹿な話があるか。
(誰だか知らんが、邪魔をするな)

ユマは心中で何者かに向かって叫んだ。

——おい、豎子^{じゅし}。鉄くずに鉄くずをぶつけて面白いのか？ 早くここを去れ。土臭くてかなわん。

「うるせえ。黙ってる！」

思わず、ユマの口が開いた。だが、突然、心のどこかが冷めた。闘技場の気温がわずかに上がったように感じたのは、シャナアークスの駆る竜機が、炎を噴出したように見えたからだ。

燃えているように見えたのは、竜機の持つ槍で、火尖^{かせん}と呼ばれる。

ユマはここに来て初めて、このオロ王国が魔法という不可思議な文明の中にあることを思い出した。

——ほう、今の人間はまだあんな術を使っているのか……

心中の声が、批評めいたことを言う。今の——とは、随分と長老ぶった言い方だ。

——ほら、ほら。早く逃げんと死ぬぞ。

まさか、とユマは思ったが、シャナアークスと目が合ったとき、怖気を感じるとともに、これは既に訓練ではなく決闘であることに気づいた。

シャナアークスが本気を出した以上、こちらでも決死の覚悟で戦わなければ、命を落としかねない。

ユマが逡巡したほんの数瞬の間に、シャナアークスは凄まじい速さで距離を詰め、火尖を繰り出した。とっさに前に出した竜機の右手が一瞬で焼け焦げた。

「余所見をするなど言っただろう！」

追い討ちをかけるようにシャナアークスは竜機をぶつけてきた。

今度ばかりは防御が間に合わず、ユマは壁に激突した。

（冷たい……）

と感じたのは、背に水が飛んだからだ。気づけば自分の乗る竜機が、光精の泉の一部を破壊していた。おびただしい勢いで泉の水が溢れ始め、闘技場の砂を黒く染めた。

——きゃはっ……冷たあい。おぞましい濁りよ。

子供のような声が脳内に響くと同時に、炎をまとった槍が地獄へ誘うかのようにこちらを狙いすましているのが見えた。視線を操縦席に移すとシャナアークスと目が合った。

（はっ、嗤ってやがる）

ユマは唾をうまく飲み込むことの出来ない自分が、もはや死に体であることに気づいた。

第二章「闘士衝冠」(14)

「避っ！けっ！ろお——！」

時が止まったようなユマを見かねて、キダが思い切り操縦桿を倒した。竜機は崩れ落ちるように傾き、シャナークスの火尖を避けたが、焼き鏝こてのようになった槍は蛇のように起動を変え、更にユマたちに襲い掛かった。

キダは、竜機の上半身を半回転させ、左手に残った槍をシャナークスめがけて放った。

二、三秒の間にこれらの全てが行われた後、ユマは我に返った。

キダの放った槍はいとも容易く跳ね返された。

「うおっ！」

思わず身をよじったユマのこめかみをかするように、槍が地面に突き刺さった。既に竜機は仰向けに倒れ、ユマとキダは操縦席にしがみついている。

「終わりだ」

と、シャナークスが言ったのかどうか、ユマには聞き取れなかった。ただ、彼女がとどめの一撃を繰り出そうとしたとき、死を覚悟したユマの身に奇妙なことが起こった。

地面に吸い寄せられた。

ユマは最初確かにそう感じた。だが、次に感じたのは違った。竜機が沈んでいる。固い地面に沈んでいる。

(違う……)

よく見ると、竜機の表面がどろどろと溶け出している。粘土のように弾力をもった何かに変わり、しかもそれは生き物のように小さく蠢うごめいている。キダはこの手のものが苦手らしく、顔を青くしていた。火尖がいつ襲い掛かってくるかわからないから、それもあったのかもしれない。

突然、槍を振り上げていたシャナークスが下がった。ユマが気

づかない間に、自分の竜機が彼女の方に手を伸ばしたのだ。初めて、竜機が人の意思にない動作をした。シャナアークスの驚愕の表情を見るに、これは彼女にとっても全く未知の現象であるらしい。

——まるで墓じゃな。おお、死した患者どもが蠢いておるわ。何というおぞましさか！

何者かの声に、ユマははっと思い出した。ホルオースがかつて言ったことだ。

——内部は魔灰と呼ばれる土が塗られております。魔灰は精霊の死骸ともいわれていて、念じて魔力を送れば、動きます。

今蠢いているものは、魔灰ではないのか。竜機の外装はそのままであるのに、魔灰（らしきもの）が内から飛び出ている様にも見える。では、この現象は何なのだろうか。心中の声が死した患者と呼んでいたのは魔灰のことではないのか。

「精霊……」

ユマの耳はシャナアークスの呟きを確かに捉えた。精霊とは何か。源精は精霊ではないのか。それに、アカアの話ではこの国の人間は某精と呼ばれるものに人格を認めていない。これは直感に過ぎないが、目の前の現象からは意思のようなものを感じる。

一度に多くのことを考えすぎて頭が朦朧もろうろうとなり始めたユマを呼び覚ましたのは、またあの声だった。

——何をしておる。さっさと起きぬと、全部土に持っていかれるぞ。

ユマは声の命じるままに竜機を起こした。この間、無防備であったが、シャナアークスは攻撃してこなかった。どういふことかはわからないが、彼女の驚きはユマの比ではないらしい。

竜機を立たせたとき、何かの力が急速に奪われていくのを感じた。生氣とでも言うべきだろうか、竜機全体から放たれる騒がしさが消えた。だが、外観は先ほどとは変わっていない。

——ぐずぐずするから、魔力がほとんど奪われてしまった。

ユマはもう、何者かの声に疑問を挟かむことをやめた。実際、それどころではなかった。

ユマの脳内に強烈に流れ込んでくる何かがある。

（これは、意思か……）

人にあらざる者の意思、それをアカアは妖怪と言ったことを思い出した。その流れは激流に似ているが、流れに乱れはなく、どこもなく清らかな感覚がした。

ユマの全身に、水をうった様な音が響いた。

刹那、物凄い勢いで流れてゆく意識の中で一つの情景が浮かび上がった。

湖畔に腰を下ろし、髪を洗う老婆。だが、白髪は精気を失っておらず、口元は年頃の女のものだ。ただ、彼女の目を覗き込んだとき、恐ろしいほどの静けさがあり、それはユマに死を連想させた。

ユマはうつすらと目を開けた。とはいえ眠っていたわけではない。自分の中の何かが開いた。

世界が、豹変した。

空気が輝いている。その輝きの一つ一つが、魔力とか精とか呼ばれるもののだろう。地面は大らかに波打っていた。空気中の光はそれに取り込まれ、死んだように光を失う。

ユマの目は、眼前の敵をとらえた。

シャナアークスの火尖は、驚くべき輝きを持っていた。だが、その輝きはどこか荒んでいる。

（光が……逃げて行く？）

彼女を中心に光が集められ、それが竜機を通じて槍へと送られてゆく様が、ありありと見える。だが、槍に集まった光は力を失い、急激に暗くなる。

——力の使い方をわからぬ小娘よ。槍を振るう分だけ、精霊に嫌われてゆくのに気づいていない。

心中の声に励まされるように、ユマは竜機を動かした。横でキダが何かを言っているが、意識がおぼろげで、よく聞き取れない。

ユマはキダをなだめるように言った。

「大丈夫、勝てる……」

ユマはゆつくりと操縦桿を倒した。すると操縦桿は雪の様に溶けて消えた。それでも竜機は進んだ。

気づけば、シャナアークスの放った火尖が眼前にあった。ユマは心の中で小さく背伸びをした。竜機は腰を沈めていた状態から直立した。火尖が竜機の腹を突いたとき、ユマは腹の底が熱くなった。刺すような痛みを感じるとともに、それまでゆつくりであった世界が急速に回り始めた。

ユマの竜機を突いた槍は、何の手ごたえもなく、その胴を貫いた。接触の間際、シャナアークスは火尖の先から炎が消え、ユマの乗る竜機の腹が水面のように波打っているのが見えた。

（東方の術士……）

これまで、シャナアークスはユマが術士であるとは微塵も思わなかった。教えてみて、彼らが魔術とは全く無縁の半生を送ってきた事を確信していた。だからこそ、ユマがシャナアークスにとって未知の力を見せたことが驚きだった。

シャナアークスは槍を引き抜こうとした。だが、ユマの乗る竜機は既に波打つことを止め、冷たい金属の塊かたまりに戻っていた。

空いたもう一方の槍を動かそうとしたとき、ユマの残った片腕に妨げられた。こうなればもう、竜機戦は佳境だ。互いの竜機に乗り移り、白兵戦が始まる。

（よくぞここまで抵抗してみせた）

互いに剣を帯びており、相手は二人だが、どう考えても闘士のシャナアークスに及ぶはずがない。ユマが奇妙な術を使ったようだが、それでこちらが被害を受けたわけではなく、依然として状況はシャナアークスに有利なままだ。シャナアークスにとって、もはやこの勝負は終わったに等しい。

また、シャナアークスが腰にさした剣は、オルベルと呼ばれる宝剣である。真っ赤な刀身には呪力こそ込められていないが、たとえ魔剣でなくとも、切れ味はそこいらの名剣を凌駕する。

いざ——と、シャナアークスが腰元の剣に手をかけたとき、違和感を感じた。

（キダがない！）

ユマの後部に座って竜機の腕部を動かしているはずのキダの姿がない。確かにシャナアークスの視線は、ユマの乗る竜機の腹部で起こった奇妙な現象に釘付けになっていたが、互いが接合し、格闘を始めてからまだ二、三秒しか経っていない。その間にキダが消えた。格闘する際の衝撃で振り落とされたのだろうか。

シャナアークスは、首元に冷たい感触を覚えた。仰げば、喉元に剣を突きつけていたのは、消えていたキダだった。いつの間にこちらの竜機に飛び乗ったのか。

（全部ユマがやっていたのか……）

何度も繰り返すが、ユマの乗る竜機は二人乗りだ。脚部の操作を機と言ひ、ユマが担当していた。対して上半身の操作は竜と言ひ、キダの担当だ。キダがこちらの竜機に乗り移ったのは、どう考えても最後に竜機で格闘する以前だろう。ともなれば、最初から（あるいは途中から）ユマが竜と機の両方を担当し、キダはこちらに乗り移ることだけを狙っていたことになる。練習もなしに出来ることではない。

シャナアークスは、ここ二日ほどのユマたちの操縦がおぼつかなかった理由をここで知った。彼らは互いに単独で竜機を動かせるように練習していたのだ。確かにユマは妙な術を使ったが、それは直接の敗因ではない。この試合での決定打は、激突の際にキダがシャナアークスの竜機に飛び移ったことと、それをシャナアークスが予知できなかったことだ。シャナアークスが彼らを侮らなければ、キダが消えたことに気づいたはずであり、ユマは、いくつかのハプニングがあつたにしろ、当初の目的どおり、秘策でシャナアークスに勝ったのだ。

シャナアークスは既に勝ったつもりでいたキダを一睨みすると、「首を刎^はねないのなら、最初から剣を向けるな！」

と、叫んだ。だが、キダは物怖じするどころか、かえって切っ先を強く押し付け、険しい口調で言った。

「わからないのか？ お前は今、お情けで生かされているんだ」

シャナアークスは何かが切れる音を聞いた。彼女が足を踏み鳴らしたとき、竜機が大きく旋回し、キダが振り落とされた。

怒り狂った彼女が闘士の誇りを捨てて前に、再度、勝負がついた。

ユマの竜機が物凄い力で動き、残った腕で、シャナアークスの竜機の持つ槍をへし折った。シャナアークスが振り返るより早く、折れた切っ先を手にしたユマの竜機は、彼女の頭上を衝いた。シャナアークスのつけた闘士賞冠が千切れ飛んだ。

振り返る間際、彼女は死を予感したのだろう。その証拠に、もはや抗うことをしなかった。

「まさか……まさか……」

シャナアークスは剣を抜きかけたまま、しばらく呆然としていた。地面に尻餅をついていたキダが起き上がると、ユマも竜機を飛び降りた。ユマがキダに駆け寄ると、二人は勢いよくハイタッチした。しばらくの間、闘技場内に彼らの歓声が響いた。

二章 「闘士^{とうし}衝冠^{しょうかん}」 了

三章 「舌禍^{ぜっかしめ}啾々^{しゅうしゅう}」 へ続く

第三章「舌禍啾々」(1) (前書き)

■二章までの主な登場人物

・ユマ

本編の主人公。突然、異世界に迷い込むも、ローファン伯爵の娘アカアによって保護される。女闘士クウの奴隷となったキダを救うために、竜機戦を受ける。

・キダ

ユマの悪友。ユマと同じく、オロ王国に飛ばされるが、不運に見舞われ奴隷の身分に落とされる。自らの自由を勝ち取るために、ユマとともにクウに挑む。

・アカア・ヤム・ローファン

ローファン伯爵の娘。礼儀正しく、穏やかな性格だが、時々、貴族特有の酷薄な一面を見せる。

・リン

ユマにつけられたローファン伯爵家の使用人。

・クウ・フェペス

闘花とあだ名される女闘士。ヤム家（ローファン伯爵家）に強い怨恨を持つ。

・シャナアークス・オルベル

ユマとキダに竜機の手順を教えるため、王宮から派遣された王宮名誉闘士。火術に秀でているが、ユマ、キダとの決闘に敗れる。

・ヌル

アカアの護衛。ユマを目の敵にしている。

・ローファン伯

ヤム家の当主でアカアの父。近年、勢力を拡張しているガオリ侯に接近している。何者かの暗殺を企んでいるようだが……

・ホルオース

フェペス家に仕える壮年の男。敵対しているはずのローファン伯と密談したことを、ユマに疑われる。

・エイミー

銀髪赤眼の美少年で新興貴族のガオリ侯に仕える。金貨数枚という高価な^{はつや}箒を買うために市場に出るが、額が足りずにユマに金を借り受ける。

・謎の声

ある日、ユマの脳内で言葉を発するようになった謎の声。闘争を忌むような台詞が多い。

第三章「舌禍啾々」(1)

「うあああ——！」

突然、やり場の無い怒りを空中に放ったシヤナアークスは、竜機が壊れんばかりの力で手を振り下ろした。拳から血が噴き出すまでそれが続けた後、竜機を降りた彼女はユマたちの方を見ることなく、無言で闘技場から去った。

ユマは多少の後味の悪さを覚えた。シヤナアークスの教えを受けなければ、ここまでこれなかったという思いもある。どちらかというと、彼女には嫌悪を覚えていたが、せめて一言くらい声をかけて欲しかった。

そのことをキダに言っていると、彼はユマをたしなめるような口調で言った。

「シヤナアークスは、俺たちに負けたんだよ。そんな相手に声をかけても惨めなだけだろう？」

一度勝敗が決まれば、それがそのまま人を分かつ。時々、人は思いついたように、勝者と敗者の間を美化しようとするが、両者の溝を埋める何かがあるとすれば、争いを克服できない人とは何なのだろう。勝敗の狭間にあるのは断崖の如き格差であって、そこに情をはさめば怨恨以外の何も残らない。両者が勝負の果てに絆を深めるというのは、敗者に敗北を忘れることを強制するに等しい。勝負の正しいあり方があるとすれば、両者は勝敗の結果について沈黙すべきだ。それが、敬意というものだろう。勝負の世界に「対等」という概念を持ち込む者がいたとすれば、愚者でしかない。今のユマがこれにあたると、キダは遠まわしに忠告したのだ。

竜機を下りた後、ユマは水飲み場に向かうキダを呼び止めた。

「昨日、何かあったのか？」

「どういう意味だよ？」

キダが首を傾げたので、ユマは昨日の出来事をかいつまんで話した。

ユマはローファン伯によるクウ暗殺計画を確信しているが、想像色が強い点は否めない。不確かなことをキダの耳に吹き込んでしまうのも忍びなく、暗殺の話は伏せて、ホルオースがローファン伯に内通しているという情報だけ伝えた。

「ホルオースが……いや、待てよ」

「やっぱり、何かあったのか？」

キダの話では、昨夜、クウはシェンビイ公の娘と会うために、公爵邸に向かったが、帰りが遅くなったので、キダを含む数人が迎えに出かけたという。出迎えた時の彼女の顔色は周囲の者が訝るほどに悪かったという。

「フェペス家はシェンビイ公と縁があるのか」

対してローファン伯はガオリ侯と親しい。激しく対立しているというシェンビイ公とガオリ侯の下に、それぞれフェペス家とヤム家（ローファン伯）があるということは、いささかききな臭い話である。「シェンビイ公の娘のクラヤーナはクウの従姉妹だ。それよりもクウだ。あいつ、馬車の中で泣いてたんだ。昨日は聞き間違いかと思っただが、今思い直せばすすり泣いていたのかもしれない。いや、やっぱりありえないか……」

キダは言葉を濁した。彼は平素のクウを見ているだけに、闘士として名を馳せる彼女が涙する様を想像できないのだろう。

「クウは一人だったのか？」

「いつもはホルオースが付くんだが、昨日は他の用事で出かけていたらしいからな。でも、誰か一人は供についていたはずだ。ああ見えても、一応お嬢様だからな。一人で外出したりはしない」

「うーん、そうか……」

ローファン伯が殺そうとしたのは、クウではないのか。だが考えてみれば、王すらが注目するほどの試合を前に、伯爵ともあろう者がそんな幼稚な策略を行うだろうか。クウが死ねば、真っ先に疑わ

れるのは領地を賭けているローファン伯であり、ユマが圧倒的に不利なのだから余計に疑いは増すだろう。自分がローファン伯であってもそのような浅はかな真似はしない。

だとすると、やはりホルオースが鍵であるように思える。昨日盗み聞いた会話からしても、刺客役はヌルではなくホルオースだろう。――術士がいるとは知らなかったぞ。

ものすごい剣幕でヌルに当たり散らすホルオースのことを思い出した。

「昨日、クウの近くに術士がいなかったか？　しかも手練らしい」「うーん……そういえば、シェンビィ公は術士の家系らしい。クラヤーナはフェース家に生まれたが、術の才能があったらしくて、結構前にシェンビィ公が養女にしたような話をどっかで聞いたよ。彼女も術士なんじゃないか？」

「凄腕か？」

「いや、見た感じは普通の女の子だ」

「嫌に物覚えがいいな。はは、さてはよっぽどの美人だな」

キダはフェース家で働いているとはいえ、まだ日が浅い。にもかかわらず、他家の情報を仕入れているともなれば、クウの従姉妹が美女であったからだろう――と、ユマは自分の視点でキダを見た。

「誰が！　あんな性悪餓鬼、いくら顔が良くても俺はごめんだ！」

クウとクラヤーナは仲が良い。クラヤーナが王国最高の権威を持つシェンビィ公爵家の養女となっただけからは、二人の身分には天と地ほどの差が出来たが、それでもクラヤーナはクウを臣下のごとく見下すことをしなかった。クラヤーナはクウより五歳下の十三歳で、二人は幼い頃から実の姉妹のように仲が良かった。

だが、彼女の敬意はクウ個人に向かうだけで、普段のクラヤーナは手がつけられないほどに我侫な女らしい。わがまま

「美しさと、性格の良さというのは、ある程度を超えると反比例するらしい」

と、キダはクララヤーナ評に付け加えた。十三の娘を可愛いではなく美しいと言ったところに、クララヤーナの際立った美貌があらわれているとも言える。

ある日、彼はクララヤーナを訪ねたクウに付き添っていったが、シェンビィ公爵邸の門前で立って主の帰りを待っているときに、階上から落ちてきた何かが、キダの頭に当たった。

「うわっ！」

慌てて頭上を振り払うと、長細い何かが地面に落ちた。それがうねっていて、しかも細かに動いているのを見たとき、キダは顔を青くした。頭上から降ってきたのは百足^{むかで}だった。心臓が縮み上がるとともに、頭上からまた何かが降ってきた。ゴキブリ、羽虫、芋虫……周囲の者達も悲鳴を上げながらその場から退散した。

キダもそれに倣ったとき、突然、地面が消えた。自分が落とし穴に落ちたと知ったと同時に、階上から少女が囓^{わら}い転げる声が聞こえた。

「運が良かったな。時々、石が降ってくることもある」

と、自分を引き上げてくれたシェンビィ公爵家の使用人が言った。

「そりゃあ、災難だな……」

ユマは表情をつくろうのに困った。キダが虫類を異常なほどに恐れているのを知っている彼にとっては、気の毒すぎて、あまり笑えない。

「奴隷に穴を掘らせて、そこに糞小便を溜めて、客人を落とすのが楽しみなんだそうだ。『穴姫^{あなひめ}』様っていうのが、彼女のあだ名らしい」

キダは怒りを押し殺すような口調で言った。自分が虚仮^{こけ}にされたのがよほど腹に据えかねるらしい。

「よほど歪んでるな……」

ユマは少し、そのクララヤーナという少女と会ってみたくなくなった。彼女の歪み方は異常だが、どこか子供じみた人間臭さを残している。

ローファン伯爵邸で暮らしていると、自分が人間に囲まれているという気分が薄れてくる。ユマは、それに恐怖を感じはじめた自分に気づいた。

（アカアは良い娘だ。アカアを軽蔑するな……）

ユマは自分に言い聞かせた。アカアには確かに酷薄な一面があるが、一度としてユマを無下に扱ったことはない。アカアは確かに優しい少女だが、その優しさの及ぶ範囲が、極端に狭いだけだろう。

「ホルオースを、探れるか？」

ユマは話題を戻した。

「いや、無理だ。あれ以降、もう家中が敵だよ。今日の試合には、俺を帯同するつもりらしいがな……」

無理もない。主人に反旗を翻した者が堂々と家中に居座っているのだ。キダに対する風当たりが強くなるのは必至だろう。

（俺の見えないところで、相当に苦勞している）

ユマは、とてもキダのようににはできない。フェペス家の人間がヤム家に対して持つ感情は、ユマの想像を超えて激しいものだろう。そんな中で、ヤム家の陣営であるユマの友人を公言しているような男が、奴隷という身分で仕えているのだ。実際、日を重ねるにつれてキダの顔色が悪くなってゆく。ユマは今までそれに触れなかった。自分だけがローファン伯に保護されてのうのと起居していることが、苦痛になり始めたのは確かだ。

「クウに会えるか？」

昨夜、ホルオースをローファン伯に使わしたかどうか、彼女に問わねばならない。

「駄目だな。皮肉だが、今の俺とまともに会話してくれるのは、ホルオースくらいだ。試合の前後に話す機会くらいはあるだろうが、必ずホルオースが近くにいます。彼女と二人きりになるというのは万に一つもない。俺は一度、クウを襲っているから、当然だろう。それに、ホルオースがローファン伯に内通するなら、俺たちにとって悪い話じゃないだろう」

一時間ほどしてから、席を外していたヌルが戻ってきた。

「シャナアークス殿はどうした？」

彼は周囲を見渡しながら、やがて光精の泉が破壊されていることに気づくと、もう一度同じ事を問うた。

「今日の訓練は、もう終わりだったよ」

ユマは両手を広げて、小さく肩をすくめた。

ヌルは納得がいかなかったようだったが、組み合った状態でうち捨てられた二機の竜機に目をやると、驚いたように目を見開いた。

「ヌル、この後はクウの試合を観る事になってるだろう？」

ユマはヌルが新たな疑問を口にする前に、話題を変えた。

「……そうだ。だが、観客にお前が混ざっていることが知れば、面倒なことになる。これを着ろ」

ヌルはそういつて、フード付きの大きなマントを渡した。

「はは、俺は王都の有名な人らしい」

しばらく経って、キダを迎えに来たのは、ホルオースではなく、他の使用人だった。

キダは、ユマと別れる間際、彼を呼び止めて言った。

「ユマ、俺を見捨てなよ」

思いのほか、強い声だったので、ユマはむっとした。

「当たり前だ！」

誰のためにここまでしてやっているんだ——と、心中で続く言葉に気づいたとき、ユマは小さく溜め息をついた。ユマはキダと対等に接しているつもりだったが、キダにすれば、生死の境にいるのは自分だけで、ユマはいつでも逃げられる位置にいるように見えるらしい。

キダが言いたいのは、ユマが敵前逃亡するということではなく、もし試合に負けたり、あるいは何らかの理由で試合が中止になった場合、あらゆる手段をつかって自分を助ける——と、念を押したのだ。試合さえ中止になれば、ユマにとって生命の危機は去る。ロー

ファン伯の庇護を得ての穏やかな暮らしが戻ってくるのだ。そうなれば、ユマは友人を助けるために奔走ほんそうすることはなくなるだろうと、キダは考えたに違いない。

自分という人間が、キダにとってその程度にしかみられていないということに、ユマは落胆したが、自分が逆の立場でもやはりキダと同じことを言っただろう——と、思い直した。同時に、キダは自分にとって悪友ではあっても、本当の親友にはなれそうもないと、しみじみと感じた。

第三章「舌禍啾々」(2)

午後五時が過ぎ——闘技場は盛況の中にあつた。

いつも閑散とした中で訓練を行っていたユマは、同じ場所が人で満たされ、自分がその中でもみくちやになっているのを、どこか夢のような気分で見ていた。

今日の試合は三つ組まれている。最初の二つは闘士戦で、最後に竜機戦がある。クウが出るのは三つ目だ。

観客席は階段状になっているが、何分人が多く、ユマは後方にいたので、人垣の隙間からしか試合が見えない。最初の試合は普通の剣闘試合だったようで、歓声に混じって、剣のぶつかり合う音と、その際に闘士の放つ声が聞こえた。

やがて、それが止むと同時に、

——殺せ！

と、観衆が声を合わせて叫んだ。ユマが闘士を確認する前に、あたりは歓声で満たされた。

「畜生、見えねえ！」

どこか、他に観戦しやすい場所はないかと、ユマは周囲を見渡した。すると、一箇所に数人の街娘が固まって試合を見ていた。彼女たちの前には光精の泉があって、普段はその近くも観客が座るのだが、ユマが先のシャナアークスとの戦いで観客席ごと破損してしまったので、びっしりとすし詰めにされた観客席にちよつとした隙間が空いている。

「おい、向こうに移動するぞ」

ユマは、傍らにいないはずのヌルを捜したが、いない。仕方がないので、自分だけでそちらに向かうことにした。

ユマは街娘たちの傍まで歩いてゆくと、
「ちよつと失礼するよ」

と言って、一番端にいる少女の肩を押して無理やり押し入った。

「きゃっ！ 何、この人？」

娘は怒るというより、突然割り入ってきた男を警戒した様子だった。黒いマントに身を包んでいて、深々とかぶったフードで目元も見えないのだから警戒されて当然だろう。傍にいた二人の娘が彼女をかばうように引き寄せたが、中心にいた娘は、ユマを一瞥した後、「かまわなくてよ。それより、次の試合が始まりますわ……」

と、小さなごたごたに興味を示さなかった。

「何だ。ヴォンの娘は、皆、お嬢様みたいな喋り方をするのか？」

ユマがそう言うのと、中心にいる娘は一瞬だけ顔色を変えた。だが、すぐに取り澄まし、

「あら、旅の方？」

と、ユマの隣まで近づいてきた。

（蒼いな……）

夜空を吸い込んだような色の髪だ。後ろで団子に纏めていて、よく見ると顔立ちに気品があり、輝くような美しさがある。それは己の容姿に対する自信から来るものだろう。もしかすると、貴族の娘が屋敷を抜け出して来たのかもしれない。それに、どこかで会ったような気がするのは気のせいだろうか。だが、そんなことはどうでもよく、ユマは、

「まあ、そんなところだ……」

と、返すと、再び闘技場に視線を移した。

二人いた闘士は、一人になっていた。残った一人は、胸に突き刺さった剣を抱くように斃たおれていた。

「野蛮なことをする……」

哀れな——とは、ユマは言わない。殺された側も、相手を殺すつもりで戦ったのだろう。その結果、誰も死なないで済むはずがない。「あら、あなた闘技は初めて？」

と、いつの間にかユマの傍に肘を寄せていた街娘が言った。とい

っても、身長差がありすぎて、彼女は大きく胸をそらしてユマを見上げていたのだが。

「初めてじゃあないが……（というより今さっきやってきたばかりだが）」

「人が死ぬのは嫌い？」

ユマは娘の方を見なかったが、小さく頷いた。

「そう。私は好きよ。ここにいる人はみんな大好きみたい」

と、娘が言ったとき、新たな歓声が上がった。次の試合の闘士が入場したのだ。

ユマはそちらを見ずに、じつと娘の顔をみた。少女である。まだ、十五歳にも達していない。

（歪んでいる……）

ユマは最初にそう思ったが、競技観戦と闘士のそれと、何が違うのかとを突き詰めて考えてみると、さほどの違いがないことに気づいた。ボクシングや、総合格闘技にさほどの興味があるわけではないが、たまたま目にとまった試合に魅入られて、熱中することも多々ある。人が人と、互いに火花を散らすようにしてぶつかり合う様子は、互いの力量が近ければ近いほど、形としては醜悪であっても、血汗が吹き飛ぶ様はどこか美しく、観る者の内に眠る狂騒を呼び覚ます響きを持っている。それは、さわやかなほどに純粋な快楽といつてよく、人が夢中になる所以^{ゆえん}だろう。人の本能は闘争を好んでいる。ユマはそれを否定するつもりはない。ただ、その結果が敗者の死であるというのは、あまりにも凄惨^{むじ}だ。惨い上に、知恵がない――とも思う。

「勝負を観て楽しむのはわかる。だけど、人が死ぬ様を観て楽しむのは、下衆^{げす}のやることだ」

ユマの呟きを、娘は確かに聞き取ったらしく、

「へえ……」

と、ユマの顔を覗き込んできたが、フードを深々とかぶっているせいで、目元が見えない。だが、ユマからは娘の顔がよく見える。

大人しめの鼻は少女のものだが、目や口元の艶は女つやそのものだ。

「旅人さん。あなた、誰かに死んで欲しいって思ったことはない？」

娘の言葉は、源精を介してユマに伝えられるが、生の声も耳に飛び込んでくる。ユマはそれに一種の心地よさを感じた。

「……あるにはあるけど、それとこれとは違うだろう」

ユマはキダのことを思い出した。彼に追い回されたとき、殺意を感じたことは確かだ。だが、闘技場で誰かの死を見ることで、自分の憤りを宥なだめ、慰めるとしたら、人としてあまりに情けない。

「確かにね。あなたの言うとおりでわ。でもね、この人たちはそうじゃないの。自分で誰かの命を左右できる人たちじゃないのよ。だから、自分が望んだ分だけ人が死ぬこの場所が好きなのよ。あなたにはある？ 誰かの命を手のひらの上に乗せたことが……それはね。どんな人間にとっても、至高の快樂なのよ」

娘が思った以上に穿ったようなことを言ったので、ユマは驚いた。だが、すぐに反発した。

「ああ、あるさ。俺が手をこまねいていると、確実に死ぬ奴がいる。けどな、その何が楽しいってんだ。それに、誰かの命を手中にするだって？ 大きな手のひらの上でコロコロ転がっているのが、自分自身だって事を何で忘れられるんだ。そういうのはな、世間知らずな餓鬼の言うことだ。いいか？ この連中はな。自分の周りから危機が排除された空間を楽しみに来たんだ。闘士は死ぬ。でも自分は死なない。剣闘もしない。ただ見てるだけだ。勝敗もない。ここには観客にとって、賭け以外の一切の競争がない。それは、仕事終わりに酒を飲むのと同じことだ。彼らは休みたいんだよ。安心したいんだ。毎日、仕事に追われるような苦勞を背負ったこともない奴が、賢さかしいことを口にするな！」

最後の方は観客を擁護するような口ぶりだったが、ユマは目の前の陰惨な光景を許したわけではない。彼が感じたのは、

（娯樂の質が悪い）

ということだった。だが、闘技を見に来るのは何も一般人だけで

はなく、貴族が臨席することもある。この場合は、娘の言ったことのほうが当てはまるかもしれない——とも考えたが、歳若い少女が下卑た遊びを楽しんでいるのは、ユマのような男にとっては不愉快でしかない。

娘は自分が罵られたことを知って、かっと顔が赤くなった。後ろにいた娘にも、二人の会話が聞こえたらしく、

「何て事を……クララ様、大丈夫？」

と、娘の肩に手をかけた。

（クララ……どこかで聞いたような——）

ユマが娘の名に違和感を覚えたと同時に、娘は自分を慰めようとした仲間を振り払った。肘が顔面に当たり、仲間の娘は倒れた。

クララと呼ばれた娘が激昂していることを知ったユマだったが、肘うちを食らった娘が口元から血を流しているのを見て、心中穏やかではなかった。よく見ると、クララとともにいた娘たちの表情が恐怖でひきつっている。

「てめえ！」

と、叫んだのは、ユマではなく、クララだった。天女のように潤った声が怒気を帯びるとこうなるのか——と、ユマは間の抜けたことを考えた。

クララはユマに向かってくると、力いっぱい拳を突き出した。だが、それは届かない。ユマがクララの頭を抑えたからだ。

「この！ このお！ ぶっ殺す！ ぶっ殺す——！」

罵声を放ちながら、クララは殴りかかるが、その尽くが失敗に終わった。

「おや、こっちでも拳闘をやってるぞ」

観衆の一人がこの騒ぎに気づいて、野次を飛ばしてきた。ユマに向かって本気で殴りかかってくるクララの道化振りがうけたらしく、あたりは哄笑で満たされた。

彼女の目に涙が溜まってきたので、ユマは何やら弱いものいじめをしているような——実際にそうだろう——気分になり、クララの

頭を押しのけるようにして手を離した。少女は見事に仰向けにこけた。

蹲うずくまって頬を押さえている娘の方を見たユマは、屈んで娘の頬を見ると、ばつの悪そうな顔で言った。

「悪いな。俺があんたのお友達をからかったせいで、美人が台無しだ」

袖からハンカチ――勿論、ユマがこの世界に持ち込んだものだし――を取り出したユマは、それで娘の口元を拭った。

「歯は……折れてないようだな。これを水に濡らして、当てておくんだ。その泉は濁っているから、他に行くといい」

そういうと、娘は驚いたようにじっとユマの顔を見ていた。彼女は仲間に連れられて、闘技場を出て行った。クララを起こそうとすると、猛獣のように暴れて手がつけられなかったので、彼女だけがこの場に残った。

「おい、いつまで寝てんだ餓鬼んちょ！」

ユマはクララの手をつかむと、無理やりに引き起こした。勢い余って、クララが胸元に突っ込んできたところで、衝撃とともに左耳が麻痺した。

「ふんっ、届いた！」

ようやく憎たらしい男に平手を浴びせかけたクララは満足したのか、胸を張って言った。

「やれやれ、話に聞いたとおり、腕白な餓鬼だ」

そういったところで、ユマはエイミーを思い出した。あの銀髪の少年は、クララよりは遥かに少女らしさがある。アカアを思い出さなかった自分もおかしかった。

「お前、穴姫様だろ？」

クララの表情が変わった。あからさまに動揺している。

「何をそんな……な、何かしら、その卑猥ひわいな名前は？」

「じゃあ、クララヤーナと呼んだ方がいいかな。クウに似ているから、すぐにわかったぞ」

ユマが顔を覗き込むように言うと、少女は後ずさりした。

「何で……まさか、わたしがクラヤーナですって？ それにあなた、クウの知り合い？」

「ああ、知り合いだよ」

と言ったとき、ユマは内心、舌を出した。

歓声が上がった。二試合目が始まったようだ。

第三章「舌禍啾々」(3)

闘技の二試合目は、どうやら術士戦らしい。

「シェンビィ公爵家は、術士の家系らしいな」

クララヤーナは、素性の知れない目の前の男を探るように見ている。ユマはそれを無視して彼女に問うた。

「……そうよ」

少女の声を掻き消すようにして試合が始まった。

二人の闘士が闘技場の中心で対峙している。一人は剣士であるらしく、長剣を抜いている。もう一人は頭に鳥の像が彫られた杖を手にしている。剣士のほうは甲冑を着ているが、杖の術士は武装していない。二人とも歳若くは見えず、壮年だ。

「いやっ——！」

術士が杖を振ると、鳥の嘴くちばしから炎が放たれた。剣士が剣をなぎ払うと、炎をかき消すように風が吹いた。逆巻いた炎が術士を襲った。観客席のユマは、闘技試合を横目に、クララヤーナに問うた。

「この連中は誰でも魔法が使えるのかな？」

王都を散策してみても、ユマは魔法そのものを目にすることはなかった。だが、闘技場に来ればその片鱗を目にすることができる。魔法という技術が、民衆の実生活に浸透していないのではないかという疑問がユマの中にはある。

ユマの問いに対して、クララヤーナは面倒そうな口調ながらも、実に親切に答えた。

「そんなわけじゃない。魔術というものは、元来貴族の持分だったのよ。それが大分昔に精霊台が開かれてから、オロの貴族が共同で研究、管理するものになったの。だから、魔術を習得できるのは、精霊台に通った才能のある人間だけ。でも、そうじゃない連中もいるわ。彼らが使っているような低級な魔術は、没落した貴族から流れ出たものね。流れの傭兵や、術闘士なんかがこれに当たるわ。」

質が悪いし、大した事もできないから、王宮も黙認しているの」

「貴族が魔法を独占しているのか？」

「いいえ。精霊台は才能さえあれば、誰にでも門戸が開かれているわ。でも精霊台で学べるのは技術だけ。それを生かすだけの精霊にめぐり会えるかは、その人次第よ。術に秀でた家の貴族なら、確かに有利でしょうけれど」

最後の「精霊にめぐり会える」という言葉だけが理解し辛いが、ユマの疑問はそれなりに解けた。

（なるほど、それでアカアは術が使えないのか。精霊台に通っていないから。確か、ローファン伯爵家は術士の家系ではないと彼女も言っていたしな……）

感じ入ったように何度も頷くユマだったが、試合が激しさを増すにつれ、クララヤーナの方がそちらに夢中になった。

ユマも、術士の戦いを食い入るように観ている。

——愚かなことよ。人を殺すのに、精霊が力を貸すと本気で思っている。

また、あの声だ。声は時々、意味不明なことを言うが、一貫して闘争というものを忌んでいるようだ。

剣士が術士に襲い掛かった。剣先が術士の胸を貫くとともに、人が炎の塊と化した。それは弾けるように無数の火の粉となって散ると、鳥のような形になって剣士に向かって飛んだ。剣士はあつという間に火達磨になった。気づけば、胸を貫かれたはずの術士は何事もなかったようにもとの場所に立っている。

「杖の方が負けるな……」

ユマが呟くと、クララヤーナは驚いたように彼の顔を見た。

「どうして？　むしろ押してるじゃない」

どうみても、術士の方が有利に見える。ユマが何を根拠にそう思ったのか、クララヤーナは興味を持ったらしい。

ユマは、シャナアークスと戦った時のことを思い出していた。思

い出すといっても、数時間前の出来事に過ぎないから、感覚としてまだ残っている。

彼女の火尖かせんは確かに強烈だったが、その力には退嬰たいえいがあった。火精は確かにシャナアークスによって一箇所に集められ、槍を焼き鏝こてのように変幻させたが、それを上回る勢いで火精が大気に逃げてゆくのも見えた。

ユマは、今闘技場で戦う術士が、シャナアークスと同類に見えた。しかも、彼女よりも力の損耗が著しい。

「術というのは、無限に使えるわけじゃないらしい」

「当たり前でしょう。人が一生のうちに使役できる精霊は決まっているわ」

「それを使い果たせば、どうなる？」

「どうにもならないわ。術が使えなくなるだけよ。そんな人は、闘技場ではお払い箱になるでしょうけど……」

クララヤーナの言っていることは、よほど基礎的な知識らしく、彼女のうんざりした口調からそれはわかる。だが、そこに人を侮るような素振りはないのがユマには意外だった。奇妙なことだが、この性格の捻じ曲がったような少女は、アカアよりも話が合うような気がした。

「あいつは、打ち止めが近いらしい……」

ユマは、闘技場の術士を指差した。彼に集まる光が急速に衰えてゆくのが見える。

「何でわかるの？」

「なんとなく……かな」

クララヤーナは目を丸くしたが、ユマのそっけない答えにやきもきしたらしく、何度も同じ事を問うた。

二人が闘技場から目をそらしている間に、決着がついた。ユマの予想したとおり、術士が精彩を欠きはじめてところを、一瞬の隙について剣士が斬り捨てた。

ユマは暗く沈んでゆく自分を感じた。いつか、自分の中にある感

覚が麻痺して、観客と同じように誰かの死を喜ぶようになるのだろうか。

「楽しいか？」

クララヤーナにそう訪ねたときの、ユマの顔は、どこか疲れていた。

「つまらない試合よ。あなたと話している方が、よっぽどましだわ」
彼女は先ほど自分に殴りかかってきた怒りを、既に忘れていたようだった。最初に会ったときのお嬢様のような言葉使いはもうなくなっていた。どうやらこれが本来の彼女らしい。

——クウ！ クウ！

竜機戦の準備が進められる中、闘花とうかとあだ名されるクウの登場を熱望する声が場内に満ちた。

「のんきな連中ね。本人の気も知らずに……」

クララヤーナが吐き捨てるように言った。

ユマがそれについて問おうとするのを拒否するように、彼女は話を変えた。

「あなた。術士の才能があるわ。わたしの家来にならない？」

突拍子もないことである。だが、ユマは即答した。

「俺は、頭に毛虫を放られるのは御免だね。でもまあ、気が向いたらそうするかもな。飽くまで気が向いたらだが……」

にべもなく断るつもりだったが、ローファン伯爵家に居辛くなったときのことを考えたがゆえに、語尾を濁すような形になった。それを迷いと見たクララヤーナは、勝ち誇ったように笑みを浮かべて、「ふん、冗談よ。あなたみたいな怪しい人、わたしの近くに置くはずがないでしょう」

と、意地悪い声で言った。だが、言葉と裏腹に、クララヤーナがユマに興味を持ち始めたのは確かだ。

第三章「舌禍啾々」(4)

クララヤーナには、天才としか言いようのない素質がある。

彼女自身は術士としての素養は全くない。それにも関わらず、シエンビイ公がクララヤーナを養女にしたのには、彼女が幼くして美貌であることの他にも、理由がある。

今のフェペス家当主はクウの兄である。といっても既に壮年で、父である前当主の晩年に生まれたクウと、歳が十以上も離れている。クララヤーナの父は前当主の弟で、若くして亡くなったために、この幼女をフェペス家当主があずかることになった。

クララヤーナは幼い頃から感じやすい娘だった。

夜中に突然跳ね起きては見えない何かに怯え、人と話すときも、その人を見ず、やや上を見ていることから、家人からも気味悪がられた。

今でこそシエンビイ公爵家とは比べようがないが、フェペス家は上級貴族に劣らぬ優秀な術士を輩出してきた名門である。だが、最近はめつきりふるわず、最後に高名な術士を輩出したのは三代も前のことだ。近年、クウが闘技場で名を馳せているが、彼女は術士としてよりも、優れた容姿と武技で名を上げたと言ってよく、成績は良いが王宮名誉闘士の誉れを受けるに至っていない。この点、ユマトキダを教えたシャナアークスの方が、クウよりも上位の闘士である。勿論、人気の点では完全にクウに軍配が上がる。シャナアークスがクウを嫌う理由はここにあり、彼女の底意地の悪さで片付けてしまうのは、いささか忍びない。

怯えるように生きていた従姉妹を見かねたクウは、ある日、シエンビイ公爵主催のパーティーに彼女を連れ込んだ。

王国最高の権威である公爵開催のパーティーにもなれば、豪奢をきわめる。異国の華やかな衣装や、辺境の珍味を楽しんだクララヤ

ーナは、この日ばかりは表情に明かりを取り戻した。十五歳にも満たない二人の少女が、背伸びをするようにして大人たちの間をすり抜けて行く姿は、見る者の微笑を誘った。

だが、クララヤーナが突然立ち止まって口にした言葉が、彼女の運命を大きく変えた。

「ああ！ 消える。消えてるよ。おじちゃん。死んじやう。死んじやう」

クウは噴き出した汗で背中がびっしょりと濡れるのを感じた。クララヤーナの指差す先にいたのは、引退したシェンビィ公爵家の前当主だった。クウは滑り込むように彼の前にひざまずき、陳謝した。子供の戯言おれいごということで、その場は収まった。

クララヤーナの突拍子のない行動に驚いたクウだったが、数日後に、それは驚愕に変わった。

シェンビィ公爵家の前当主が急逝したのだ。

この訃報に、フェペス家が小さく波打った。

フェペス家当主は元来小心な男で、クララヤーナの戯言が現実となったことに不気味さを感じるよりも、

——呪いをかけたのではないか？

という疑いをかけられる事を恐れた。オロ王国では、人を殺すほどの強力な呪術は開発されていないが、それより疑いをかけられることのほうが恐ろしい。勿論、この手の呪法は研究しただけで死罪に値する。

フェペス家当主は顔をひきつらせたまま、弔問に出かけたが、シェンビィ公は彼を厚くもてなし、今後も両家の友好な関係を約束した。

（はは、気にしすぎたか……）

帰宅後にひとりで苦笑したフェペス家当主だったが、シェンビィ公はクララヤーナという娘を確かに憶えていたようで、前当主の喪が明ける頃、フェペス家に使いを遣やった。

「クララヤーナを養女に迎えたい」

使者のこの言葉に、フェペス家当主は首を傾げた。

両家の友好のために、彼女を養女に出すというのは悪くはない。だが、何故養女なのか。シェンビイ公の子にクララヤーナを嫁にやるというのであれば理解できる。そういえば、シェンビイ公には娘がいないようだから、他家との交誼を深めようとした彼が、嫁にやる娘を欲しがったということか。だとすると、クララヤーナはシェンビイ公爵家に留まらず、こちらとしては、両家の紐帯ちゆうたいを確かにする上で得るものは少ない。だが、無下に断ればシェンビイ公の機嫌を損じかねないので、フェペス家当主はしぶしぶ諒解した。

このことはクウの知らぬところで決められたことで、クララヤーナが養女に出されると知った彼女は烈火のごとく怒り、兄を諫めいさめた。「クララは精霊と話せる娘です。どうして他家にやったりするんですか！」

妹が物凄い剣幕なので、フェペス家当主は彼女をなだめるような口調で言った。

「シェンビイ公の頼みだ。無下には出来んよ。それに、精霊と話せる者などいるものか」

それでもクウは引き下がらず、しつこく諫めてきたので、さすがに機嫌を損ねたフェペス家当主は叱声しっせいを落として彼女を下がらせた。(やれやれ……あのじゃじゃ馬も、そろそろ婿むこを決めねばなるまい)クララヤーナをシェンビイ公の養女に出すと同時に、シェンビイ公の三男とクウとの婚約を取り付けたフェペス家当主は、(どうだ。これでクララとしばらくは一緒にいれるだろう)

と、密かにクウのために配慮したつもりだったが、彼女はそれを意に介さずにクララヤーナを家に戻すことを主張した。

異能とも呼べるクララヤーナの才能に気づいたのは、フェペス家ではクウただ一人だったが、シェンビイ公爵家でもクウと同じように、クララヤーナに注目した人物がいた。亡くなった前当主だ。

彼は息を引き取る直前、シェンビィ公にこう言った。

「フェeps家の童女を手に入れろ。あれは一家に繁栄をもたらす。我が家だけがそれを享受できるようにするには、妻に迎えるのではなく、養女にしなければならぬ」

遺言である。シェンビィ公は最初、父の言った娘が誰かわからなかった。だが、調べるうちに、それが父の死を予言した娘であるを知り、興味を持った。

クララヤーナは術の才能に全く恵まれない娘だったが、フェeps家当主の妹であるクウだけが、クララヤーナの才能をかつているらしいことがわかった。

「精霊と話す娘か。面白そうだ」

シェンビィ公とて、この話が断られれば無理に進めるつもりはない。だが、フェeps家の返答は「諾」だった。

クララヤーナと会ったとき、シェンビィ公は彼女の持つ空気が周囲の人間と隔絶していることを見抜いた。シェンビィ公爵家は優秀な術士の家系だ。彼自身もそうであるから、術士の目で見たクララヤーナが既に異様であったといえる。

（これは、大魚を得たかもしれん。落ち目の貴族はつくづく運がないな）

クララヤーナのような才能が生まれながら、それに気づくこともなく、他家にやってしまふ。衰えるということは、他者によって衰えるのではなく、自らそうなるのだ——と、シェンビィ公は自分に言い聞かせた。

シェンビィ公爵家の養女となったクララヤーナは、術の研究において大陸最高の権威である精霊台に通うことを許された。それを知ったときのフェeps家当主は大いに後悔するかと思えば、そうでもなく、

「シェンビィ公に恥をかかせなければよいが……」

と、未だにクララヤーナの才能に気づいていなかった。ただクウだけが唇をかみ締めていた。彼女はシェンビィ公の三男との婚約も

快く思っていないらしく、それに反抗するように武技に手を出した。クウが闘士となるのは、これより少し後の話だ。

クララヤーナには、あらゆる精が寄り付かない。火精、風精、土精……言葉を司る源精以外の全てが彼女を拒絶するようにして、一切の術を起こさなかった。

彼女の才能とは、ただ、視^みることだった。

クララヤーナには精霊の全てが見えた。空気中に火精が発し、力を伴って風精に変化する様を、優秀な術士が声を失うほどの正確さで語った。彼女は精を操ることはできないが、術の分析に関して、比類なき才能を見せたのだ。

だが、精霊台の中でも、クララヤーナはやはり特異であり続けた。今まで人の視線を恐れるようにして生きてきたが、今は違った。王をのぞけば誰よりも尊い公爵家の娘であるという事実が、今まで天であつたものが地となり、地であつたものが天となるに等しい感覚を彼女に与えた。

身を守るために臆病であり続けた者が、恐怖から開放されたのだ。もはや自分を害するものなどいないと知ったクララヤーナは、幼くして豹変した。

第三章「舌禍啾々」(5)

人の寿命を知り得る人などいないように、術士としての寿命を知るものなどいない。その例外がクララーナだが、彼女は、自分にしかわからない眼前の勝負の行方を、目の前の男が言い当てたことに衝撃を覚えた。

(この男も見えるのかな?)

だが、話してみると、男は術に関する知識が全くと言ってよいほどなく、しかも、考えがどこかずれている。それもそうだろう。わざわざ闘技場に足を運んでおいて、人を殺すことに文句をつける。それが嫌ならば、この場を去ればよいだけの話なのに、男はそうせず、不機嫌なまま、闘技場を見下ろしている。

このフードを深くかぶった男――ユマは、饒舌じょうぜつなようにも見えるが、言葉を飾るということをしていない。それだけに、放つ言葉の所々に棘とげがある。それを不愉快に感じるときもあるが、会話を重ねてみると、相手を害そうという悪意が感じられないことに気づく。言葉を競う道具にしていないのだ。

ユマが去らないのは、クウの試合を観に来たのだらう――と、クララーナはあたりをつけた。二人の関係がなんであるのか、興味の湧いた彼女は、クウが入場した瞬間も闘技場の方を見ず、ユマの表情の変化を眺めていた。万が一にもないだろうが、彼がクウの恋人であれば、面白い。シェンビィ公爵家の三男は確かに良く出来た男だが、人間としての面白みに欠ける。クララーナの幼さでは、まだそこまで考えが及ばないが、あの退屈な男が婚約者を寝取られてどんな顔をするのか、知りたくなった。

ユマの顔が一瞬、明るくなった後、すぐに視線を落とし、それは暗く沈んだ。歓声の大きさと半比例するようでもあった。

クララーナはこの時、クウと知り合いだと言ったユマの言葉が、嘘であるような気がした。

「さてはあなた、クウが好きでここまで来たんでしょう？ でも駄目よ。クウはあなたなんか振り向きはしないわ。それに彼女、婚約しているもの」

「俺は、そんな顔をしてたかな？」

「ええ、してたわよ。鼻の下伸ばして……気持ち悪くて吐きそうだわ」

クララヤーナは意地の悪い笑みを浮かべた。どういうわけか、少女はこういう表情をしたときが最も美しく見える。とはいえ、ユマに童女趣味があるわけではない。ただ、彼女の容姿が大人びているだけだろうか。

ユマはクララヤーナという娘に不思議を感じた。

——ヤムの犬め！

と、自分を罵ってきたフェース家の者達と比べても、彼女はずっと自由に生きている気がする。

「ところで、これはただの興味本位なんだが、フェース家とローファン伯爵家はどうしてあんなに仲が悪いんだ？」

ユマは思い出したように、両家の関係についてきいてみた。

「ああ、クウの次の対戦相手のことね。よりによってローファン伯から喧嘩をふっかけてくるなんて、正気とは思えないわ。お陰で王都中、その話で持ちきりよ」

そのローファン伯とて、予期せぬ事態だったに違いない——とユマは苦笑したくなったが、考えてみれば闘技試合を提案したのはクウの方だろう。クララヤーナはその事実を知らないのだろうか。

「その持ちきりの話を、どうやら俺は聞き逃したようだ」

何度か街を歩いてみたが、クウとの試合の噂を聞くことはあつただけだが、エイミーの一件をのぞけば常にローファン伯爵家の者が傍にいた都合、軽々と切り出せるものではなかった。ローファン伯爵家で最大の禁句である「ティエリア・ザリ」という名に触れて

しまいそうだったからだ。クウとの試合を控えて、竜機の操縦に全てをかけなければならぬ都合、情報収集が疎かになった。

「いいわ、教えてあげる。あなた友達がいなさそうなもの。もう試合が始まるからかいつまんで話すけど、要はローファン伯がフェペス家の宝を奪おうとしたのよ。フェペス家には代々『盲のエメラルド』っていう家宝が^{たぶら}あったのだけれど、今のローファン伯が若い時にフェペスの娘を^{たぶら}誑かして家宝を手に入れようとしたの。もちろん、それはばれて両家の関係は悪化し、ついには血を見ることになった。敗北したフェペス家は領地と家宝を失い、勝ったローファン伯は勢力を拡大した。フェペス家の者はみんなローファン伯を目の敵にしているわ。だから、今回の試合はローファン伯のフェペス家に対する嫌がらせでしかないのよ……」

「嫌がらせねえ……」

クララヤーナは生家の災難をまるで他人事のように話す。彼女の声から微塵の憤怒も悲哀も伝わってこないのは、彼女自身が完全にシエンビイ公爵家の人間であることを証明している。クウに対してはあからさまな好意をみせているだけに、クララヤーナの過去を知らないユマは、彼女のこの態度をはかりかねた。

「宝石欲しさに紛争を起こすとは、ローファン伯の評価を変えるべきかな……」

ローファン伯に興味があるような素振りを見せることで、クララヤーナのこの家への反応をみたかったユマだが、あてが外れた。

「宝石って何のこと？」

「え、いや、何かのエメラルドって、宝石じゃないのか？」

「盲のエメラルドよ。旅人でもオロの建国神話くらい知ってるでしょう？」

「ああ、それだ。（そういえば、アカアが何かで話していたな……）」

「どうして宝石が家宝になるの？」

「なるだろう。全部が全部そうじゃないけど……」

クララヤーナはユマの言うことが全く理解できない様子で、何度も首を傾げ、ついにはまじまじとユマを見て言った。

「あなた、変わってるわ。本当に変わってる」

「悪かったな。じゃあ、後学のためにも解答をくれると助かるね」
「やっぱり変わってるわ。貴族が家宝を簡単に外に漏らすはずないじゃない……」

外に漏らす——と聞いて、今度はユマが首を傾げた。武家が武術の奥義を一子相伝するように、この国の貴族達は魔術の奥義を代々伝えてでもいるのだろうか。

そのことをクララヤーナに問うと、

「いやよ。もう試合が始まるわ、お上りさん^{のぼ}」

と、にべもなく会話を切られた。

「会場の皆様、お待たせいたしました」

一人の男が闘技場の中心で語りを始めると、闘技場全体が水をうった様に静かになった。彼はいくつかの口上を並べた後、試合を待ちかねている観客の高ぶりを察したのか、早々に闘士の紹介に入った。

「太古、この世は巨大な竜が支配しておりました。巨竜の口から大地が生まれ、翼は天を覆い、夜空となりました。夜空に浮かぶ星々は、太古の勇者が竜の翼を射た痕^{あと}であると言われております。空にあいた光の穴を『リ』と言い、竜の翼を射抜いた矢を『ヴォン』と言います。我々の祖先は勇者の血を絶やさないように、最も星の見える場所に国を作りました。それから幾星霜、しかるに未だ、勇者の血は絶えておりません。今宵もまた、竜の翼を射るにふさわしい二人の猛者があらわれました。西門から入場しますは、ここまで怒濤の五連勝、早くも『崩龍^{ほうりゅう}』と異名されております、土術闘士トーラ！」

ユマは空を仰ぎ見た。いつの間にか、西の方が赤らみ、今にも日が沈もうとしている。

観客席から見て、右手から竜機に乗った闘士が登場した。彼もそれなりに人気のある闘士なのだろう。歓声と拍手で出迎えられた。「さて、お待ちせいたしました。剣下に花あり。その美しきは、すなわち妖なるかな。闘花クウ・フェースー！」

クウが手を上げると、会場が大波をかぶった様になった。鼓膜が破れんばかりの歓声だ。

試合が始まった。

第三章「舌禍啾々」(6)

トーラと呼ばれた闘士は、険しい顔つきの、壮年の男だ。頭に冠をつけておらず、胄をかぶっている。紹介された際に、名だけで呼ばれていたので、爵位はないだろう。第一、闘技場という人殺しの場に、貴族がそんなごろごろといるわけがない。クウや、シャナアークスの様な手合いは特殊なのだろう。

トーラの乗る竜機が動くと、地面がわずかに盛り上がった。クウの駆る竜機がそれを踏むと、土が爆ぜた。砂が観客席に飛んだのか、悲鳴が上がった。

「クウは何術士なんだ？」

ユマは闘技場から目をそらさずに、クララヤーナに訊いた。

「はあ？ そんなことも知らないで、よくクウの知り合いっていえるわね」

(確かに……)

ここ数日はシャナアークスの訓練に手一杯で、クウについての情報を得ることを忘れていた。というよりも、術士によって戦法が大きく変わるということを肌で知ったのは、ほんの数時間前であるのだから無理もない。

「空術よ」
くうじゆつ

とクララヤーナが言ったとき、戦況が動いた。

トーラが動き回るたびに、闘技場の土が形を変えて、波打つように凹凸を作った。動きを制限されたクウの竜機の手が落ちた。

(試合の相手がトーラだったら勝ち目がなかったな)

土術闘士が皆、このような戦い方をするのであれば、機動力が売りユマの戦法では歯が立たない。この点、ユマにとってはトーラより格上でも、シャナアークスのように直線的な動きをする相手のほうが戦いやすい。

「空術ってのは何だ。風術とは違うのか？」

アカアから聞いた話では、風術は最も初歩の術であるらしく、ただ風を起こして操るものを言うらしい。同じく大気中の精を用いる火術は、風術より上位におかれている。先の二試合目の剣士は風術士らしいが、彼が剣を手放さなかったように、風術のみでは戦闘に耐えられるものではないらしい。

クラヤーナが咳き込んだ。トーラが巻き上げた砂が口に入ったらしい。

「ちっ……くしょう……最悪だわ。髪にかかったじゃないの！」

トーラがクウの背後に回った。辛うじて旋回したクウは、トーラの体当たりを正面から受け止めた。竜機がぶつかる際に、耳を割くような音が鳴った。

クウの持った槍は普通より少し短い。彼女はそれを器用に使いながら、トーラと距離を置いた。二、三度同じ事を繰り返した後、クウのつけた闘花冠^{リボン}が解けて飛ばされた。

クウの解けた髪が、一瞬、花開いたようになった。

それを見たトーラはクウと大きく距離をとった。すると、会場から拍手が上がった。クウは竜機の上で姿勢をただし、トーラに向かって小さく会釈すると、竜機を降りて落ちた闘花冠を拾ってつけた。
(ここの中でのフェアプレーか)

再び両者が対峙したとき、トーラの魔術なのか、闘技場の中心が大きく盛り上がった。

(接近戦は得意じゃないらしい……)

シャナアークスのような猪突猛進型の闘士と戦ったばかりであるから、ユマにはクウの動きがやや頼りなさげに見えた。ただ、トーラもクウを押し切れないところを見ると、互いに本領発揮はこれくらいのようだ。

クウとトーラは今、にわかに出来た丘を隔てたところにいる。上からは二人の位置が見て取れるが、当の二人は互いに相手の位置を

つかんでいるのだろうか。

案の定、クウの動きが完全に止まった。トーラを迎え撃つつもらしい。これは、彼女がトーラの位置をつかんでいない証拠だ。

一方、トーラはクウの位置がわかるようで、丘をゆっくりと登ってゆく。急降下して一気に勝負をつけるつもりらしい。

ユマは、勝負の行方をはかりかねていた。先ほどから術を使用しているのはトーラだけで、クウのあたりには精の輝きがない。彼女がまだ、術を使っていないということだろう。

トーラの周りの精は、シャナアークスほどに著しくはないが、徐々に力を失っているように見える。彼が丘を登りきったときに、竜機が輝いた。

（やる気だ……）

おびただしい量の魔力（精）が、トーラに集まっている。彼が丘の向こうに消えたとき、凄まじい音がした。

何かが空に飛んだ。

それが、破壊された竜機の破片であると知ったのは、破片が眼前にまで飛んできたからだ。

「危ねえ！」

ユマはとっさにクララヤーナをかばうようにして横に倒れ込んだ。耳元を掠めるように、竜機の破片が落ちた。

「クララ、大丈夫か？」

クララヤーナの安否を確認すると、彼女は随分と興奮した様子で、「気安くクララって呼ぶんじゃないわよ！ あんたなんか愛称で呼ばれると尋麻疹じんましんがでるわ」

と、悪態をついた。よほど怖かったらしい——とユマは苦笑した。「じゃあ、本名で呼んでいいのか？ 正体がばれるぞ」

「せめてクララ様にしなさい。それなら許してあげるわ……っていうか、いつまで人の上に乗ってんのよ。手！ どけなさい。手——！」

クララヤーナが悲鳴を上げたので、ユマは驚いて自分の手元を見

た。彼女の胸元を押し付けていたそれを見て、思わず手を引っ込めた。

全くといってよいほどふくよかさとは無縁なそれは、クララヤーナの歳を考えれば当然だろう。だが、事情とはいえ少女が押し倒されて驚かないはずがなく、それを詫びようと口を開いたところで、みぞおち鳩尾にクララヤーナの足が飛んできた。

「黙れ。喋ったら殺す！」

ユマが立ち上がり、クララヤーナが落ち着きを取り戻した頃、闘技場では、どうやら決着がついたようだ。トーラの竜機に乗り込んだクウが、彼の首元に剣を当てていた。

「……『どはつ弩発』ね。相変わらずえぐい術だわ。でもトーラも運がいいわね。この前の相手なんか、ばらばらになっちゃったのに……」

クララヤーナが凄まじいことを言ったので、ユマは言葉を失った。
(確かに、強烈な術だな)

シャナアークスの火尖は確かに恐ろしかったが、クウの弩発は異質の怖さがある。ユマは、丘を急降下したトーラに対して、クウのとった行動が魔力の流れとともによく見えた。

それは瞬時に行われた。

クウを中心に集められた風精——だとユマは思っている——が、竜機の口に蓄積され、凄まじい勢いで発射された。あるいは、何かの物質が放たれた可能性も高いが、とにかく、彼女の術はシャナアークスと違って離れた相手を狙い撃つという性質たちの悪さがある。しかも、火尖と比べて、威力が隔絶している。シャナアークスが、クウを自分より下に見ているのは、弩発の的にならないという自信があるからだろう。

(それでも、全く勝てないわけじゃない)

弩発は確かにやっかいだが、近づいてさえしまえば、格闘戦において火尖ほどの脅威ではない。あんな強烈な術を至近距離で放てば、クウ自身も無事ではいられないはずだろうから、ユマは、先のシャナアークス戦で試した秘策がクウにも通じるだろうという結論に達

した。それにしても、可愛い顔をして、人間を木っ端微塵に吹き飛ばしたことがあるとは、クウに対して特に悪い印象を持っていなかったユマは、どこか期待を裏切られたように感じた。

ユマは、トーラに剣を突きつけているクウを見た。

（光が散った……）

クウの左手が、目元にかかった前髪をかきあげた時、輝かしい粒が散った。それが汗であるのか、風精であるのか、ユマには判断がつかなかったが、クウが肩で息をしながらどこか遠くを見るような目で剣先を見つめている姿は、えもしれぬ恍惚感（こうこつ）をユマに与えた。

観衆の熱気に包まれた会場の煩（わづ）さは、鼓膜を破らんばかりであるのに、ユマにはクウの息遣いが耳元で聞こえてくるようだった。

クウの肩があがるたびに、ユマは彼女と同じように呼吸をした。

幻覚（まぼろし）だと言い切ってもよいが、ユマはこのとき確かに、クウの匂（か）いを嗅いだ。ユマの脳裏に、無限の空が広がった。

（虚（うそ）しい……のか？）

今、自分が抱いている感情を、ユマは量りかねた。何が虚（うそ）しいのか。それがわからないから、虚（うそ）しいのだろう。あえて言えば、今、目に飛び込んでくるクウという女そのものが、虚（うそ）しい。周囲の人間から賞賛の言葉を投げかけられる彼女が、ユマにはこの世のどこにも繋がっていない、人智（じんち）の蒙（くら）さを突き抜けた先にいるように見えた。クウという女が空気にも似た虚（うそ）に感じられた時、ユマの瞳の中の彼女は、眩（まばゆ）い光に包まれた。

淡い青——母の胸の中にいるような安心を覚えるそれは、時々、他者を拒絶するような冷たく深い彩りに変わる。

（まるで宝石だな……）

ここでユマはひとつの想像をした。

クララヤーナの言ったフェス家の家宝とは、今のクウのようなものを言うのではないか。魔術の奥義だとかではなく、今日にしている輝きそのもの。これは、魔力そのものであることは明白だが、

あるいはそれを形に残す術がフェース家にあつたのではないか。ローファン伯はそれを奪おうとした。そしてフェース家はローファン伯と戦って敗北した結果、家宝と領地を失った。

「なあ、クララ。さっきのフェース家の家宝の話だけど……」

「何よ」

クララヤーナはユマの方を見ない。ユマもまた、クウから視線を外してはいない。

「『盲のエメラルド』っていうのは、失われたのか。ローファン伯に奪われたんじゃないくて？」

「そうよ」

少女の答えはそっけなかった。先に意地悪をして会話を切った事すら忘れていようだ。それもそのはずだ。前の試合と同じであれば、これからがクララヤーナや他の観客にとつての娯楽の時間なのだから。

——こっ！ろっ！せっ！

またか——と、ユマは舌打ちした。ここの連中はよほど刺激に餓えているらしい。

トーラは、既に諦めたように頭を垂れている。

クウが剣を振り上げると、観客席の声が止まった。

ユマは、クララヤーナの顔を見た。彼女の視線も他と同じように、トーラに釘付けになっている。心なしか、小さく笑みを浮かべているようでもある。

「馬鹿野郎が……」

クウはしばらくそのままだった。やがて小さく口を開いた。遺言でも聞いているのだろうか。トーラと数語を交えた後、彼女は剣を持った右手に力を込めた。

だが、クウは中々止めを刺そうとしない。その時——

「迷うなら……殺すな！」

うるさいほどの静寂を壊すようにして、声が上がった。殺意を否

定するその声には、鼓膜を両断するような激しさと、邪気を払わんとする清涼が同居していて、故に、孤独でありながら、それを全くなえりみない強さがあった。

「馬鹿！　ちよつと……何してるのよ」

クララヤーナが焦って口走った言葉ですらが、会場に響いた。

千人にも及ぶ人間の視線が一箇所に集まった。

ユマは、自分の中の何かが逆立つのを感じた。

第三章「舌禍嗽々」(7)

ユマは、自分という人間が、心の芯から震えるのを感じた。千人もの人間にたった一人で相對している感覚は、恐怖や昂り^{たかぶ}といった言葉では言い表せない、嘔吐感にも似た切羽詰ったものに似ている。クウが、顔を上げた。また、彼女の皮膚からあふれ出るようにして、光の粒が落ちた。

「殺して……どうする？」

ユマの静かな叫びは、やがて闘技場に漣^{さざなみ}を起こした。

——何だ、あいつは？

——旅人か？

——誰に向かって話してるんだ？

——クウだろう。さもなけりやあ、狂人さ。

クウは、ユマの言ったことが通じなかったのか、しかし首をかしげることもせずに、じっとこちらを見ている。

「殺してどうするのかと訊いている！」

激昂したような口ぶりでユマが叫んだ。

——闘士の試合に口を出すな！

どこからか声が上がった。それに続く者は、闘技を愚弄するな——とも言う。

やがて、クウが右手にもった剣を降ろすと同時に、周囲のざわめきは止んだ。

「何故、殺すのか。それは、わたしが闘士だからだ。逆に訊^きこう。この者を生かして、どうするのか？」

クウの放った言葉は、ユマの心のどこか、柔らかく、和んでいた場所に、深く突き刺さった。ユマは、頭を鈍器で殴られたような気がした。

そもそも、違^{ちが}うのだ——思想が。

アカアと接することで、薄々感じていたことだ。それが今、眼前

にあらわになった。

殺すことよりも生かすことの方に抵抗を感じる。闘技場とはそういう宿命にある空間であり、あるいは人の精神を熱気とともに平素のそれと隔たれた場所に運ぶという意味では、聖域であるともいえる。

（だが、それでも……違うだろう。お前は！）

ユマは、自分の中で淡い甘さを伴って形作っていたクウの姿が、音を立てて崩壊するのを感じた。

（そいつを殺せば、お前が穢れる）

ユマはそう叫びたかった。だが、何かが喉につつかえたように、それは外界に放たれることはなかった。

――闘え！

ひどく清らかな声が頭の中で響いた。いつの間にかユマの脳内に棲みついたこの声は、人間の闘争を否定しておきながら、しかし今は闘えという。

――あれは豎子の敵じゃ。必ず滅ぼせ！

（クウが……俺の敵だって？）

滅ぼせだとか、闘えだとか、そういうことをユマは主張したいのではない。何故、許すことが出来ないのか。寛大になるという意味ではない。憐れみを持って言いたいわけでもない。それ以前の基本的なこと――それは、人は人間であるということに他ならない。

「ふざけたことを、抜かしやがって！」

ユマの突然の叫びに、傍で見ていたクラヤーナが目を見張った。闘技場の花というべきクウに対して、なんという暴言だろう。下手をすると、会場の観客全員を敵に回しかねない暴挙だ。

満場に怒気が走った。

ユマは、頭の中に浮いてきた言葉を慎重に拾いあげながら、声が震えないように、ゆっくりと、しかし強い声で言った。

「人は死ぬ。必ず死ぬ。それは、人は死すべき生き物だからだ。た

とえ万病に効く薬があつたとしても、人が百年を越えて生きること
はほとんどない。人は、永くは生きられない。生きるといふのは、
死ぬまで生きるといふことだ。見ろ。闘士トーラは、まだ死んでい
ない。なのにお前は、たかが闘技に勝っただけで、彼の命を奪おう
とする。素人の俺から見ても、トーラは見事な闘士だ。試合に赴く
にあたって死を覚悟していないはずがない。また、トーラはお前の
冠が飛ばされた際、既に勝ちを半分手にしていたにもかかわらず、
お前を討たなかった。お前が今、トーラに剣を突きつけているのは、
戦場の礼につけこんで勝利を得たに過ぎない。よく、考えてみる。
お前にトーラを斬る資格があるのか。考えろ。自分が何様なのか。
他人の命をどうこうできるほどに偉いか。はっきり言って、お前
は失望した。そうやって周りの声に振り回された結果、お前は精霊
に見捨てられるんだ」

文明とは、伝播する力を持つ普遍性のことだ。自動車のような物
質を除けば、今のユマが持つ唯一の文明は、恐らく思想であり、そ
れに根付いた倫理だ。ユマが意識せずとも、それはオロ王国の文化
と衝突し、ここ数日で彼をにわか伝道師に仕立て上げた。勿論、本
人にこのような自覚はない。彼にとっては、自分の持つ普遍性――
あるいは価値観を周囲に広めることが、己の生存に密着した問題で
あり、それが切実な声となって外界に放たれた。

ユマは、自分で言った精霊という言葉を、完全に理解しているわ
けではない。ただ、先ほどのクラヤーナとの会話から得た感覚を、
そのまま言葉に出したに過ぎない。

だが、観衆はユマの言葉を理解しない。

――とぼけたことを言う。

命の大切さなど、あえて言葉にしなくとも、わかりきったことだ。
彼らにとって闘技場はその唯一の例外と言ってよく、あえて言えば、
闘士の死は、観る者の心を満たし、生きる原動力となる。人の強さ
を端的にあらわすのは、闘争が最たるものであり、それは周囲の人
間に迸るような激しい感情を流し込む。この点、男は履き違えてい

る。

「無知」

というのが、観衆がユマに対して下した結論だった。

それらが罵声となってあらわれ始めた頃、一人の男が動いた。

トーラである。

突然、立ち上がろうとしたトーラに気づいたクウは、慌てて剣を彼の首に押し当てた。トーラは反抗の意思がないことをあらわすためか、中腰のまま、ユマを見た。

一点のよどみもない、澄んだ目がそこにあった。

（ああ、この人は死ぬなあ……）

トーラと目が合ったとき、ユマは巨大な岩壁を思い浮かべた。限りなく大きいのに、触れれば崩れ去ってしまうほどに薄い。それは、トーラの肉体は確かにまだ生きているが、彼の中では、既にトーラという闘士が死んでいることを意味していた。

風が吹いた。いや、闘士が入場する門にかけられた旗は、揺れていないから、風が吹いたとしても、微風だろう。だが、人々を頬を刺す様な何かが、確かにその場を駆け抜けていった。

トーラは眼前に突き出された剣に体重をあずけ、自らの首をかき斬った。花火のように散った鮮血が、クウの太腿を濡らした。

（見事だ……）

トーラは無言で死んだ。ユマに対して、一切の言葉を捨てた彼の視線に全てがこもっていた。

ユマの目から見れば、今の試合には不公平があった。トーラにとって最大の勝機は、クウが弩発を使う前に接近した時しかなく、彼女が闘花冠^{リボン}を落としたがために、トーラは身を引き、みすみすそれを逃した。だが、クウはトーラの礼に対して一切を報いることなく、再び彼を近づける前に勝利をもぎ取った。クウが本当に誇り高い闘士ならば、あえてトーラを接近させて、冠を正す（正確にはリボンをつける）機会をくれた彼に報いるべきではないのか。クウにそこ

までの余裕がなかったといえ、それは言い訳だろう。もつと言え、クウは試合には勝ったが、トーラには負けた——ともユマは思った。彼を殺さなければ、クウは借りを返したことになるのではないか。

それだけに、トーラが一切の不満を口にせず、自らの命を散らしたところに、ユマは彼の寂しさと、気高さを感じた。トーラが無言で死んだということは、実はこの試合の本当の勝者は自分であるという、クウに対する痛烈な非難であることに、何故、他の者は気づかないのか。

だが、ユマは同時に、トーラの死を美しいと感じた自分を嫌悪した。人を殺すなど言っておきながら、自刎^{じふん}したトーラに敬意を覚える資格が、自分にあるのか——と。

「闘技を穢す者よ。去れ！」

クウの一言で、全てが終わった。

ユマは力なくその場に立ち尽くした。腹の底から沸々と怒りが湧いてきたが、それを言葉に出せば、トーラの死が穢れる。

ユマの口出しに腹立ちを覚えた観衆の何人かは、罵声を浴びせてかけてきた。だが、それは彼の耳に届かない。

目頭が熱くなった。

（何故、泣く？）

自分自身に問うた。全く知らぬといってよいトーラの死に泣くほど、自分は情け深い人間なのか。そんなわけがない。悔しいのだ。クウに言い負かされたことより、トーラがユマの思想を拒んだことより、当然なことを言っている自分が滑稽であるという事実が、何よりも悔しい。

「はは、こいつ。泣いてやがる」

観衆の一人がユマをあざ笑った。ユマは、傍にいたはずのクララヤーナを捜したが、既にいなかった。

（この期に及んで、あんな餓鬼にまでするか……）

ふっ——と、力のない笑いが出た。アカアが今の自分を見れば失

望するだろう。一瞬、リンの顔が浮かんだが、すぐに打ち消した。

——去れ。去れ！

場内がユマを締め出そうとする意思を持った。観衆はユマの背を叩き、腕を引っ張り、彼を闘技場の外に放り出した。

（俺は、何をしたかったのか！）

闘技場の鉄の掟は、人間の欲望にそっているだけに、ユマの言葉よりも遥かに人々を説得する力を持っている。ユマは、自分が浅はかな人間であると決め付けられた悔しさを拭えない。間違ったことをしたとは思っていないからこそ、己の卑小さが何よりも悔しい。

また、闘技場で歓声が上がった。ユマはそれを背で聞いていたが、観衆がクウを呼ぶ声を聞いたとき、

（クウに、会わなきゃ……）

と、彼女に身の危険を伝えるという、当初の目的を思い出した。

だが同時に、今起こったことから立ち直れないまま、どの面を下げて彼女に会いに行けるのだろうか、気が重くなるのを感じた。

（会いたくない……会えない）

まるで地面に這^はいつくばったユマを圧殺するかのように、空は淀んだ泉のような色で広がった。

第三章「舌禍啾々」(8)

「あなた、馬鹿じゃないの？」

と、背後からユマに声をかけた人物がいた。

ユマは、膝元についた砂を振り払いながら立ち上がると、振り返らずに応えた。気配が一人でないのは、彼女が最初に連れていた娘たちと合流したのだろう。

「クララか……まだいたのか？」

「まだいたのか——じゃねえよ。あなた、私刑にされてもおかしくなかったのよ。無傷で出られただけでも奇跡だわ。あの場でクウがもう一言足してれば、確実に死んでたわ。彼女に感謝することね」

ユマは小さく嗤った。

(これで無傷ねえ……)

ユマの羽織る黒マントは土の上に這いつくばったせいで汚れており、また闘技場を出る際に観客の何人かがどさくさに紛れて殴ってきた——蹴られもしたが——ため、体中に夜気がしみる。

「誰が、感謝なんてするかよ」

ユマは吐き捨てた。声色に怒気は見えず、かえって不気味なほどに静かだったことに、クララヤーナは気圧された。強気な言動が目立つが、彼女はまだ、十三歳の少女なのだ。

「クララ！」

と、突然、ユマが振り向いたとき、クララヤーナは一瞬だけ肩を震わせた。

「な、何よ？」

クララヤーナはこの時、初めてユマの目を見た。まっすぐに自分を見据えているが、覇気がなく、暗く淀んでいる。シェンビイ公も、クララヤーナにとっては義兄にあたる彼の息子たちも、その他の貴族たちも、このような目をするのではない。あえて探せば、奴隷が自分を見上げるときの目に似ているが、ユマのそれには相手に怖気

を感じさせるような鋭さがあつた。クララヤーナは生まれてからこのかた、このような不気味な眼光にさらされたことはない。ユマの視線は、自分の纏う虚飾を全て剥ぎ取ってしまうかのように乱暴であり、しかしその目はクララヤーナという少女を見ていながら、その像をとらえていない。クララヤーナは自分の裸体を見られているような気分になった。言い換えれば、今のユマが気持ち悪い。気持ち悪いが、目を逸らすことが出来ない。

「クウに伝えて欲しいことがある」

ユマの目が、実は自分ではなくクウを見ていたことに気づいたクララヤーナは、小さな安堵を覚えるとともに、何かが虚しくなった。「負け惜しみを言うつもりなら、自分でしなさい。わたしを使い走ろうなんて、百年早いだよ」

クララヤーナは、自分の声が上ずるのを必死にこらえた。このような下郎に気圧されるなど、公女の誇りが許さない。

「今日は道を変えて帰れ——と、伝えろ。従者には言わずに、必ず本人に伝えろ」

ユマはそれだけ言うと、その場を去ろうとした。

「何よ……何様、あの男……」

有無を言わせぬユマの命令に、クララヤーナは顔を蒼くした。

「クララ様、狂人のいうことなど、信じずとも良いのです……」

連れの一人が、なだめるような口調で言うと、

「そうね……そうよね……」

と、クララヤーナは何度も頷いた。

——ふざけるな、下郎！

彼女がそう叫ぼうとした時、自分の視界の影から、ユマに向かって飛び出した者がいた。先ほど、ユマとクララヤーナの口論の際に、クララヤーナに肘打ちをあびせられた娘だ。

彼女は去ってゆくユマに走りよると、彼から与えられたハンカチを差し出した。

「あの、これ……洗っておきましたから。先ほどは、ありがとうございます」

ございました」

娘の口元が青く腫れ上がっている。

ユマに走り寄った娘を冷めた目で見ていた者がいる。

自分の意を通さずにユマに走りよった娘を、クララヤーナが許すはずがない。そう思ったもう一人の娘は、クララヤーナの思考を先回りして、裏切り者を責めた。

「貴い血筋は互いを呼び寄せる――とは本当らしいですわ。家格の低い娘は、あのような下賤な男がお似合いでしょう？」

それを聞いたクララヤーナは口元を歪めた。だがすぐに口をへの字に曲げると、無言でユマとは反対の方向に歩き出した。

ユマはハンカチを差し出した娘の頬を見た。

「まだ腫れているな。もう少し冷やしてな……」

ユマはそういうと、ハンカチを受け取らずに、歩き去った。娘はユマの背中に向かって小さく会釈をすると、小走りでクララヤーナの後を追った。

闘技場の南にある表門から放り出されたので、街の北にあるローファン伯爵邸に帰るためには、闘技場を半周しなければならない。

ユマは、もうヌルを捜そうとしなかった。あれだけの騒ぎを起こしたのなら、嫌でも自分のことに気づくはずだ。だが、一向にヌルの姿が見えないということは、彼が闘技場にいなかったことに他ならない。前日の、ローファン伯の密談の内容と照らし合わせても、ヌルの動きが怪しいのは確実だ。

（あの餓鬼に任せてよかったのか？）

肝心なことを他人任せにしてしまった自分は、浅はかなことをしたのではないかという問いが心に浮かんだが、考えてみれば、クウが対戦相手のユマと二人きりになるというのは、周囲に無用の誤解を与えることになりかねない。ともすれば、クウに近いクララヤーナに伝言を頼んだことは、あながち間違ってもいまい――と、思い直した。

ふと、眼前に数人の人影があった。まだ、ユマは闘技場の外周を回っている途中だった。

荷車があり、その上に横たわる人があった。暗さの中でもはっきりとわかるほどに、赤い血で染められた死体だ。

（トーラだ……）

そう思ったとき、ユマは、荷車を押す一人の男と目が合った。キダだ。

（キダに死体掃除をさせたのか……）

ユマは、全身が怒りで震えるのを感じた。キダも、先ほどのユマの姿を見ていたのだろう。彼は黒いマントに身を包んだ男が誰なのか、すぐに気づいたようだった。ユマの名を呼ばなかったのは、周囲をはばかったのことだろう。

「どこへ連れて行くんだ？」

ユマは、キダに問うた。

「向こうに丘がある。闘士の死体はそこに埋められる」

キダは東に淡く見える盛り上がった地形を、顎で指した。

「家族の元には返さないのか？」

ユマが驚いたように問うと、この集団を指揮していたらしい男が口を挟んできた。

「そんなものがある奴は、闘士になんかならんさ。こいつは南から上ってきたらしいが、今となっては、故郷がどこかもわからん」

ユマは黙ったまま、その集団について行った。十分ほど歩いたところで、丘に着いた。もはや炬火^{きよか}なしでは足元が見えない。

（見事な男だったな……）

と、キダに語りかけるつもりでユマが彼を見ると、キダはユマの言葉をかき消すようにして言った。

「黙って死んだ男だ。黙って見送ってやろう」

彼の言うことがもっともだと思ったユマは、喉元まで出かかった言葉を飲み込み、鋤^{すき}を借りて穴を掘り、トーラに土をかぶせた。

埋葬を終えて、男たちが帰ろうとすると、ユマだけがその場を動

かなかった。訝ったキダが、

「どうした。こんなところに一人でいたら、迷子になるぞ」

と、あたりの暗さを気にしたように言うと、ユマはそれには答えず、黙って両手をへの字に合わせた。この国の人間が祈るときにする仕草だ。

他の男たちも、ユマがトーラの魂に祈りをささげているのを見ると、互いに顔をあわせたが、やがてユマの意を察したキダが彼に倣うと、男たちは次々と無言で鋤をおろし、オロ王国流の合掌をした。夜空に矢が立った。

第三章「舌禍啾々」(9)

ユマにハンカチを返そうとした娘は、クララヤーナに追いついたが、自分が常に立っていた位置に他の娘がいて、冷言をあびせられた。

「まあ、あの男と一緒に行かなかったの？」

仲間の一人が娘に向かって意地悪く言うのと、娘は口元の痣あざを氣にもとめぬはきはきとした口調で、

「クウ様にさっきのことを伝えるべきですわ。あの殿方のおっしゃったことが妄言であるようには思えません」

と、クララヤーナに向かって言った。もう一度、肘打ちが飛んでくるかもしれないと思っただが、娘はそれを恐れずに言った。

(妄言じゃない？ はっ！)

クララヤーナは鼻で笑った。先ほど、闘技場であの男が口にしたことがすでに妄言ではないか。この娘は少し優しくされたからといって、あの男を好きになってしまうほどに浅はかな女だったのか。それに、男に布切れ——ユマが持っていたハンカチが上品な青色で染められていたのがクララヤーナには意外だったが——を返しにいった時点で、この娘は先ほどのクララヤーナの行為を批判したことになり、そんな者が自分を指図するという事実が、不快だった。

だが、それとは裏腹に、クララヤーナは男が、実は凄まじいことを言っている事実に気づいた。道を変えて帰れということは、いつもとる道では駄目だということだ。何故、駄目なのか。問うまでもない。危険だからだ。彼は、クウの命が今、何者かに狙われているという情報をつかんだのではないか。従者には言わずに——というのは、クウの身边に裏切り者がいることを暗に意味しているのではないか。

(馬鹿らしい……)

男が先の腹いせにクウをからかおうとしているのだ——と決断し

たがる自分がいる一方、彼の突き刺すような視線を思い出すと、とても嘘を言っているようには見えない。

「クウに会いに行くわ。あなたたちは、先に帰ってなさい」

クララヤーナがそう言うのと、娘たちは声を上げて驚いた。頬に痣を浮かべた娘だけが、手に持ったハンカチをきゅつと握り締めた。

歓声に送られて闘技場から出てきたクウは、場内とはうってかわって沈鬱な表情をしていた。

クウは完勝した。揺れ動く地面に足をとられ、トーラに接近を許すなど、多少は危ない場面もあったが、それでも決定的な不利に陥らずに勝利したことを確信している。

だが、それを一人の男がぶち壊しにした。

黒マントに身を包んだ男は、長々と理屈を垂れて、トーラの首を刎ねる非をとねえたが、クウにしてみれば何てことはない。

（ただの世間知らずだ）

男は人の死を否定した。闘士は負ければ首を刎ねられる。だが、それは一方的な死ではなく、一流の闘士ならば誰でも従容として迎えられる類のものだ。勿論、例外もある。試合が大いに盛り上げられ、観客はそれに満足し、敗者の死を望まなくなる。それは、試合を行った者にとって誉れであり、高等な術を操る貴族出身の闘士に多く見られる。

観客がトーラの死を望んだということは、確かにクウにとっては至らぬ試合をしたという後ろめたさがあるが、闘士は観客の意向に逆らえない。それは、闘技が見世物である以前に、対峙する二人の闘士が民衆に供される供物であるからだ。闘技場は一種の神殿と言っている。観客が試合に不満を持ち、勝者にも死を望むことがあれば、勝者であっても死を免れない。

クウはトーラを殺すことに何の疑問も持たなかった。だが、黒マントの男が言ったことは、いわゆる試合に難癖をつけたのであり、全力で戦ったクウにとっては侮辱以外の何ものでもない。

（自分ひとり、涼しいところにいて、何を言うのよ……）

男は闘技場に立っていない。闘士ではない。自らの命を剣刃の危うさにさらさずに、ぬけぬけと長者ぶったことを言ったのが、クウには我慢できない。クウには彼が、自分の命を惜しむだけの卑怯者に見えた。試合に異存があるなら、自ら闘士と同じ位置に立って言うべきではないのか。いつでも竜機に踏み殺される位置に、いつでも首を刎ねられる位置に、自らを置いて、彼は同じ事を言えるのだろうか。そうでなければ、たとえ人命を惜しむという理屈が通っていたとしても、あの男の言ったことは、偽善でしかない。底の浅い偽善が悪よりも憎まれること甚だしいのは、どこの国でも同じだろう。

黒マントの言うことはクウをいらだたせたが、彼女をもっと悩ませる男がいた。

クウは、勝負が決したとき、自分より数段腕の劣るトーラが、思ったより善戦したことを褒めた。

「良い試合だった」

クウは、敗者に情をかける女ではない。彼女が心の底からそう思ったからこそ、彼を賞賛する言葉が純粹に口から出た。卑賤の出であるにもかかわらず、闘士の礼儀を見せたトーラに好意を覚えたのは確かだ。

だが、トーラはクウの賛辞を蹴り飛ばすように口を開いた。

「いちいち、騒がしい女だ……」

トーラは鼻で笑った。

それを聞いたクウは耳を疑った。騒がしい――とは何だろう。闘技場に立つクウは、沈毅そのものであり、このように言われるのは心外だ。確かにクウを応援する観客の声援は耳を裂くようにうるさいが、それを騒がしいというのは、いささか大人気なくはないか。

――運良く勝ったくらいで、小娘が得意げに喋るな。

と、トーラに言われた気がしたクウは、不快になった。では、運悪く小娘に負けたトーラは何なのだと言いたい。

クウが迷っているときに、黒マントが声を上げた。彼の言ったことはそれなりに理屈は通っていても、闘技場という場にそぐわないものばかりだったが、

——戦場の礼につけこんで勝利を得たに過ぎない。

といわれたとき、クウは心中で叫んだ。

（それは、屁理屈よ！）

たとえ、あのまま冠を落とさずに戦っていても、クウは自分が勝っていたという自信がある。だが、黒マントはそう見なかった。

このことが、試合が終わってからずっと、クウの頭にもたげている。

クウが馬車に乗り込もうとしていたところに、一人の少女が現れた。

「クララ……やっぱり、来てたのね」

クララヤーナは小さくはにかんだ。だが、クウは疲れた微笑で返しただけだった。

「あら、ばれてたのかしら？」

「観客席にどこかで見たような顔があったと思ったけど……あまり屋敷を抜け出すと、実家に帰らされるわよ」

「いいわ。あんな家にも、何も面白くないわ。クウの傍にいた頃が、一番良かった。それより、送って行ってよ」

「何よ。自分の馬車があるでしょう」

「話したいことがあるの。ねえ、いいでしょう？」

クウは、クララヤーナに甘いわけではない。手のつけられない腕白お嬢様に、家格を気にせずに向かって説教を出来るのはクウくらいのものだ。だからというわけでもないが、穴姫とまであだ名されるクララヤーナも、彼女の言うことだけはよくきく。

「クウ様、そろそろ行きませんか……」

御者席に座った男が言った。この場にホルオースはいない。

「いいわ、今回だけよ」

クウとともに馬車に乗り込んだクララヤーナは、馬車が出るとすぐに、

「クウ……あなた、狙われてるらしいわよ。だから、先にわたしの家に行つて。何人か人数をつけてあげるから、それから帰りなさい」と、クウの耳元で囁いた。

クウが驚いた顔をする、クララヤーナは口元に指を立てて、沈黙を促した。どこか楽しげであるのは、気のせいだろうか。だが、彼女が黒マントの男から伝言をあずかってきたことを知って、クウはこれがクララヤーナのいたずらである可能性を消した。もとより、クララヤーナはクウにだけはそのような悪意を向けたことがないから、クウも初めから彼女を信じなかったわけではない。自分の命が狙われているというのは、それほどに唐突な話だった。

――今夜は道を変えて帰れ。

クララヤーナは、ユマの伝言をそのままクウに伝えた。クウは鈍感な方ではない。すぐさま察し、御者にシェンビィ公爵邸に向かうように指示した。ただし、フェース、シェンビィの両家は「リ」の街に邸宅があり、途中まで行く道は同じである。そこで待ち伏せをされていたらクララヤーナがここに来た意味がない。

「その前に、精霊台に寄りなさい」

精霊台に向かえば、闘技場から大きく北に迂回して帰ることになる。それだと時間がかかりすぎることを御者が言う、と、

「ああん？」

と、クララヤーナは怒気をこめた声を張り上げ、窓から足を出して御者の頭を蹴った。演技であるというよりも、自分に口答えをした御者に怒ったのは半ば本心だった。彼女は幼い頃、クウと同じ家で育ったが、その家の家臣を平気で惨く扱^{むじ}うのは、裏を返せば、それほどにクララヤーナの幼年期が暗く、辛いものであったことを意味している。

「わたしは精霊台に行きたいのよ。何、文句あるの？ 行けって言ったら、行け。この役立たず！」

馬車が大きくよれた。

転倒して座席に頭をぶつけたクラヤーナは更に怒った。御者が馬車から転げ落ちそうになったが、クウはそれをとめることもせず、気だるげに窓の外に広がる景色を見ていた。

第三章「舌禍啾々」(10)

ヌルとはぐれてしまったユマは、王都の夜道を歩くのが初めてであるものの、これまで闘技場とローファン伯爵邸の間を何度も往復しており、特に道に迷うこともなく帰途に着いた。

やがて、見覚えのある景色が広がった。

閑散とした住居は、わずかに人の営みを感じさせるが、昼には市の立っている場所だ。

(エイミーは箒ほうきを買えたかな?)

と、ユマは銀髪の美少年のことを思い出した。この場で彼と出会ったからだ。

よくよく考えてみると、エイミーがガオリ侯爵家の者であるという証拠はない。それにも関わらず、ユマは彼に大金を貸し与えた。ユマはあの時、無条件でエイミーを信じたが、後から思い返してみると、自分の軽薄さは異常であることに気づいた。まるでエイミーに魅せられたようで、今になって自分の正気を疑った。

ユマの目が、小走りする男を捉えた。

特に何も考えずにその者を目で追ってみたところ、ユマは思わず声を上げそうになった。

ホルオースだ。ユマのように黒マントを羽織っていて、フードをかぶっているが、口元の髭がユマのよく知るものだった。

急いでいるようにも見えず、とはいえ何やら口元から張り詰めた空気が漂ってくる。

ユマがホルオースを追おうと一步を踏み出したとき、

——やめよ、豎子まじこ。

と、心中で声が響いた。

ユマはその声を無視した。クウの傍にいたべきであるホルオースが、今ここで何をしているのか。ユマが不吉を感じたのは、彼が既

にクウを殺したのではないかという予感からだった。

ふと、街道を行く馬車に気が付いた。護衛の者が小走りで寄って来て、

「無礼だぞ。道をあけよ！」

と、高慢な口調で言い放った。ユマはホルオースを目で追いつつ、馬車に道を譲った。馬車が通り過ぎると、ユマは小走りでホルオースの後を追った。

ユマが見失う寸前のところで、ホルオースは人気の少ない路地に入った。ユマは彼に五十歩ほど遅れてそこに入った。

暗い、何やら湿り気さえ漂う裏道だ。

尾行する内に、ユマはホルオースの影を見失った。曲がりくねった道だから、当然と言えばそうだろう。

ホルオースを捜して小道をさまよう内に、ふと夜光をはじく様な銀色が目に飛び込んできた。

「エイミー！」

ユマは、思わず、突然視界に入ってきた人影に声をかけた。エイミーは驚いたように立ち止まり、首を傾げつつ、じっとユマを見ていた。

（そんなに、おぼえにくい顔か……）

と、ユマは苦笑した。エイミーは、よほど他人に興味をもてない性質なのだろう。

「あっ！」

自分を呼び止めた人物が誰であるのか、ようやく理解したらしい。エイミーは走り寄ると、いきなりユマの手をつかみ、

「箒……買えた」

と、はしゃぐように言った。こぼれるような笑顔とはこのことを言うのだろうか。無表情なエイミーしか知らないユマは、エイミーが弾ける様に喜んでいるのを見て、驚きとともに、自分のやったことへの多少の満足を覚えた。いきさつはよくわからないが、箒を買い付けることはエイミーにとって死活問題だったらしい。

「それは良かった」

何故、エイミーがこんなところにいるのか、その疑問を口にするのを避けるようにして、

「じゃあね……」

と、エイミーは一言だけ置き捨てると、すぐさまこの場から走り去った。

「あっ！お……おい」

ユマが振り返ると、長い路地であるのに既にエイミーの姿がなかった。エイミーの代わりに、鼻を鈍く突くような臭いだけがその場に残った。

（何だ。これは？）

不愉快な臭い——エイミーのものとは到底思えない殺伐とした空気がだ。

（嫌な予感がする……）

ユマの直感はそう言っていた。ホルオースを追おうとしたときも、心中の声はユマを止めた。予感というのは時に、人の行動に干渉するほどの力を持つものだが、今のユマは予感より理性が勝った。

突然現れ、突然消えたエイミーに多少混乱したユマだったが、ホルオースを尾行するという本来の目的を思い出し、再び歩み始めた。

歩き続けるうちに、周囲が突然騒がしくなった。やがて、道の向こう側にいくつかの灯りが見えた。何やら怒号のようなものさえ聞こえてきて、尋常な空気ではない。

ユマは、胸騒ぎがした。これは予感の類ではなく、現実が起こっていることから推測したものだから、遅すぎると思うべきだろう。ユマは、自分の尾行がホルオースにばれたのだと思った。

彼は灯りを避けるようにして、大きな道に出た。人ごみに紛れればそれほど安全な場所はない。だが、日が落ちれば家の外を歩くものは多くなく、ユマはより広い暗黒の中に飛び出たに過ぎなかった。

灯りが近づいてくる。ユマは走り出した。

何度も振り返りながら走ったため、足元がおぼつかず、何かの拍子に躓^{つまず}いて転倒した。

「痛っ！」

すりむいた肘から、血が滲んでこないか心配だったが、ユマが足元に転がっている何かに目を移したとき、体が凍ったように動けなくなった。

死体である。

一瞬、クウのそれを想像したユマだったが、死体をよく見てみると、男であり、高価そうな衣服を着ている。更には頭に冠をつけていることから、この死体は貴族であることがわかる。胸元に血が滲んでおり、恐らく刺殺されたのだろう。

ユマは、自分の予想が大きく外れたことを心のどこかで喜んだ。ホルオースはクウを殺そうとしていたわけではなさそうだ。となると、表ではヤム家と対立するフェス家が、外から見えないところで関係を持つようになっていることになる。そこがユマにはわかりにくい。

「ホルオースめ……」

彼は一体何をしているのか――と、ユマが混乱した頭を整理しようとし始めたところで、眼前の道からおびただしい炬火があらわれた。ユマはたちまちにその者たちに囲まれた。よくみると、先ほどうれ違った馬車の護衛たちだ。

（これは、もしかすると最悪なんじゃないか？）

ユマは心中でとぼけた台詞を吐いた。

第三章「舌禍啾々」(11)

ユマのような小心者が、このような状況で取り乱さずにいるのはどういいうわけだろう。

どこかの屋敷の地下の薄暗い部屋に、彼はいる。部屋というより牢獄といったほうが正しい。ユマは衣服を剥がされ、手足には枷^{かせ}がはめられ、目の前のいかめしい男は鞭を片手に口の端を曲げている。あたりを見ると、見たこともない珍妙な機器が並んでいる。どうみても拷問に用いられる類のものだ。ユマがこれを見て顔を蒼くしたのは言うまでもない。彼は取り乱さなかったというより、自分の置かれた状況を信じられなかったというのが正しい。今でも心のどこかで、これは夢なのではないかと思っている。

「誰の指図でやった？ 言え！」

と、男は鞭でユマを打ち付けた。

「言うも何も、俺はたまたまあの場に居合わせたただけだ」

「嘘をつけ！」

再び激しい痛みがユマを襲った。皮膚が裂けるような痛みとともに、意識が飛びそうになる。あと、二、三回も打たれば自分は失神するのではないか。

「嘘じゃない。俺はローファン伯の客人のユマだ。闘技場でクウの試合を観て帰ったおりに、道端であの男が死んでいるのを見つけた。それだけだ」

「ローファン伯だと？」

それみたことか——と、ユマは得意気な顔をした。だが、彼は先にフェパス家に対してローファン伯の名を出したことで大失敗した教訓を、ここで生かさなかつた。生かしたところで、どうしようもない状況ではあったが。

「思い出したぞ。ヤム家の子犬が、闘花に喧嘩を売ったとかいうが、それがお前か？」

繰り返すが、ヤムというのはローファン伯爵家の姓だ。

「察しがいいと、話が早くて良い。さあ、ローファン伯が怒る前にこれを外せ」

ユマは、そこまで言った後、違和感を感じた。目の前の男から嘲笑にも似た声が聞こえた。

「主よ。この者は本当に無関係かもしれませんが」

男は横を向いた。その先に一人の男が椅子に座っている。

衣服から見ても、貴人だろう。この家の主だろうか。

先の死体より遥かにきらびやかな衣服だ。何より特徴的なのは黄金色の冠で、ローファン伯のつける二位冠よりも遥かに重厚にみえる。

貴人の背は高く、ローファン伯ほど体軀に恵まれていないが、鋭い目元に引き締まった顔つきをしている。峻厳であると言ってもよいほどに威がある。髪の色はやや茶を帯びていて、流れるように潤っているのは、貴人が身だしなみに気を使っているのだろう。貴族であれば当然だろうが。

「さて、どうであろう。この者が本当に刺客であれば、ローファン伯はよほどの間抜けといふべきだが、あの男がそんな軽佻なことをするか。しかし、さて……」

貴人は薄ら笑いを浮かべた。声は決して低くはないが、腹に響くような強さがある。それはユマに悪寒を感じさせた。

「誰だ、あんたは？」

ユマは気圧されるのを拒絶するようにして言い放った。

鞭が飛んできた。

（ヤバイ、思ったよりずっと痛え）

シャナアークスに散々鞭で叩かれたが、彼女が随分と加減していたことに気づいたユマが、呻きとともにそんなことを思っていると、貴人が目で鞭を持った男を制した。

「おい、かびひげ黴髭」

鞭の男はユマのことをそう呼んだ。うつすらと生えたユマの髭をみて、黴のようだと言ったのだろう。

「こともあるように、シェンビィ公爵さまに向かって、その口利きは何だ？」

と、男は鞭の柄で、ユマの顎を突き上げた。

（シェンビィ公爵……）

なるほど——と、ユマは思った。道で死んでいたのはシェンビィ公の身内だろう。その犯人と疑われているのが自分で、しかもシェンビィ公と対立しているガオリ侯に近しいローファン伯の名を出したので、彼らは驚いたのだろう。

同時にユマは、

（助かる）

とも思った。彼はクララーナのことを思い出した。闘技場で彼女と会ったことが、アリバイにはならないだろうか。シェンビィ公爵の家人を殺すともなれば、よほど綿密に計画すべきことで、刺客は昼夜標的を監視するものだから、ユマが闘技場で起こした事件を知れば、彼が暗殺者であるということが不自然になる。自分がただの闖入者であることをこの者たちにわからせれば、それで自分の無実を立証できるのではないか。

それにいざとなれば、ホルオースの名を出す覚悟がユマにはある。ユマは心中で、暗殺者はホルオースであると断定しており、彼がローファン伯に取り入ってフェース家を売り渡す魂胆であると知れば、シェンビィ公も心中穏やかではないだろう。だが、それを言えば、ユマはローファン伯の陰謀をさらけ出すことになり、それは自分を拾ってくれたアカアへの恩を仇で返すに等しい。ホルオースの名を出すのは最後の手段だ。

ユマはまず、クララーナの名を出した。すると、案の定、シェンビィ公の顔色が変わった。

（脈がある）

と、ユマは内心安堵の息をついた。これ以上、鞭で叩かれれば自

分がどんな醜態をさらすかわからない。

「クララヤーナに会ったということは、貴様の標的が最初は我が娘であったということだ。衆目をはばかり、娘の暗殺を諦めた貴様は、第二の標的として我が家臣を殺した。違うか？」

ユマは耳を疑った。どこをどうとればそのような曲解が出来るのだろう。猛然と反論しようとしたユマが、シェンビイ公の目を見たとき、凍えるような冷たい眼光にさらされた。

（あ、そうか……）

ユマは、身の毛もよだつような想像をしている自分を、どこか冷めた目で見ていた。

シェンビイ公にとって、ユマが彼の家臣を暗殺したかどうかは実はどうでもよく、彼にとって重要なのは、ローファン伯爵家の者が——もつと言え、ガオリ侯の勢力下にある者が、暴挙に走ったという事実があればそれでよいということだ。先のユマの発言は、シェンビイ公にとって好餌こうじでしかない。シェンビイ公は家臣の死を利用して、ガオリ侯を粛清しようとしている。ユマはまた、自ら進んで政争の道具となってしまうた。

（俺ほどの間抜けが、この世に二人というか）

ユマは自分の思慮の浅さと、運の悪さを呪った。先に心中の声が言ったように、やめておけばよかったと、猛烈に後悔した。

「試合が終わるまでに自白させよ。多少、強引に責めてもかまわぬが、決して殺すな」

シェンビイ公はそれだけ言い残すと、その場から去ろうとした。ユマにはそれが、この世との永訣えいけつであるような気がした。このままシェンビイ公が去れば、彼は二度と自分の前には現れない。これより先で自分を待っているのは地獄の責め苦であり、理不尽極まりない冤罪であり、そんな中で自分が死んでゆくのは耐えられない。

ローファン伯はユマがシェンビイ公に監禁された事実を早々と知るだろうが、まさかユマに陰謀の一端をつかまれているとは思って

いない彼は、わざわざこの遠来の客人を救出しようとは思わないだろう。

ユマがローファン伯でも、必ず今のユマを見殺しにする。彼にとってユマは客人に過ぎず、身内ではないから、何とでも白を切れる。ただ、世間はそう見ない。このままユマが処罰されれば、世間はシエンビイ公に同情し、卑劣な暗殺を企てたローファン伯を憎むかもしれない。

さらに自分の死後に、罪を問われたローファン伯爵家が滅ぼされるかもしれない。そうなれば、アカアも死ぬ。ユマは下劣な策謀をめぐらせたヌルやローファン伯がどうなるうが興味ないが、リンや、リュウや、ホウが、自分の軽薄な行動のせいで連座させられるとしたら、今にもその罪惡に心が潰れてしまいそうになる。

「待て！ あの場にいた奴が他にもいる。そいつに不審を感じて追う内に、俺は道に迷った」

ここまで来れば、もうホルオースの名を出すしかない。ここでホルオースの名を出すことで、ローファン伯爵家が助かるわけではない。ホルオースに罪を着せて助かるとすれば、ユマ一人だ。だが、それを行えば、ユマはローファン伯爵家を売ったことになる。

シエンビイ公はユマを拷問して自白を強要するように言いつけたが、逆に言えば、ローファン伯に罪を着せるためには、ユマの自白が必要ということだ。ユマが拷問に耐え抜けば、それも出来るかもしれないが、残念ながらユマにはその自信はない。

（アカア……許してくれ）

事態は、もはやユマ一人の手に負えない大事に発展している。そんな中でユマが出来ることといえば、自分の命を守るくらいしかない。最悪の事態になれば、シエンビイ公にアカアの助命を懇願するしかない。シエンビイ公が駄目ならクラヤーナを説くつもりだが、彼女は元はフェス家の娘であり、家臣の暗殺にフェス家が関わっていたと知れば、シエンビイ公はクラヤーナの言葉に耳を傾けないかもしれない。アカアの命運に関しては、既にユマの手に余る

と思ったほうがよい。ユマにとっては、それがどうしようもなく、情けなく、そして悲しい。運良く生き延びれば、ローファン伯爵家が激烈な政争の渦と化す前に、アカアを連れて逃げようと思った。その前に自分が殺されれば、己の不運を嘆くしかない。

シェンビィ公が立ち止まった。ユマの話に興味を抱いたというところだろう。

「ほう、続ける」

ユマは藁わらをつかむ思いで、口を開いた。自分が助かるためには、真実を言うしかない。

——貴方の家臣を殺したのは、フェス家のホルオースだ。

と、言おうとしたとき、舌に強烈な苦味を感じた。それは次第に痺しびれとなり、ユマから声を奪った。

「あ……くっ……」

ユマは、今起こっていることが理解できない。

舌が思い通りに動かない。それを言葉に詰まったと解釈したシェンビィ公は、

「ふん、でまかせか……」

と、言い捨て、その場を去った。

（俺は、死ぬのか。アカアや、リンや、リュウたちを巻き添えにして……俺は、何だったんだ。災難をふりまくためだけに王都に来たのか）

ユマの目に怪しく光る赤さが灯った。シェンビィ公に拷問を命じられた男が、焼き鑊ごてを手てにしている。

「声よ。誰かの声よ。さっきは俺が悪かった。だから助ける。助けてくれ！」

悲鳴にも似た叫びに答える者はなく、やがて、それは絶叫に変わった。

気が狂うような熱さと、自分の肉が焼け焦げる臭いに、ユマは気を失うことすら許されず、苦しみ続けた。

「お前はローファン伯に命令されて、我が家人を殺した。そうだな？」

と、問いかけても、はい——と答えようとするれば舌が痺れ、頷こうとすれば痺れが喉の奥にまで及んで窒息しそうになった。ユマの精神は既に拷問に屈しているのに、体だけがそれを拒絶していた。

ユマは、ふと、キダの踵かかとにかけられた呪いまじなを思い出した。だが、思考が何かを繋ごうとする度に、神経が焼ききれるような激痛に襲われて、頭が真っ白になった。

（何故、俺は狂わないのか……）

終わることのない苦痛に、ユマはいつの間にか自我の崩壊を待ち望むようになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5984z/>

貴く翔べ

2012年1月8日01時45分発行